
ろーぷれ

めろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ろーぷれ

【Nコード】
N5911C

【作者名】
めろん

【あらすじ】
十五歳の夏休みの最終日、四人は気付けば異世界に。元の世界に戻る唯一の方法は、この世界に君臨する十体の強敵を打ち倒すこと。はたして、ほのぼの剣士と無表情白魔道士と黒い黒魔道士とツッコミ盗賊は、無事帰還することが出来るのでしょうか？

第1話 夏休みの最終日

「いい天気だなあ」

早秋の爽やかな空気が漂うなか、一人の少年がそう言った。

その少年は、少し短めの白髪のような銀髪を涼しい秋の風に踊らせ、灰色がかった瞳で美しく秋晴れした青い空を仰いでいる。

『わんっ！』

少年の手にはリードが握られていて、それにはもこもこした白い大きな犬が繋がれていた。

先程まで行儀よく少年の隣に座っていたその犬は、何かの気配を感じ取り、立ち上がって吠え始めた。

『わんわんわんっ！』

「？ どうしたの、モコモコ？」

それを不思議に思い、少年が彼の飼い犬“モコモコ”に顔を向け、彼が吠えている方に目を動かした。

「！ 葵」

その先には、背が高い少年が立っていた。

美しく整った顔立ちのその少年の瞳と、真っ直ぐにすればおかつぱになるであろう癖のついた髪は、どちらも漆黒に染まっている。

自分が吠えられていることに気が付いた彼は、自分に向かって吠えているモコモコに目を向けた後、その隣に立っている銀髪の少年の

名前を呟いた。

「あ、おはよう、悠」

葵と呼ばれた銀髪の少年、“日向葵”^{ひゅうが あおい}は、自分の名前を呼んだ少年に微笑みを向けながら挨拶をした。

「散歩か？」

悠と呼ばれた黒髪の少年、“石黒悠”^{いしぐろ ゆう}は、葵の挨拶を小さく頷いて返した後でそう尋ねた。

「うん。悠は何をしてるの？」

その質問に答えた後、まだ吠えているモコモコを静かにさせ、悠に同じ質問をする葵。

「まあ、そっちと同じようなものだ」

「え？ 悠もマーキングしてるの？」

「……変質者か、俺は？」

二人がそんな会話をしていると、

「あ！ おっはよー、葵、悠！ 何してるのー？」

「麗、近所迷惑、です」

彼らの後ろから、二人の少女が現れた。

「あ、おはよう、麗と鈴」

「……散歩だ」

少女の挨拶に応える葵と少女の質問に答える悠。

「うっわ、暇だねあんたら？」

それを聞いて、二人に挨拶と質問をした少女“芦川^{あしかわ} 麗^{りい}”がそう言った。

どこか猫を思わせる顔をした彼女は、長い、狐色の髪を二つに分けて、耳の上で縛っている。

「そっちは何してるの？」

麗の言葉を聞いて、葵が尋ね返すと、

「鈴、麗に呼び出された、です」

機械のような淡々とした口調で、もう一人の少女が答えた。
自分のことを鈴と言うその少女の名前は“白鳥^{しろとり} 鈴^{りん}”。

彼女の肩まである髪と、まるで感情が籠っていないような瞳は栗色をしている。

「呼び出された？」

鈴の言葉に、葵は首を傾げながら麗の方を向いた。

「あ、そうそう、丁度よかった！ 暇なんですよ？ なら、葵と悠

も手伝つてよ！」

ぽん、と手を叩きながら麗が言うと、

「何を？」

「断る」

葵は目的語を尋ね、悠はさらりと断った。

「……で、なんで僕の家なの？」

冷たいお茶をそれぞれに出した後、一息置いてから葵が麗に尋ねると、

「だって、あそこから葵の家が一番近かったんだもん」

麗は荷物を降ろしながらけろりと答えた。

「……と言つか、俺は断った筈だが？」

「今日の運勢、天秤座は最下位、です」

「そうか。だが、俺は水瓶座だからそれは特に関係ないと思うぞ?」

「鈴、天秤座、です」

「どんまい」

彼女の隣でお茶を頂きながら、そんな会話をする悠と鈴。

「じゃあ、早速やりますか!」

麗はそう言って、鞆から夏休みの宿題をどっさり出した。夏休みの最終日という今日の日には宿題を終わらせるべく、麗は三人に助けを求めたのであった。

「うん。頑張つて」

「ファイト、です」

「……一応応援しておく」

が、三人は応援の言葉を贈っただけで、それ以上は特に行動を示さなかった。

「……え? あれれ!? 手伝ってくれないの?!」

手伝う気が皆無な三人を見て焦り出す麗。

「宿題は自分でやるもの、です」

「めんどい。そして以下同文」

そんな彼女に鈴と悠がさりとそう言った。

「そつ、そんな殺生なあゝ……」

二人の冷たい態度に、思わず日常会話に用いないような言葉を発する麗。

「？　なんだろ、これ？」

その時、自分の机の上に一枚のディスクが置いてあることに気が付いた葵は、それを手に取ってタイトルを読みあげてみた。

「　ろーぷれ　」

と。

「……随分とぞんざいなタイトルだな？」

「うん。……こんなの家にあつたっけ？」

隣から覗き込んできた悠の言葉に頷いた後、小首を傾げる葵。

「……それは、ゲーム、ですか？」

「うん。多分」

反対隣から覗き込んできた鈴の言葉に葵が頷くと、

「……暇潰しには丁度いいな?」

悠がにやりと笑いながらそう言った。

「!?!? ちょっと?! 私が勉強してるのにゲームなんかやる気!?!?」

その言葉を聞いて、麗が勢いよく振り向いた。

「だって暇じゃん。ぷ」

「くそう、腹黒!! 今度から石黒悠じゃなくて腹黒悠って呼んでやるッ!!」

右手を口元に当てながら言った悠の言葉に、声を荒げる麗。

「麗」

すると、そんな彼女に鈴が静かに声をかけた。

「あによ!?!?」

麗が鈴の方を向くと、

「……夏休み終了まで、あと十四時間、です」

さらりと鈴がそう言った。

「危機感MAXなカウントダウンやめてよ、鈴?!」

「わあ、ゲームなんて久しぶりだなあ」

ヒステリックな麗を気にも留めずに、葵はディスクを機械にセットした。

「つて、ちよつと葵!？」

麗の突っ込みも虚しく、葵はそのまま電源を入れるスイッチを押した。

——その次の瞬間、

「「?!」」

フツ、と足場が消え、その代わりに現れた暗闇の世界に、四人は落ちていった。

第2話 見習い剣士

白い雲が浮かぶ青い空の下、緑の草原に一人の少年が倒れていた。

「う……いたた……」

その銀髪の少年、葵は、目が覚めると、頭を押さえながらゆっくりと起き上がった。

「……あれ？ 悠？」

先程まで自分の隣にいた筈の友人の名前を呼ぶ葵。

「鈴と麗もいない……って言うか」

葵はキョロキョロと辺りを見渡しながら、

「此処は何処だろう？」

誰もいない広大な草原で、ぼつりとそう口にした。

「圏外……だよな」

ポケットに入っていたケータイを開き、圏外の表示を見、溜め息をつきながらケータイをぱこつと閉じて元の場所にしまう葵。

「……どうしよう……？」

葵がぺたりと力なくそこに座り込むと、

『にー』

背後から猫のような鳴き声が聞こえてきた。

「？」

『にー、にー』

不思議に思っ て振り向いて見ると、そこには四十センチメートルくらいのネズミのような生物がいた。

「……君、一人？ 親はどうしたの？」

が、葵は特に驚いた様子もなく、不思議生物の方に体を向けて、その頭を撫でながら尋ねた。

『にー』

その問いに答えるように、不思議生物が一鳴きした。すると、ボコツと地面が盛り上がり、そこから倍ぐらい大きい巨大ネズミが現れた。

「あ、よかった。ちゃんといたんだね」

巨大ネズミの後ろに現れた超巨大ネズミを見て、葵が安心したようにそう言った矢先、

『グルルルルルル……』

超巨大ネズミは葵に鋭い眼光を向け、尻尾を逆立てながら低く唸った。

「……ええと、もしかして威嚇してる？」

そんな超巨大ネズミの様子を見て、葵は額から冷や汗が滲み出た。

『フシャー！！』

「うわあっ！？」

葵は、予想通り襲いかかってきた超巨大ネズミの攻撃をなんとかかわすと、

「ま、待って下さい？ 僕は別にあなたのお子さんに危害を加えるつもりはありませんよ？」

和解を試みた。

『フシャー！！』

が、予想通り無理だった。

「うーん……ここは退いた方が良さそうだね」

賢明な判断をした葵が、それを実行しようと体の向きを変えると、

『にー』

と、巨大ネズミが鳴き、

『『グルルルル……』』

ポコポコツと、更に二体の巨大ネズミが地面から現れた。

「……ねえ、あれって君のお母さんとお姉さん？」

葵がそう言いながら方向転換をすると、

『にー』

巨大ネズミが鳴き、更に三体の巨大ネズミが現れた。

「ええと……あれは君のお兄さんとお祖父さんとお祖母さん？」

そんなことを言った後、顔を青くしながら残った一方向に葵が体を向けると、

『にー、にー』

『『フシャー！！』』

またしても巨大ネズミが鳴き、更に五体の巨大ネズミが現れた。

「……わあ……君の家って大家族なんだね……？」

顔面蒼白になった葵がそう言い終わった直後、

『『キシヤー！！』』

計十二体の巨大ネズミが四方から葵に飛びかかった。

「うわあああああ!？」

その瞬間、巨大ネズミたちの下をくぐって攻撃から逃れた葵は、そのまま勢いよく逃げ出した。

『キシヤー!!!』

巨大ネズミたちは、もちろん葵を追ってくる。

「どどど、どうしよう? どうしよう!? どうしよう?!」

パニック状態に陥ってしまったのか、頭を抱えながら全速力で走る葵。

「!」

その時、葵は自分が背負っている物に初めて気が付いた。

「これは……剣!？」

そう呟いた後、走りながら器用にスラリと鞘から剣を抜く葵。するとそこから、刀身の長い、美しい鋼の光沢を放つ諸刃の剣が出現した。

——これがあれば、巨大ネズミたちを退治することが出来る。そう思ったのだが、葵には問題が一つあった。

「僕、剣なんか使ったことないよー!!」

どうやって剣を扱うのかが分からなかったのである。

「……………！」

が、すぐに葵はそんなことも言っていられなくなってしまった。
何故ならば、前方に街が見えてきたから。

「……………」

——このままだと、巨大ネズミたちまで街に入ってしまう。
そう思った葵は意を決して足を止め、巨大ネズミたちの方に向き直った。

『『キシヤー！！』』

その間、巨大ネズミたちは間合いを詰め、攻撃範囲内に入った所で葵に飛びかかった。

「……………いち、に、」

剣を右手に持った葵は、一で構え、二で大きく後ろに引き、

「さーんっ！！」

『『グギヤ——…』』

三で思い切りスイングし、その軌道は見事に巨大ネズミたちを切り裂いた。

……………このフォームは……………。

「……ふう、テニスやってて良かったあ」

額に掻いた冷や汗を拭いながら、葵はそんなことを呟くのであった。

第3話 白魔道士

葵に一刀両断された巨大ネズミたちは、息を引き取ると同時に、白い光に包まれた。

「？」

突然光に包まれた巨大ネズミたちを見て、小首を傾げる葵。すると、それらは砕け、無数の光の粒となって青空へと帰っていった。

「……ええと、ご冥福をお祈りします」

ぱむつと合掌しながら葵がそう呟くと、

「す、凄いですー!!」

と、背後から歓声があがった。

「え？」

葵がその声に振り向くと、

「あ、あの、剣士様ですよね!? 遠方からわざわざこの国にいらしてくれて嬉しいですー!!」

金髪の少年が駆け寄ってきながらそう言った。

「え? いや、僕は剣士なんかじゃー……」

「え?! 見習い剣士様なんですか!? こ、これは失礼いたしました!!」

「い、いや、だから……」

「見習いであそこまで強いなんて……私、尊敬します!!」

興奮しすぎて葵の話聞く余裕がないのか、少年は葵の左手を掴むと、

「見習い剣士様は十分お強いと思いますが、魔物退治には体力が必要です!! ですから、私の街でゆつくりと休んでからご出発してください!!」

そのまま葵を街に連れ込もうと引つ張った。

「……? 魔物?」

少年に引つ張られながら、先程の言葉に小首を傾げる葵。

「? 何をとぼけていらっしやるんです? “魔物”とは、体内に邪悪な魔力を宿した生き物の総称です。って言いますか、貴方、先程それを見事に倒したじゃないですか!」

それを見て、葵がふざけていると思ったのか、少年は笑いながらそう言った。

「……」

さも当然のようにファンタジーな説明を自分にした少年に、

「……ええと、此処は何処で、あなたは誰ですか？」

葵はゆっくりと質問を試してみた。

「……？ 此処はシードリース王国で……あ、名前はまだでしたね！ 申し遅れました！ 私はラフカディオ〃シードリースです！」

そう言いながら、恭しくお辞儀をする少年、ラフカディオ。もちろん、国と同じ名字を持つ彼は、

「……もしかして、王子様？」

「はい！」

だった。

聞いたこともない国名、明らかに日本人離れた名前と容姿、それなのに、何故か普通に通じる言葉、そして、魔物。これらのことを通し、

「……此処……ゲームの中なんだ……？」

葵はようやくその事に気が付いた。

そして、なんだか少し、悲しくなった。

翌朝。

「あ、葵様！」

「？ ラフカディオ？」

「ま……間に合ってよかったです」

魔物退治に行く為、丁度街の門を出ようとしていた葵を、慌てて走ってきたラフカディオが呼び止めた。

「どうしたんですか？」

「葵様お一人では何かと大変だと思ったので、お仲間にと……」

葵の問いに、ラフカディオは息を整えてからその顔を上げ、

「街の教会にいらっしゃった、白魔道士さんをお連れしました！」

と言いながら、自分の後ろにいた人物が葵に見えるように、右にずれた。

「白魔……って、鈴!？」

すると現れた真っ白なローブを身に纏い、フードを被り、頭の方がぐるぐるとぐるを巻いている典型的な木製の杖を持った少女を見て、驚きの声をあげる葵。

「！ 葵……お久しぶり、です」

葵を見て、少女、鈴も、無表情ながら驚いた声を発した。

「……？ お二人は、お知り合いなんですか？」

その問い掛けに頷いて答えた二人を見て、

「そうですか……お二人がお友達でよかったです」

自分も少しは役に立てたのだと分かり、ラフカディオは胸を撫で下ろした。

「……では、お二人とも、お気を付けて！！」

「はい。鈴を連れてきてくれてありがとうございました、ラー……」

そう言ってくれたラフカディオにお礼を言っている途中で、

「わっ！？」

葵の眉間に、杖の鋭く尖った方が勢いよく向かってきた。

「り、鈴さん！？」

それをなんとかかわした葵を見て安堵した後、彼に不意打ちを仕掛けた人物の名前を叫ぶラフカディオ。
すると、

「……今日の味方は明日の敵、に、なるかもしれないので、今うちを殺そうと思った、です」

鈴は淡々とした口調でそう言った。

「あ、成程」

「いや、納得しないで下さい葵様?! って言いますか、そんな杞憂レベルで人を殺そうと思わないで下さい鈴さん!？」

すんなりと納得した葵と、平気でそんなことを口にした鈴に突っ込みを入れるラフカディオ。

「分かりました、です」

彼に言われたことを了解した鈴は、葵の顔のすぐ横に突き出したままの杖を引き戻し、

「うわあっ!？」

再び突き出した。

「こっ、今度はなんですか!？」

ラフカディオは再び見事にかわしてくれた葵に安堵した後、不意打ち第二弾の理由を鈴に尋ねた。

すると、

「……寝首を搔かれないうつ、今のうちに殺そうと思った、です」

鈴は先程と同じ口調でそう言った。

「流石鈴だね」

「どんだけ人を信じていないんですか鈴さん?!　って言いますか、笑い事じゃないですよ葵様!?!　って言いますが、貴方たちは本当にお友達なんですかー?!?!」

笑いながらまたしてもすんなりと納得した葵と、人をまったく信用していないような鈴に、精一杯の突っ込みを入れるラフカディオであった。

「わあ、凄いですね。ツツコミ三連発」

「ご苦労様、です」

「……もう早く行って下さい……」

第4話 首尾一貫

少年と少女は、緑の草原に囲まれた茶色い道の上を歩いていた。

「……へえ、鈴も気が付いたら倒れてたんだ？」

剣を背負っている銀髪の少年、葵がそう言うと、

「目が覚めると、目の前に大きな虎がいた、です」

白いローブに身を包んでいる少女、鈴がこくりと頷いた。

「わあ、いきなり絶体絶命だね」

鈴の言葉を聞き、のほほんと笑いながら葵が言った。

その声と表情から、危機感がまったく感じられないのは気のせいではない。

「でも、何故か鈴はこの杖を持っていた、です」

「え？　じゃあ、鈴は杖で虎を倒したの？」

鈴の発言に、葵が質問をすると、

「首尾一貫、です」

頷きながら鈴が答えた。

「……ええと、その言葉と杖の使い方間違ってるよ、とか思ってい

いかな？」

確認の為に再び尋ねる葵。

「……読んで字の通り、首から尻尾まで一直線に貫いて殺った、です」

“やった”のニュアンスを故意に変える鈴。

「……うん。そうだと思った」

予想通りとはいえ、首の辺りが痛くなる葵であった。

「魔物の血は……青い、です」

「魔物……そう言えば、僕たち異世界にいるんだよね？」

無表情の彼女から発せられた危険な歓喜を帯た声に若干の恐怖を覚えた葵は、出来るだけ自然に話題転換をした。

「はい、そうでなければ、葵は銃砲刀剣類所持等取締法、略して銃刀法を違反してる、です」

「……あ、そう言えばそうだね」

すると、鈴がいつもの声に戻ったので、葵は胸を撫で下ろした。

「……葵は見習い剣士、なのですか？」

そんな葵の背中にある剣を見て、鈴が口を開いた。

「うん。そうみたい」

「……葵、剣、使える……ですか？」

こくりと頷いた葵に更に質問をする鈴。

「うーん……よく分からないけど」

その問いに答えるべく、葵はスラリと剣を抜き、

『ぴぎゃあー!』

「取り敢えずラケットっぽく使ってるんだあ」

丁度襲いかかってきた兎のような魔物を返り討ちにしながらそう言った。

「……そう……ですか」

何か釈然としないものを感じるが、それで魔物が倒せるのだから、まあいいか、と無理矢理納得する鈴。

「ええと、鈴は白魔道士だっけ？」

すると、今度は葵が剣を鞘に収めながら鈴に尋ねた。

「はい、です」

「わ、じゃあ、もしかして魔法が使えたりするの？」

「……」

葵の質問に、

「葵」

「？」

「魔法とは、どうやって使う、ですか？」

鈴は質問で返した。

「え？ さ、さあ……？」

彼女の信じられない質問に葵が首を傾げた直後、

『あゝあゝあゝあゝ』

「うわあ！？」

葵は、突然足元から現れたゾンビに足を捕まれた。そのあまりの気持悪さに硬直してしまう葵。

「……そのテの魔物は、光魔法に弱い、気がする、です」

葵の足を掴んでいるゾンビを見て、鈴が呟いた。

「！ 光魔法って、なんか白魔道士も使えそうだよね？」

「はい、です」

「じゃあ……」

その言葉を聞いて、ぱあつと顔を明るくした葵に、

「どうやって使う、ですか？」

と、鈴が小首を傾げながら尋ねた。

「そ、そんなの知らないよ……って」

『あゝあゝあゝあゝ』

『いゝいゝいゝいゝ』

「わあ?! なんか増えてる!？」

鈴の問いに答えている途中で現れたもう一体のゾンビに右手を捕まれ、青い顔を更に青くする葵。

「り、鈴! なんか適当に呪文とか唱えてみたらどう!？」

そのニューゾンビのせいで剣を取ることが出来なくなってしまった葵は、まだ小首を傾げている鈴にそう言った。

「ちちんぷいぷーい」

鈴はこくりと頷き、本当に適当な呪文を唱えた後、

「……葵、駄目みたい、です」

と、葵に言った。

「そつか。うーん……どうすればいいんだろう?」

『あゝあゝあゝあゝ』

『いゝいゝいゝいゝ』

『うゝうゝうゝうゝ』

「って、考えてる場合じゃなかった!」

呑気に考え込んでいるうちにまたゾンビが増えてしまったので、葵は思考を停止し、

「鈴! もうなんでもいいから助けて!」

と、鈴に叫んだ。

「分かりました、です」

葵に助けを求められた鈴は、杖を強く握り直すと、

「首尾一貫!」

『えゝ——…』

葵を捕えているゾンビたちを、素早く杖で貫いた。

「……あ、ありがとう、鈴……」

鈴のおかげでゾンビから解放された葵は、

「……ええと、さっきのつて、技の名前？」

と、一応聞いてみた。

「はい、です」

こうして、物理攻撃中心の白魔道士が誕生した。

太陽が真南に昇った頃、葵と鈴は大きな洞窟に辿り着いた。

「……此处が“ぬるぬる洞窟”……ですね」

「うん。名前からして出来れば入りたくないね」

「はい、です」

そんな会話をする葵と鈴だが、一国の王子、ラフカディオから、こ

の洞窟の魔物退治の依頼を引き受けてしまった以上、二人がそのまま帰ることは許されないのであった。

「でも、それなら何故葵はこの依頼を引き受けた、ですか？」

鈴が小首を傾げながら尋ねると、

「え？ あ、断るのが面倒だったから」

「……」

という答えが返ってきたので、鈴は思わずポカンと口を開けた。

「鈴はどうして引き受けたの？」

すると、葵が尋ね返してきたので、

「報酬が出るから、です」

鈴はいつもの調子でそう言った。

「え？」

思わぬ言葉が飛び出したので、今度は葵が口を開ける羽目になった。

「あの金髪が、この洞窟にいるボスキャラを倒せば報酬をくれると言ったから、です」

そんな葵に、鈴が詳しく説明した。

「……ええと、その報酬って、いくらぐらいなの？」

「鈴の言い値、で、いいらしい、です」

「言い……」

鈴の言い値と聞いて固まる葵。

「……口は禍の元、です」

「……うん。そうだね」

まったく表情を変えずにどす黒い歡喜に満ち溢れた声を発する鈴とともに、葵はぬるぬる洞窟に入っていた。

第5話　ぬるぬる洞窟

「わあ……結構暗いね」

「はい、それに、ぬるぬるしてる、です」

「うん。気持悪いね」

薄暗く、じめじめしている上に、何故か地面や岩がぬるぬるとしている洞窟の中を進む葵と鈴。

「……そして、生臭い、です」

そう言って、手で鼻を覆う鈴。

「……まあ」

『あゝあゝあゝ——…』

そんな鈴に、葵は自分の正面に出現したゾンビを剣で倒した後、

「これだけゾンビだらけなんだからしょうがないよ」

と、言った。

葵の言う通り、此处、ぬるぬる洞窟には、異常なまでに多くのゾンビがうつろっているのだった。

「……わざわざ殺されに来るなんて、馬鹿、です」

後ろから奇襲を仕掛けようとしたゾンビを杖で貫きながら、ぽつり
呟く鈴。

「うーん……って言うか、ゾンビってほんとに死んでるよね？ 中
途半端に」

弱く笑いながらそう言った後、今度は足元から現れたゾンビの脳天
に剣を突き刺す葵。

「……成程……彼らは悪臭を放つ腐敗した自分の体に嫌気が差し、
自分を殺してもらった旅人が現れては殺しにかかり、まあ、ただ
殺されに行くのもなんだから、あわよくばその水々しく健康な体を
乗っ取るうという魂胆を持っている、ですね？」

すると、鈴が光の粒になって消えていったゾンビを見ながら言った。

「の、乗っ取……？」

それを葵が聞き返すと、

「彼ら、ゾンビの最強奥技は、“略奪の口付け”、です」

と、鈴が言った。

「……え？」

「……彼らに唇を奪われると、ついでに魂も奪われてしまう、です」
小首を傾げた葵に淡々と説明する鈴。

「……ええと、詰まり、このゾンビたちは唇を狙ってるってこと？」

顔を青くしながら、葵は鈴に最終確認をした。

「はい、です」

『うう——…』

「えいつー!!」

鈴が頷いた瞬間、現れたゾンビに今まで以上の気持悪さを感じた葵は、それを瞬殺した後、

「……あ、そう言えば、どうしてそんなことを知ってるの？」

ふと気が付いたことをそのまま質問した。

「街の教会で、“魔本”を貰った、です」

すると、鈴は鞆を開け、葵に分厚い本を手渡した。

「？ 魔本？」

「魔物の図鑑、です」

「へえ」

魔本を受け取った葵は、薄暗い為にほとんど書いてある内容などは見えないのだが、取り敢えずそれをパラパラと捲ってみた。すると、

「やりましたね、葵」

「え？」

と、鈴が言ったので、葵は本から目を離して顔を上げた。

「モテモテ、です」

『『あゝあゝあゝあゝ』』

「……うわあ……全然嬉しくない」

葵は、いつの間にかゾンビの大群に行く手を阻まれていた。

ゾンビにモテてももちろん全然嬉しくない葵は、ジリツと後退りをした。

『『あゝあゝあゝあゝいゝらゝひゝゆー』』

すると、ゾンビたちが葵に絶叫告白しながら襲いかかってきた。

「うわああああ……あ？」

素早く方向転換して逃げ出した葵の足は、突然空を踏んだ。

薄暗いせいでその池のような巨大な水溜まりの存在に気が付かなかったのか、葵は見事に水の中にドボンと落下した。

「！ 葵！」

その水の音を聞いて、思わず声を大きくする鈴。

——何故なら、彼女は葵が泳げないことを知っていたから。

「ど、どうしよう!? 僕全然泳げなっ…… たっ助けてっ!!」

カナツチの葵がバシャバシャと水しぶきをあげながら必死に助けを求めると、

『あゝあゝあゝ』

ゾンビたちが次々と水の中に足をつけ始めた。

「えええ?! い、いや、君たちじゃなくて……」

その光景を見て、葵が溺れながら突っ込みを入れていると、

「大丈夫か、葵?」

「!」

すぐ後ろから聞き覚えがある声がした。

それに次いでその声の主の腕に抱かれた葵は、バシャバシャと暴れるのを止め、後ろを振り向いた。

「……おい、ゾンビ。それ以上入るな」

そこには、葵が思い描いた通り、黒髪の少年、悠がいた。

『あゝあゝあゝ?』

悠の言葉が理解出来ないのか、それを無視してずぶずぶと水の中に

入るゾンビたちに、

「煮崩れ起こすぞ?」

と、悠が言った。

『『あゝあ……!!』』

その言葉通り、ゾンビたちは水中で崩れた。

それを煮崩れとは言わないのであるうが、彼らの形をなんとか保っていたボロボロの皮膚は水に入るなり破け、支えを失った彼らの腐敗したはらわたは、水中に拡散した。

「『……』」

あまりのグロテスクな光景に顔を青くする葵と鈴。

「あーあ、ぐちゃみそ」

「……ええと、助けてくれてありがとう、悠」

にも関わらず、それを楽しそうに眺める友人に、葵は取り敢えずお礼を言うのであった。

「……何故そんな格好で、水の中にいた、ですか？」

「は？」

葵とともに水から上がった悠の姿を見て、鈴は早速質問をした。それは、今小首を傾げた彼が、フードと袖口と裾に白いもこもこがついた黒いロングコートを着て、頭に黒いロングマフラーを帽子のように巻き付けているから。

「悠は寒がりだもんね？」

「あ、ああ。それだ」

それに答えるのが面倒だったのか、悠は葵が言った言葉に頷いた。

「……なら、何故水に入った、ですか？」

水を存分に含んでいる為になんか重くなっているであろうコートをしながら鈴が尋ねると、

「あんまり細かいことは気にするな」

と、悠が言った。

「分かりました、です」

彼の言葉に、鈴はこくりと頷いた。

「でも、マフラーは頭じゃなくて首に巻くものだよ、悠？」

すると、今度は葵が小首を傾げながら悠に尋ねた。

「お洒落だ」

「あ、お洒落かあ」

が、その問いはすぐに解決した。

「……ところで、なんでこんな所にいるんだ？」

二人の問いに答えた悠は、やっと自分が思ったことを二人に質問した。

「あ、ええと、僕たちは此处に魔物退治をしに来たんだよ」

「……魔物、退治？」

葵の答えに、悠は切れ長の瞳を若干見開いた。

「はい、この洞窟に巢食っている魔物を倒しにきた、です」

こくりと頷いた鈴は、更に説明を付け足すと、

「悠こそ、どうしてこんな所にいる、ですか？」

と、再び悠に尋ねた。

「……さあな。気が付いたら此处にいた」

「そう、ですか」

彼の答えにそう返す鈴。

「……まあ、気が付いたら別世界だったのは流石に驚いたな」

「はい、です」

悠と鈴の会話を聞き、

「うーん……どうすれば元の世界に帰れるんだろうね？」

と、葵が尋ねると、

「クリアすればいいんじゃないか？ ゲームだし」

「そう、ですね。ゲームだし、です」

二人はさらりと答えた。

「そっか。ゲームだしね。……あ、そう言えば、悠の職業は？」

「ん？ ああ、村人じ」

「悠なだけに？」

「流石葵だな」

「……この中にツッコミはない、ですか？」

葵と悠の会話を聞き、鈴はぽつりと呟いた。

『魔物退治だと?』

すると、何処からか突然声が聞こえてきた。

『ほう……あのガキ、まだ余に逆らう気か』

という独り言を聞き、

「……ええと、どなたですか?」

「独り言、怪しい、です」

「つつか話に入るタイミング遅すぎだろ」

三人はそれぞれ思ったことを口にした。

『なっ……!?!? い……いいだろう。お前たちも今までの討伐隊と同様に滅ぼしてくれようぞ!!』

すると、岩壁に巨大な穴が空き、三人の目の前に巨大なゾンビが現れた。

「……わあ、何これ?」

「ボスキャラだろうな」

「と、言うか、何故説明口調、なのですか?」

第6話 黒魔道士

巨大なゾンビを目の前にして、

「ボスキャラ？」

「ああ。多分な」

葵がそれを指さしながら尋ねると、悠がこくりと頷いた。

「ってことは、あれを倒せば元の世界に帰れるんだね？」

「……はい、その可能性もある、です」

「わあ！　じゃあ、頑張って倒さなくちゃね！」

鈴の返答を聞き、剣を抜きながら葵がそう言つと、

「はい、です」

鈴は彼に合わせるように杖を構え、

「おお、頼もしいな。応援してるぞ」

悠は岩に腰掛けてコートのポケットからきゅうりを取り出した。

「え？」

聞き間違いかと思い、ぱつと彼の方を振り向く葵。

「がんば」

すると、カリッという音を立ててきゅつりをかじりながら悠がそう言った。

「……悠も、です」

そんな彼に鈴が言うと、

「いや俺村人だし」

ポリポリときゅつりを噛み砕きながら悠が言った。

「そう、でしたね」

「うん。それじゃあ仕方ないね」

「いい奴らだなーお前ら」

それに素で納得して、彼をその場に残して巨大ゾンビに立ち向かっていった二人を見て、のほほんとそんなことを言う悠。

「いくよ！ フォアハンドーっ！」

「首尾一貫！」

「ついでにバックハンドーっ！」

「一意専心！」

葵は巨大ゾンビの足元をテニス風味に切りつけ、鈴はそれを杖で貫いた。

『フハハハハ！ その程度か！』

「うわあ！？」

「っ！」

しかし、巨大ゾンビはそれを嘲るように笑うと、いとも簡単に二人を吹っ飛ばした。

『……見習い剣士に物理攻撃しかない白魔道士……あの国ももう手がないようだな？』

そして、巨大ゾンビは、反対側の岩壁にまで吹っ飛んだ葵と鈴を見、にやりと顔を歪めてそう言った。

「うーん……どうしよう、鈴？ 僕たちの攻撃、全然効いてないみたいだよ？」

むせながらもゆっくりと起き上がった葵が言うと、

「葵、巨大化、です」

と、彼の隣で起き上がった鈴が返してきた。

「……うん。出来たらいいね？」

葵は取り敢えずそれに頷いた。

『フハハハハ！ これでこの金山は完全に余のものだ！！』

すると、自分の勝利を確信したのか、巨大ゾンビが狂ったように笑いながら言った。

「……え？ 金山？」

それを聞き、小首を傾げる葵。

「この戦い、必勝、です」

「わあ、鈴がやる気に満ち溢れてる」

同時にやる気に満ち溢れたお金が大好きな鈴に、葵は少し遠い目を向けた。

「……アンデッド系の魔物には、光魔法、です」

「うん。でも、使い方が分からないんでしょう？」

「はい、です」

葵と鈴がそんな会話をしていると、

「何？ 魔道士のクセに、魔法の使い方も分からないのか？」

悠が会話に割って入ってきた。

「……」

どことなくムツとした目で彼に顔を向ける鈴。
すると、

「ぷ。ダッサ」

と、悠が言った。

「……葵、アイツを倒す前にコイツを殺りましょう、です」

「おっ、落ち着いて、鈴っ?!」

杖を強く握った鈴をなだめようと試みる葵。

『フハハハハ！ ついに仲間割れか?』

その様子を見て、巨大ゾンビが笑った。

『使いものにならない仲間を持つと苦労するな、見習い剣士?』

「え?」

ゾンビが言った言葉に、小首を傾げる葵。

『……回復魔法も、余の弱点である光魔法も使えない白魔術士と』
すると、ゾンビは鈴を指さしながら言い、

『戦う力がない屑以下の存在クセに、変なものを食いながら大口を

叩く村人が仲間とはなあ！ フハハハハ！』

と、悠を指さしながらそう言った。

「……………」

「…………悪口は、よくないよ？」

特に反応を示さなかった二人の代わりに、葵は剣を握っている手にぐつと力を込めた。

「剣をしまえ、葵」

するとその時、悠が静かにそう言った。

「え？ でも……………」

「聞こえなかったか？ 剣をしまえ」

「う、うん…………分かった」

彼の静かに憤っている声に負け、剣をしまう葵。

『フハハハハ！ ついに諦め…………』

「…………きゅうりを侮辱するとは」

悠は巨大ゾンビの言葉を遮り、ポケットから一对の釵^{さい}を取り出した。ちなみに、釵とは、三ツ又のフォークの真ん中だけが伸びているような形をした武器のことである。

「貴様、死にたいらしいな？」

それを左右の手に持ち、構えた悠に、

「悠、自分のことはいい、ですか？」

鈴は一応尋ねてみた。

「……そんなもの、勝手に言わせておけ」

自分が馬鹿にされたことよりも、自分の大好物であるきゅうりが侮辱されたことの方に「立腹の悠は、

「それより、よく見ておくんだな、鈴」

鈴にそう言いながら、両手に持っていた釵を同時に投げた。

釵は、寸分変わらず巨大ゾンビの眉間に突き刺さった。

『フハハハハ！ 馬鹿か、お前は？ こんなものが余に効くとしても

——…』

その攻撃が痛くも痒くもなかったのか、ゾンビが笑いながら言った
その途中で、

「——暗雲の閃光は破滅をもたらす」

と、悠は呪文を唱えた。

『なっ』

直後、凄まじい雷鳴が轟いた。

辺りを白く染め尽すほどの雷は、金属で出来た釵に吸い寄せられ、ゾンビは驚く間もなく消し炭へと化していった。

「……馬鹿は貴様だ。自分から弱点バラすな。そして俺は村人じゃない」

どつと豪快に倒れたゾンビに、

「黒魔道士だ」

と、悠が言った。

その次の瞬間、ゾンビは光の粒となって消え失せた。

「……黒……魔道……士？」

突然の出来事に、ただただ驚く葵と鈴。

「ああ。分かったか、鈴？魔法を発動する為には、まず魔力を高め、その魔法のイメージを具現化し易い言葉を選び、それを詠唱する必要があるんだ」

そんな鈴に、悠は消えたゾンビが残っていた釵を拾いながらさりと言った。

「わ、分かりました……です」

「……って言うか、村人じゃなかったんだ……？」

驚きながらも、この中で悠が一番強いということを確認する鈴と葵であつた。

第7話 優しい心

「姉御ー！」

夕焼け空に大きな声が響いた。

「姉御姉御姉御姉御ー！」

その声の主である頭にバンダナを巻いた軽装の男は、自分の親分のことを連呼しながら、野営地にある大きなテントに飛込んだ。すると、がんとという鈍い音がテントに響いた。

「うつさいわね！ 一回呼ばれば分かるわよー！」

それは、彼が姉御と呼んだ少女に思い切りグーで殴られたからである。

テントの中にいた他の男たちは、その音に首をすくめていた。

「す……スンマセン……」

「つたく……で？ 何？」

頭に出来たたんこぶを押さえながら謝罪した男に、少女は腕を組ながらそう尋ねた。

「ザ・アジト！ つばい洞窟を見つけたんツスー！」

それで本来の目的を思い出した男は、目を輝かせながら少女に言った。

「はあ？」

「ザ・アジト！　っぽい洞窟を見つけたんツス！！」

「だから、一回で分かるって言ってるでしょう！？」

再び二回繰り返して同じことを言ったので、少女は再び男のことを殴った。

「す……スンマセン……」

「ったく……で？　その洞窟は何処にあんの？」

二段になったたんこぶを押さえながら再び謝罪した男に、溜め息をつきながら質問する少女。

「北ツス！」

「あつそ」

「北ツス！」

「消えたい？」

少女は、懲りずにまた発言を二回繰り返した男に、右手の全ての指と指の間にナイフを挟み、計四本のナイフを向けた。

「す……スンマセン……」

男は迷わず土下座した。

「……此処から北ね……」

少女は気にも留めずにその横を通ってテントの入り口を開けると、

「じゃあ、行くわよ、野郎共!!」

二つに縛った狐色の長い髪を揺らしながら振り向いてそう言った。

「「ういー!!」」

何故かフレンチに応答する野郎共であった。

「うーん……なかなか戻れないね?」

巨大ゾンビを倒した後、薄暗い洞窟の中で、葵が小首を傾げながら言った。

「多分、第二ステージに進め、ということだと思う、です」

すると、彼の隣で鈴がぼつりと呟いた。

「え？」

「……詰まり、この世界の……ラスボスを……倒すまでは帰れない……って……こと……だ」

彼女の言葉を聞き返した葵に、鈴に代わって悠がそう言った。

「ええ！？ そんな……」

その言葉に驚いた葵が悠に顔を向けると、

「悠！？」

葵は、悠が倒れていることに気が付いて更に驚いた。

「……恐らく、魔力の消費による疲労、ですね」

彼の横に座り込んだ葵の隣で鈴が言った。
どうやら、強力な魔法は反動が大きいようだ。

「……あ……葵……」

「な、何っ？」

悠は弱々しい声で彼の友人の名を呼び、

「きゅうりが食いたい」

と、さらりと言った。

「う、うん、分かった！　すぐ探してくるねっ！」

葵は大きく頷いて立ち上がり、

「鈴、悠を頼むね！」

と、言って何処かへ走っていった。

「……葵、本当に行った、です」

「流石葵だな。俺はそんな葵がきゅうりと同じくらい大好きだ」

「……食べ物と同列、ですか？」

止める間もなく走り去っていった葵を見ながら、そんな会話を
する
鈴と悠であった。

「……確かにザ・アジト！　って感じだけど……ちょっと暗いんじゃない？」

薄暗い洞窟の中に入り、少女は少し不満気な声を出した。

「え？ でも、暗い方がスリリングッスよ？」

「アジトがスリリングである必要性はまったくないと思うんだけど？」

少女が野郎Aと会話をしていると、

「あ、姉御！！ これ見て下さい！！！」

その後ろで、興奮した声で野郎Bが言った。

「んー？」

「これ、金ですよ！！！」

小首を傾げながら振り向いた少女に野郎Bが言つと、

「……え？ 金？！」

彼女は目を見開いた。

「姉御！ こつちにもありますよ！！！」

という声が多発したのを聞き、

「も……もしかして此処、金山！？」

少女はそう呟いた後で、

「よし、此処がアジトに大決定よーっ！！」

拳を振り上げながらそう言った。

「「ういー！！」」

それに喜んで同意する野郎共。

「では早速、各自、盗賊らしく金の採集に取り掛かりなさい！！」

「「ういー！！」」

そうして、少女と野郎共……盗賊たちは、散々になって金を集め始めた。

「うひひ。アニキ、金ですよ、金！！」

「おう！ これで俺らは大金持ちだな！」

ニヤニヤと笑いながら金を集める盗賊Bと盗賊C。

「ぐひっ……これでやっと母ちゃんの治療費払えるぜー！」

彼らの隣で、涙を拭いながら盗賊Aが言った。

「うんうん。よかったな、アンソニー！」

そんな彼に、ハンカチを差し出しながら盗賊Bがそう言つと、

「うーん……何処にあるんだろう？ きゅーり……」

「！」「」

彼らの背後から声が聞こえてきた。

（な、なんスか、あいつは！？）

ささっと岩陰に隠れた盗賊Bが、こちらに向かって歩いてきた銀髪を見ながら尋ねると、

（……奴はきつと、俺らのアジトに忍び込んで金を盗みに来た薄汚い盗賊だ）

と、盗賊Cが答えた。

（と、盗賊！？ う、薄汚え！！）

自分の立場を完全に忘れ去っている盗賊B。

（よし、奴を取っ捕まえて姉御に突き出すぞ！！）

（（ういー！！））

盗賊Cの言葉に、盗賊Aと盗賊Bが同意すると、三人は同時に岩陰を飛び出した。

「おい！！ あ、いや、そこのおじいさん！！」

そして、盗賊Bが第一声を発すると、

「……ええと、あの、僕まだ十五歳なんですけど？」

と、銀髪の少年、葵が言った。

「何！？ ごっ、ごめんなさい！！」

「あ、いえ、気にしないで下さい。よく言われますから」

慌てて謝った盗賊Bを、葵は微笑みを向けながら快く許した。

「か、可哀想だな……」

「じゃ、ねえだろっ！！ おい、小僧！！ 此处で何している！？」

そんな彼に同情している盗賊Bに一喝入れた後、盗賊Cが尋ねた。

「きゅうりを探してます」

「「きゅうり？」」

葵の答えに小首を傾げる三人。

「はい……倒れてしまった友達が、どうしてもきゅうりが食べたいって……」

「ば、馬鹿!! どうしてそれを早く言わねえ!？」

葵の言葉を聞き、盗賊Aが大きな声でそう言った。

「え？」

葵が小首を傾げている間に三人はどどどと彼らの本部に戻り、大きな籠を持ってどどどと戻ってきた。

「「お大事になー!」」

そして、持ってきた籠を葵に手渡した。

「こんなに沢山……!! あ、ありがとうございます!」

大きな籠いっぱいに入ったきゅうりを見て、驚きながらお礼を言う葵。

「いいってことよ!」

「困った時はお互い様だぜ!」

「おう! その友達に早く持ってってやれよ!」

そう言いながら笑顔を見せる三人。

「はい!! 本当にありがとうございました!」

葵は彼らにペコリと頭を下げると、籠を抱えて走っていった。

「……良いことしたな、俺ら」

「ああ……一回お礼言われたな」

「友達……元気になるといいな」

「うんうん」

どこか盗賊らしくない盗賊であった。

「お待たせ、悠！」

「葵、おかえりなさい、で……」

「……!?」

鈴と悠は、葵が抱えてきた籠を見て目を見開いた。

「はい、きゅうりー！」

にこつと笑いながら、きゅうりが沢山入った籠をどさつと悠に手渡す葵。

「あ……ありがとう!! 俺は幸せだ!!」

「……ゆ、悠が……笑ってる……です」

悠の、人を小馬鹿にしたような笑みではない心からの笑顔を初めて見て、鈴は更に驚くのであった。

第8話 きゅり

金を大量に手に入れた少女が、上機嫌で彼女たちの荷物が置いてある所に戻ると、

「うええ！？ きゅりがなーい?!」

頭を抱えながら叫んだ。

その声に驚き、盗賊たちは急いで自分たちの親分である彼女の元に慌てて駆け戻った。

「ちょっと！ どういうことよ!? きゅりがなくなってるじゃない!! 今日のご飯はあれだけなのよ?!」

少女は自分の頭から手を離すと、一番早く戻ってきた盗賊の胸ぐらを掴んで怒鳴った。

「い、いや……俺に言われても……」

「あ、姉御、今からこの金を売りに行けばいいんじゃないですか?」
突然親分に怒られてしまったので、その盗賊がしゅんとしてみると、彼の後ろの盗賊が提案した。

「お腹が空いてうーごーけーなーいー!」

すると、少女がじたばたしながら言った。

「（動いてんじゃないスカ）」

そう思っても、後が怖いので口に出せない盗賊たち。

「ふふふ……盗賊のものを盗むなんて、いい度胸じゃない」

少女はじたばたするのをぴたりと止めると、

「ってことで、野郎共！！ 今からきゅうりを盗んだ奴を探して取っ捕まえるわよ！！」

拳を高々と振り上げてそう言った。

「「う、ういー！！」」

ここで同意しないと後が怖いので同意する盗賊たち。

「……どうしよう、アニキ？」

「し……正直に謝った方がいいんじゃないんスか？」

その盗賊たちの最後尾の辺りに立っていた、きゅうりを持ち出した犯人である盗賊Bと盗賊Aが、小さな声で盗賊Cに言った。

「馬鹿！！ そんなことしたら浄土逝きは目に見えてる！！」

盗賊Aの提案を素早く打ち消す盗賊C。

「じゃ、じゃあどうしたら……？」

「う、うーん……少年はあっちに走ってったよな？」

盗賊Aの問いに、盗賊Cがそう言つと、

「そうッス」

盗賊Bがこくりと頷いた。

「よ、よし……ここは口封じの為に……」

「「まつ、まさか、アニキ……」」

「……早く洞窟から出てってもらおう！」

「「！　　ういー！」」

盗賊Cが危険な考えを持ち出さなかったことに安堵しつつ、二人はその考えに頷いた。

「やはりきゅうりは最高だな」

十本目のきゅうりを食べ終わった悠が言った。

「きゅうりの栄養価は、乏しい、です」

その隣で、手に持ったきゅうりを見ながら鈴がそう言つと、

「まあ、九十六パーセントが水分だからね」

きゅうりを一本食べ終わった葵が手を叩きながら言つた。

「美味ければなんの問題ないだろう？」

言いながら、十一本目のきゅうりに手を伸ばす悠。

「……そんなに美味しい、ですか？」

「ばかうま」

「悠って本当にきゅうりが好きなんだね」

三人がきゅうりの籠を囲んで談笑していると、

「あ、いつ、いましたよ、アニキ!!」

「「？」」

という声が聞こえてきたので、三人は同時にそちらを向いた。
その先には、盗賊Aがこつちを指差しながら立っていた。

「おお！」

「「でかしたぞ、アンソニー!!」」

彼のすぐ後ろに姿を見せた盗賊Cと、複数の男たちの声が重なった。

「「……え？」」

それに驚いて振り返る盗賊Aと盗賊Bと盗賊C。

彼らの後ろには、彼らの仲間の盗賊たちがずらりと並んでいた。
いつの間に？　と三人が固まっていると、

「あ、悠、あの人たちがきゅうりをくれ……」

と、葵がこちらを指差しながら言いかけたので、

「わー！！」

盗賊Cは大きな声を出してそれを遮った。

「「……？」」

そこに居合た者たちは、突然大声を出した盗賊Cに訝し気な視線を送った。

「「……はっはっ！　ついに見付けたぞ、このきゅうり泥棒！」

その視線に耐えられなかったのか、盗賊Cは葵たちを指差しながら言葉を付け足した。

「「あ、アニキ！？」」

「ええい、煩い！ あいつらには悪いがこうなりやヤケだ！」

小さい声を発して目を見開いた盗賊Aと盗賊Bに、盗賊Cも小声でそう言い返した。

「え？ な、何を言っているんですか？」

「あ、葵……俺の為に罪を侵してまできゅつりを……っ！？」

盗賊Cの言葉を聞いて動揺する葵と、彼に感動したような目を向ける悠。

「え？ いや、だから違……」

「たとえ違うとしても、向こうはやる気満々みたい、です」

慌てて否定しようとした葵に、鈴は静かに言った。

見ると、彼女の言う通り、盗賊たちは手に手に武器を取って構えている。

「え……えええ？！ ど、どうしよう！？」

それを見てうろたえる葵。

「……俺に任せろ」

悠は、そんな彼の頭にぽんと手を乗せると、

「天空を巡る無形の刃」

静かにそう唱えた。

同時に、ふわ、と盗賊たちの足元に風が産まれる。

「っっ!?!」

次の瞬間、それは勢いよく吹き上がり、いとも容易く彼らを宙に舞い上がらせ、見えない刃で切り刻んだ。

「……魔力……回復した、ですか？」

「ああ。流石きゅうりパワーだな」

そう言いながら、地に落ち、ぐったりと倒れた盗賊たちを見下ろす鈴と悠。

すると、盗賊たちが倒れている向こう側の暗がりで何かが光った。

「！ 危ない！」

「「!」」

それに気が付いた葵は、素早く剣を引き抜いて面を横にし、悠に向かって飛んできたそれをボレーの要領で弾き返した。

キーンと鋭い音を立て、葵の前に小型のナイフが落下した。

「あら、なかなかやるようね、きゅうり泥棒さん？」

三人が飛んできた物がそのナイフだと分かった頃、どこか笑いを含んだ声とともに、足音がこちらに近付いてきた。

「「……」」

その音がする方を油断なく見ながらそれぞれの武器を構える三人。

「盗賊に喧嘩売るたあ、いい度胸じゃない!!」

が、声の主である少女が現れた瞬間、その緊張はすぐに解かれた。

「……」

「……ええと、麗？」

「?! 葵に鈴に悠!？」

第9話 盗賊

「……ええと、詰まり、麗は盗賊なの？」

「そ。盗賊よ。かつこよく言えばシーフね」

葵の言葉に、麗は岩に座って、今晚の唯一の食糧であるきゅうりを食べながらそう応えた。

「いやゝ、目が覚めたらいきなりあいつらの親分になってた時は流石に驚いたわゝ」

「……まあ、いつかはやると思っていたが」

笑いながらそんなことを話す麗に、

「悪いことは言わん。早く自首しろ」

と、悠が言った。

「な、何言ってるのよ?! 盗賊はゲームの世界では何故か認められてる歴とした職業なのよ!？」

それに素早く突っ込みを入れる麗。

「いや殺人未遂の罪で」

突っ込みが終わったと同時にさらりと言い返す悠。

「なっ……何よ、悠って見掛けによらずちやいわね？　もう過ぎたコトじゃない！　しかも生きてるじゃない！　ってわけで結果オーライ！　気にしない、気にしない！」

「でも、ナイフを投げたことは確かなだし、ちゃんと悠に謝らなくちゃ」

殺されかけたことを気にするなという無茶なことを言い出した麗に、静かな声で葵が言った。

「謝っ？！　なんで私がこんな腹黒に！？　って言うか、こいつだって私の下僕×四十を吹っ飛ばしたじゃない！」

すると、その言葉に驚いた麗が反論した。

「あれはあの人たちが僕たちに剣を向けてきたからだよ？　……って言うか、下僕って……」

「詰まり、正当防衛だ」

「くっ……こんな腹黒に謝るなんて一生の不覚……っ！」

「麗？」

どうしても謝りたくないという態度を見せる彼女の名前を葵が呼ぶと、

「だって、暗くてよく見えなかった上に、こいつがいた辺りから魔物の気配がしたんだもん！！　だから魔物がいると思ってナイフ投げたんだもん！！」

「……？ 魔物は此処にはもういないよ？」

と、麗が言い、葵は小首を傾げてそう返した。

「でも確かに魔物の気配が――」

「……俺が魔物……か」

すると、悠がぽつりと呟いた。

「――！ ごめん、悠！ そんなつもりで言ったんじゃない……」

珍しくしおらしくなっている悠に驚き、慌てて頭を下げて謝る麗。

「ぷ。謝った」

それを見て、悠が右手を口に当てながらそう言った。

「ぶっ飛ばす――！」

「も、もうちょっと落ち着いてよ、麗？」

悠に殴りかかりそうになった、感情がころころと変わる麗を押さえながら葵が言うと、

「葵はテンションが低すぎんのよ――！ もっとハイパーに――！ ハイパーテンションになりなさい――！」

麗はくるりと葵に顔を向けてそう言った。

「？ 高血圧？」

すると、葵は小首を傾げながらハイパーテンションを素直に和訳した。

「あーもー、この白髪！！ 脳味噌まで老化しちゃってんじゃないの！？」

「こ、これは銀髪だよ！」

麗と葵がそんな口論をしている時、

「……イメージを具現化し易い言葉、ですか」

鈴は倒れた盗賊たちの前に立っていた。

「痛い、痛い、飛んでいけー」

鈴は、自分がイメージを具現化し易いと思った言葉を口にしてみた。

「……」

が、何も起こらない。

「……回復……癒す……白……光魔法……」

鈴はイメージし易い言葉を再び言葉を考え出した。

「……回復白」

そして、唱えた。

「なんだその命令文は？」

「！ 悠」

すると、いつの間にか隣にやって来た悠が突っ込みを入れた。

「呪文、難しい、です」

と、鈴が言っと、

「……お前が今から使おうとしている魔法の効果はなんだ？」

悠は問いを投げ掛けた。

「……？ ……癒し……」

その問いに、鈴は小首を傾げながら答えた。

「こいつらは何で傷付いた？」

「……風……」

再び質問され、答える鈴。

「……繋げて言ってみる」

それを聞いた後、悠が静かにそう言った。

「癒しの風」

彼の言う通りに鈴が繋げて言ってみると、

「！」

ぼう、と鈴の杖と接している地面が白く光った。

それと同時に、温かな光を伴った優しい風が、倒れている盗賊たちの上を吹き抜けていった。

「……お？ 痛くない？」

「！ 見ろ！ 傷が治ってるぞ！！」

「本当だ！！」

そのすぐ後に、先程まで倒れていたことが嘘のように盗賊たちは次々と元気に起き上がった。

「！ 鈴、魔法使えるようになったの！？」

「はへへ、鈴は白魔道士なのね？」

それを見て、驚きの声をあげる葵と麗。

「はい、です」

鈴は二人の言葉に頷いた後、

「悠、ありがとうございます、です」

と、悠にお礼を言った。

「きゅうり」

そんな彼女に、悠は手を出してきゅうり（お礼）を求めた。

次の日。

「あ……姉御、本当に行っちゃうんですか？」

ぬるぬる洞窟の前で、盗賊の一人が口を開いた。

「うん……世話になったわね、あんたたち！」

それに頷いて応える麗。

どうやら、麗も葵たちと一緒にいくことになったようだ。

「……ぐひっ……」

「も、もー、何よ!? あんたたち盗賊でしょう? だから……な
……泣くんじゃないわよ!」

麗は途端に涙ぐんだ盗賊たちに背を向けると、

「じゃ……元気でねっ……!」

震える声でそう言い残し、そのまま走り出した。

「……ええと、きゅうりありがとうございました」

「美味かったぞ」

「さようなら、です」

残った三人もそれぞれ盗賊たちに別れの挨拶をし、彼女の後を追うように歩き出した。

「……行つた?」

その場に残された盗賊たちの誰かが、確認するように誰にともなく尋ねた。

「行つた行つた」

返ってきた言葉で、麗がいなくなったことを確認すると、

「「おっしゃー!」!」」

と、盗賊たちは歓喜に溢れた声を発した。
まるで、自由を勝ち取った人々のように。

「……おっしゃー？」

「喜んでる、です」

「まあ、そんなもんだろ」

そんな会話をしながら、三人は勝手に感動して泣きながら走っていった麗を探すのだった。

第10話 報酬と旅立ち

日が高くなった頃、四人はシードリーブスの街に到着した。

「し、城だわ……！」

「城……だな」

「うん。お城だよ」

街の一番奥にある、美しく白く輝く巨大な王城を目の前にして、ぽかんと口を開けた麗と悠に、葵はこくりと頷いて返した。

「城だなんて、なんか本当にファンタジーな世界ね、此处！」

「うん、そうだね」

城門をくぐって城の中に入ると、麗が目を輝かせながら言った。広々とした城内の大理石で出来た床には真紅の絨毯が敷いてあり、高々と伸びる天井には巨大なシャンデリアがかかっている。

西洋の城を思わせるこのファンタジーな城を見回しながら、葵は彼女の言葉に同意した。

「城のくせに武器持っても何も言われないのか？」

葵の背中にある剣が目に入ったのか、悠が尤もな質問をした。

「うーん……前に来た時も何も言われなかったから、多分大丈夫なんじゃないかな？」

悠の問いに小首を傾げて返す葵。

とその時、城のメイドたちがこちらを見て、何か囁き合っていることに気が付いた。

「……相変わらず大人気ね、悠？」

「知るか」

それを茶化すように言った麗の言葉を悠が無表情でさらりと返すと、

「……此处、です」

今まで先頭を黙々と歩いていた鈴がぼつりと呟いた。

それを聞いて足を止める三人。

目の前の大きな扉の両脇に待機していた兵士は、葵と鈴を見ると、静かにその扉を開けた。

「！ 葵様、鈴さん！！」

四人が入室すると、金髪の王子、ラフカディオが椅子から立ち上がってこちらにやって来た。

「……と、お仲間さんですか？」

そう尋ね、葵と鈴の隣に立っている悠と麗が頷いたのを見て、

「こつ、此处に無事帰って来たということは、あの金山に巢食っていた恐ろしく強い悪魔を退治したんですね！？」

ラフカディオは目を輝かせながらそう確認した。

「はい、です」

それにこくりと頷いて答える鈴。

「……“恐ろしく強い”？　一発で勝ったぞ？」

「それはきつと、悠がものすごく強いからだよ」

「！　葵……」

彼女の後ろで小声でそんな会話をし、葵の言葉に照れる悠。

「ほつ、本当にありがとうございましたっ！！　一体なんとお礼したら良いのやらっ！！」

「いえいえそんなそんな！　お礼なんて結構ですよ！　札束で！」

ぺこぺこと頭を下げるラフカディオに、笑顔を向けながら麗が言った。

「麗、矛盾、です」

それに静かな突っ込みを入れる鈴。

「！　そうでしたね！　報酬を差し上げる約束でした！　で、では、おいしくらいがよろしいでしょうか？」

すると、ラフカディオは思い出したように、ぱつと顔を上げた。

「……？ 金額決まってるんですか？」

「はい。何分、このような依頼をするのは今回の件が初めてでしたので……」

「ふうん……じゃあ……」

彼の言葉を聞き、ニヤリと笑った麗が何か言いかけると、

「全部」

「「……え？」」

という声がそれを遮った。

同時にその声の主を振り返る麗とラフカディオ。

「有り金全部、ください、です」

声の主、鈴は、淡々とした声でそう言い放った。

「え？ えええ！？ な、何を仰っているんですか鈴さん？！」

慌てて彼女に突っ込みを入れるラフカディオ。

「相変わらずお金大好きね、鈴。ま、私もだけど」

「何とんでらっしゃるんですか！？」

「……こうしてこの国は滅んだ」

「何不吉なナレーションされてるんですか!？」

麗と悠にも突っ込みを入れた後、

「鈴、もう少し値段落としてあげよう?。」

「あ、葵様……!!」

という葵の救いの声に、ラフカディオは感動し、涙目になった。

「じゃあ、九割九分、下さい、です」

「どこら辺が緩和されたんですか、それは!？」

「流石鈴だね」

「葵様?!」

そして、ラフカディオの涙目は本当の涙に変わった。

「ったく、何よ? あんたがいくらいいかって聞いてきた
んでしょ?。」

敬語を使うのが面倒臭くなったのか、腕を組みながらため口を利く
麗に、

「い、いや、確かに言い値でいいと言いましたけど、そんな無茶苦
茶な……!」

必死で突っ込みを入れるラフカディオ。

「九割九分九厘、です」

「増えてるよ、鈴？」

「……こうして、この国の貧困生活が始まった」

「ま、そのうち復興するでしょ！ 気にしない、気にしない！」

「……悪魔だ……」

更に報酬を増やそうと試みている鈴と、それをくすりと笑って済ませる葵と、不吉なナレーションをする悠と、無茶な事を言う麗を見て、ラフカディオは涙ながらにそんなことを呟いた。

次の日の朝、街の門から四人が出発した。

「……結局、一割しか貰えなかった、です」

大きめの鞆を背負った鈴が残念そうに呟いた。

「まあ、一国の王子様にあそこまで頭を下げられちゃったら……それにこんなにいっぱいあるし、十分なんじゃないかな？」

「これだけあれば旅には困らないだろ」

彼女が背負っている、報酬がたんまりと入った鞆を見ながら葵と悠が言った。

「旅かあ……あ、ねえ」

悠の言葉を受け、

「私たち、何処に向かっているの？」

と、麗が質問をした。

「「さあ？」」

「……」

こうして、四人の旅が始まったのであった。

第11話 生き物

『ウウウウウ……』

野原の真ん中で、低い唸り声を出す大型犬のような魔物。

「……」

その濁った眼光の先には、剣を構えながら困ったという表情をした葵が立っている。

「そう言えば、悠はどうして魔法の使い方を知っていた、ですか？」

そこから少し距離を置いた安全地帯で、鈴が悠に質問をした。

「……河童に教わった」

「河童あ!？」

悠の答えを、麗は思わず聞き返した。

「だから、池の中から出てきた、ですか？」

鈴も無表情ながら驚いたような顔をして、もう一度質問をした。

「ああ」

それに、再びさりと答える悠。

「ちょ、ちょっと待ってよ!?　だって河童って言ったら妖怪で、それはこの世界でいう……」

「……魔物、だな」

悠は、麗の言葉を引き受けた。

「でしょう!?!　それに、魔物はどうしてだか知らないけど、有無を言わさず人間を襲ってくる生き物なのよ?!　それが、ご丁寧に自分を倒す為の魔法の使い方なんか人間に教えるわけないじゃない!?!」

それに頷いた後、自分の考えを述べる麗。

「……河童は親切な魔物、なのですね」

すると、鈴がぽつりと呟いた。

「きゅうり好きに悪い奴はいない」

「なんの格言?!」

鈴の言葉に頷いてみせた悠に突っ込みを入れる麗。

「優しい魔物もいる、ですな」

と、鈴が言つと、

「倒したかな」

「倒したんかい!!」

さらりと言った悠に、麗は再び突っ込みを入れた。

『ウウウウウウ……』

「……」

三人がそんな会話をしている時もずっと、葵は大型犬のような魔物と向かい合っていた。

「……？ 葵、先程から何をしている、ですか？」

剣を構えていながら何もしない彼に小首を傾げる鈴。

「あら？ そいつ、モコモコにそっくりね」

「……うん。それで思ったんだけど」

葵は麗が言った言葉に頷いた後、

「魔物を殺すことって、動物虐待にならないかな？」

先程から唸り声を発している、自分の飼い犬によく似た魔物を指差しながら言った。

「いや、なるわけないでしょう?!」

それに透かさず突っ込みを入れる麗。

「でも魔物も“生き物”だって、麗、さっき言ったよね？」

すると、葵が静かにそう言った。

「そつ……それは……そうだけど……」

「……魔物とは、なんらかの原因で生まれつき体内に邪悪な魔力を宿した生き物の総称だ」

そう言われてたじろいだ麗に代わって、悠が口を開いた。

「邪悪な魔力とそれに侵された脳は快楽を求め、時には自分の意志とは関係なく人間を襲う」

そして、淡々と語り続ける悠。

「……魔物は、人間を殺めることを楽しんでいるということ、ですね」

「……それが本心でないにしても、その思考は死ぬまで変わることはないし、変えることも出来ない」

鈴の言葉に頷いた後、悠はそう締め括った。

「詰まり、馬鹿は死ぬまで治らないってわけね」

成程、と納得しながら麗がそう言うつと、

「……試してみる、ですか？」

と、鈴が言った。

「ちょ?! 何杖構えてんのよ、鈴!? 私は魔物じゃないわよ?!」

杖を握り直した鈴を見て冷や汗を掻く麗。

「馬鹿つてことだろ」

「なんですつて!?!」

と、麗が悠に気を取られた隙について、

「首尾いつ―!」

鈴は素早く攻撃を繰り返そうとした。

「いやいやいや、ちょっと待ってよ!? 一億五千万歩譲って私が馬鹿だとしても、死んじやつたらそれが治ったかどうかなんて確かめられないじゃない!! ね!?!」

麗は大きな声を出して、それをなんとか停止させた。

「コンテニュー? ↓ イエス、で、多分、大丈夫、です」

「そこまでゲーム?! しかも確信なし!? って、いやあああああああああ?!」

連続突き攻撃を仕掛けてきた鈴から、麗は素早く逃げ出した。

「……詰まり、倒すことが魔物を救う唯一の方法ということだ」

二人を気にせずに悠がそう葵に言つと、

「……うん」

葵は小さく頷いて魔物を切り裂いた。

「……でも、“救う”だなんて偽善的な言葉だよね」

剣をしまいながらぽつりと呟く葵。

「それでもない」

「？」

葵は悠に顔を向けた。

「奴らは天に昇り、きつとまた蘇る」

悠は光の粒となって空に帰っていく魔物の魂を見上げながら、

「次は、ちゃんと望み通り行動出来る身となって」

と、しっかりとした声でそう言った。

「輪廻転生……ですね」

「……そっか。本当に、そうだといいね」

そう言つて、彼と同じように空を仰ぐ鈴と葵。

見上げた大空は、限りなく青く、どこまでも優しくった。

「ところで悠、このことを誰に聞いた、ですか？」

しばらくして、鈴が尋ねると、

「ん？ ああ、河童」

「また河童かい！！」

さらりと答えた悠に、鈴の攻撃から逃げ延びた麗が突っ込みを入れた。

第12話 祭りの町

辺りが薄暗くなり、星が空に輝きだした。

「ふう……やっと町に着いたね」

ようやく町に辿り着くことが出来、葵は少々疲れた様子で溜め息をついた。

「祭りの町」

彼の隣で、町の入り口にある門に書かれた文字を音読する鈴。

「何なに？　なんか楽しそうな町の名前ね！」

「……真っ暗だが？」

それを聞いて目を輝かせた麗に、悠が静かに突っ込んだ。

「ええと、みんな寝ちゃったのかな？」

「早寝早起き、です」

「いい心掛けだな」

「って、早すぎでしょ！」

小首を傾げながらの葵の発言と同じ意見を持った鈴と悠に、素早く突っ込みを入れる麗。

「うーん……宿屋さんは流石に起きてるよね？」

「……探してみましよう、です」

という流れで、四人はこの町の宿屋を探すことになった。

「何処の家も真っ暗……完全に名前負けしてるわね、この町」

歩きながら辺りを見回していた麗がそう言った。

彼女の言う通り、この町には一軒も明かりがついた家が存在していなかった。

それどころか、竜巻にでも見舞われたのか、時々、破壊された家が目に入る。

明かりは、道の両脇に所々にある街灯だけである。

「電気代の節約だろ」

「それに、真っ暗にした方が良く休めるらしいよ？」

「だから、そういう問題じゃないでしょ!？」

麗は、物事を深く考えている様子がまったくない悠と葵に突っ込みを入れた。

「……あそこに、“宿屋”という看板がある、です」

すると、鈴が静かにそう言った。

「まんまだな」

さらりと感想を述べる悠。

「“閉店”って書いてあるよ?」

宿屋の扉の前に立ち、葵はそこに貼ってある張り紙を指差しながら言った。

「まんまだな」

再びさらりと感想を述べる悠。

「ちよっ……それじゃあ、どうすんのよ!？」

「野宿、です」

「野宿って……やっと町に辿り着いたのに?！」

「閉店、仕方ない、です」

「あーもー!! 今の時代は二十四時間営業が基本でしょー!？」

「コンビニと宿屋は違う、です」

頭を抱えながら嘆く麗に淡々と言葉を返す鈴。

「……?」

その時、ふと、悠の目に宿屋の屋根に刺さった白い矢が映った。

「開けよウラァ!!」

「お、落ち着いてよ、麗？ ほら、ばっちり鍵も閉まってるし……」

暴れだした麗を止めるべく葵がそう言つと、

「……なら、お前の出番だな」

何かを思い付いた悠は、矢から目を離して麗にそう言った。

「は？」

「お前の職業はなんだ？」

小首を傾げた麗にさらりと質問する悠。

「……！ 任しといて!!」

その言葉にピーンときた麗は、自分が身に付けている大きめのポシエットから、いくつかの怪しげな道具を取り出した。

そして、彼女はそれらの道具を使って鍵穴をいじくりだした。

——そう、彼女は盗賊。

「……ええと、これは犯罪なんじゃ……？」

「気にしな―い、気にしない、つと！ ほい、終わり!」

その行動に対しての葵の発言をさらりと流した後、ガチャツという音がして、麗はにこりと笑いながらそう言った。

「三秒……手練れ、です」

鈴の呟きを背後に聞きながら、麗が宿屋のドアを開けると、

「……ひっ……ひっ……」

暗い室内から、すすり泣く声が聞こえてきた。

「っ！」

それに驚いて、とつさに隣にいた悠のコートの袖を掴む葵。

「ご、ごめんください」

起きている人がいたのでは仕方がない、と麗が恐る恐る挨拶をする
と、すすり泣く声が止まった。

「だ、誰ですか！？ 鍵はちゃんと閉めた筈です！」

そして、ぽつとロウソクに火がとまり、暗いながらも女性の姿が確
認出来るようになった。

「はい、鍵はちゃんとかかっていた、です」

その女性の言葉にこくりと頷く鈴。

「……？ と、兎に角、早くここから出てっ！」

言っている意味がよく分からないという様子で、しかし、今はそんなことはどうでもいいのか、女性は声を荒げてそう言った。

「ええ！？ 折角ピッキングして入ったのに?!」

「ピッキングしたんですか!?!」

シヨックのあまり思わず自分の行為を口にしてしまった麗に、思わず突っ込みを入れてしまった女性。

「と、兎に角、早くここから出てって下さい!!」

「どうし……」

女性ははっと我に返ると、麗の言葉を遮って、

「私は——関係のないあなたたちを巻き込みたくない!!」

涙ながらにそう叫んで、四人を外に閉め出した。
ドアを勢いよく閉めたバシンという音を最後に、辺りはしんと静まり返る。

『ほほほ。今回の生け贄はこの四人ですか。いいですねえ。若くて美味しそうです』

「「!?!」」

宿屋の前で困惑していた四人の前に、突然黒いローブを来た人が現れた。

が、それは人ではないのかもしれない。

何故なら、老人のように腰が曲がったそれは、ふわりと宙に浮いていたから。

「ええと、生け贄って、神様に捧げるやつ？」

「成程……だから、祭りの町、なのですね」

「……やはり、あの屋根に刺さっている矢は、生け贄の家を示す白羽の矢だったようだな」

「！？　なんでそんな重要な物に気付いてたのに何も言わなかったのよ？！」

「いや、もしかしたらただのお洒落なのかと」

「馬鹿ー！！」

抵抗する間もなく、と言うか、むしろ抵抗する気もなく、その魔法で出現した糸のようなもので縛られた四人は、次の瞬間、フツと姿を消すことになった。

『ほほほ。では、この家はもう必要ありませんね』

黒いローブのそれは、ゆっくりと宿屋の方に体を向けると、どこか不快に思わせる声でそう言った。

そして、魔法で竜巻を起こして宿屋を破壊した後、自分も姿を消した。

「……えええ！？　巻き込んだじゃったー？！」

それからしばらくして、瓦礫の下から現れた女性は、頭を抱えながら顔を真っ青にしてそう叫んだ。

気が付くと、四人は銀の糸がほどかれた状態で宮殿の入り口に立っていた。

『いらっしやいませなの、生け贄さん』

「……“なの”って、何キャラよ？」

すると、何処からか先程の黒ローブのしゃがれ声とは違う、少女の声が聞こえてきた。

その喋り方と声は、理由もなく聞く相手を不快にさせる。

『じゃ、美味しく食べてあげるから、いっぱいあたしを楽しませてなの！』

麗の言葉を無視して声はそう言うと、ガコンと入り口が閉ざされた。

「……詰まり、食べられに來い、と、言ってる、ですね」

「うん……しかも、入り口閉まっちゃったね」

宮殿に閉じ込められ、場が静まり返った後、鈴と葵の声が宮殿に響

いた。

「……どうせ食うならさっさと食べばいいものを……面倒臭い」

「そこ！！ 怖いと言わないの！！」

麗は、倦怠感溢れる溜め息をつきながらそう言った悠にズバツと突っ込みを入れた後、

「さあ！ さっさとあいつを倒しに行くわよ！！」

と、拳を振り上げながら言った。

「なんかやる気満々だね、麗？」

「何故、そんなに燃えている、ですか？」

そんな彼女に葵と鈴が問うと、

「喋り方と声がム力つくから！！」

麗は簡潔に理由を述べた。

こうして、四人は宮殿の中を進み始めたのであった。

第13話 落とし穴

宿屋の女性は瓦礫の中から立ち上がって、一目散に駆け出した。

「た、た、大変です!!」

そう叫びながら彼女が向かったのは、

「町長!! ここを開けてください、町長!! 大変なんですつてば!! 蝶々!!」

この町の長の家。

「逃げ遅れたのですか!? ちなみに、私は蝶々ではなくて町長……って、ソレイユ?!」

戸をバンバンと叩きながら彼女が叫ぶと、中から一人の女性、この町の町長が姿を見せた。

「なっ、何故貴女が此処に!? 貴女は、我らが主より今回の生け贄に選ばれた方なのですよ?!」

「そのことで来たんですけど、どっ、どうでしょう!?!」

宿屋の女性、ソレイユを見て驚く町長と彼女の家に避難していた町民たちに、

「わ、私……関係のない人を巻き込んでしまったんです!!」

ソレイユは顔を真っ青にしながらそう言った。

「……………？ それはどうということですか？」

「先程、私の店に見慣れない方々がいらしたのです」

町長と町民たちは、彼らが祭っている神に祈ることを止め、ソレイユの話に耳を傾けた。

「……………“迎え”の時間が迫っていたので、慌てて店から追い出したのですが……………そしたら、丁度その時迎えがやって来て、それがその方たちを生け贄だと勘違いして連れて行ってしまったのですっ！！」

今にも泣きそうな声で一氣に説明するソレイユ。

「……………見慣れない方々……………詰まり、旅の方ですか？」

すると、町長が静かに尋ねた。

「……………？ は、はい。少なくとも、この町の方ではありませんでした」

「！ やりましたよ、皆さん！ ついにこの町に勇者様方がいらして下さいました！」

それに頷いたソレイユを見て、町長は喜びの声をあげた。
彼女の言葉を聞いて、歓喜する町民たち。

「！？ あの方々は、勇者様方だったのですか？！」

「ええ！ その中に、それらしい方がいらした筈です！」

町長が頷いたのを見て、

「！ た、確かに、背が高くてすつごくかっこいい方がいらっしやいました！」

四人の旅人の中にいた、黒いロングマフラーを頭に巻き、黒いロングコートを着込んだ彼を思い出してハツとするソレイユ。

「おお、その方に違いありません！」

どうやらソレイユと町長には、勇者はかっこいいという妙な認識があるようだ。

「彼らを使わした我らが主に感謝を！ そして、彼らのご武運を祈りましょう、皆さん！！」

「「はい！」」

そして彼らは、神に祈りを捧げ始めるのだった。

町の皆さんが悠を勇者様と称えている頃、

「ふあ……」

当の本人は、呑気に欠伸をしていた。

「悠、眠い、ですか？」

「誰かに噂されてるんじゃないかな？」

小首を傾げた鈴の隣で、彼が欠伸をした理由を的確に言い当てる葵。

「それなら欠伸じゃなくてくしゃみが出ると思っただけど？」

麗は葵に突っ込みを入れた後、

「葵、止まんなさい」

と、彼に言った。

「え？ うん」

「……とう」

言う通りにぴたりと立ち止まった葵の一步先にある地面に、丁度足元に落ちていた大きめの石を投げる麗。

「……」

石が地面に当たると、次の瞬間、スカッとその地面が姿を消した。

「す、凄いね、麗！　ありがとう！」

「どういたしまして。ま、流石私って感じ？」

「麗、どうして分かった、ですか？」

葵にお礼を言われ、腰に手を当てて高笑いしている麗に尋ねる鈴。

「盗賊の勘よ！」

「……伏せろ、盗賊」

麗がぐつと親指を立てて答えると、悠が静かに彼女に言った。

「誰が盗賊よ！？」

「お前だ」

悠は、自分でそう言ったくせに腹を立てて聞き返してきた麗の頭を左手で無理矢理伏せさせた。

同時に、先程まで麗の頭があった所を、ゴオツという轟音を立てて氷の柱が通過した。

「！　魔物！」

自分達の後ろに現れた魔物に気付いた葵は、剣を抜いてそれに向かっていった。

「悠、どうして分かった、ですか？」

「きゅうりパワーだ」

鈴と悠がそんな会話をしているうちに、

「……麗、悠にお礼は？」

魔物を倒した葵が小首を傾げながらそう言った。

「うつ……」

それを聞いて、露骨に嫌そうな顔をしてその場から一步下がる麗。

「……！　麗！」

その行動に、葵と鈴は思わず声を張り上げた。

彼女の後ろには、先程彼女が見破った罠——落とし穴があるから。

「え？　——きゃああああ！？」

足を踏み外してしまった彼女の手を、鈴はぱしっと掴んだ。

「お………重い………です」

「し、失礼ね！？　だけどゴメン！！　お願いだから頑張ってーっ
！！！」

無表情な彼女の上擦った声が、言葉の現実味を示している。

麗はそれに微々たるショックを受けながらも、懸命に自分を助けようとしてくれている彼女を応援した。

「麗っ！ これに捕まって！」

「危な？！ 何考えてんのよ、これ諸刃でしょう？！ でもありがとー！！ 気持だけ受け取っとくわー！！」

すると、葵が先程魔物を叩き斬った剣を彼女に差し延べながらそう言った。

が、麗は彼の厚意だけを受け取ることにした。

「ぶ。ダッサ」

「ぶっ飛ばーす！ いえ、ぶっ飛ばしません！！ だからお願い助けてー！！」

この状況を楽しそうに眺める悠に、自分の感情を押し殺しながら麗が助けを求めると、

「断る」

悠はさらりと、且つ、簡潔に断った。

「この人でなー……」

「悠、お願い！」

そんな悠に、麗の叫び声を遮って葵がそう頼むと、

「任せろ」

彼はばつちり頷き、

「天空を巡る無形の刃」

「え」

と、平然と唱えた。

——同時に、彼女の足元に風が発生する。

「いやあああああ!?!」

麗は上昇する風の勢いに乗って穴から脱出し、そのままその風に弄ばれた。

「流石悠だね」

穴から脱出したところまでしか見ていないのか、目を輝かせながら葵が悠に言つと、

「ま、任せろ」

彼は照れた様子で葵にそう返した。

「ぶ……ぶっ飛ば……」

「い、癒しの風!」

傷だらけになって、どさりと地面に倒れた麗に、鈴は慌てて白魔法

を使うのであった。

第14話 お嬢様とお婆

「そこっ！」

麗がナイフを投げると、ぶちりとロープが切れた。

上から降ってきた罫——網は、何も捕えることが出来ずに地面に落ちた。

「葵、後ろだ」

前を向いたまま悠が静かにそう言つと、

「うん」

「鈴、手伝う、です」

葵と鈴は素早く武器を手に取り、後ろに現れた魔物に向かっていった。

『もー、どうしてあたしのトラップがほいほい通過されちゃうの？』

四人のもう少し先にある部屋で、投影機のようなものに映った、そんな四人の様子を見、黒いロープを身に纏った少女が不機嫌な声を出した。

『ほほほ。それは、今回の生け贄の中にトラップと魔物を敏感に察知できる者がいるからですよ、お嬢様』

少女の後ろで腰が曲がった老人、お婆がそう言った。

『ええ〜？ なんなのそれ？ 全然面白くないの！』

お嬢様と呼ばれた少女はぷうつと頬を膨らませ、

『お婆、どうやったら楽しめるの？』

と、彼女の背中に生えている薄い羽をぴんと伸ばしてそう尋ねた。

『ほほほ。それは』

お婆は上品に笑って、お嬢様と同じ様に自分の羽を伸ばした。

『……お嬢様自らが痛めつければ良いかと』

お婆がそう言うとはほぼ同時に、その部屋の扉が外側から開かれた。それに次いで、四人の少年少女たちが現れた。

「あ、あの人は……」

お婆の姿を見て、銀髪の少年、葵が口を開いた。

「誘拐犯、です」

彼の言葉を繋げる白ローブの少女、鈴。

「……詰まり、此処が終点か」

黒髪に黒目に黒いマフラーに黒いコートと、全身黒づくめの悠は、いつものようにポケットに手をつ突っ込んでいる。

「というコトは……アイツがボスキャラね！」

狐色の髪をツインテールにした麗は、部屋の中にお嬢様をピシッと指さしながらそう言った。

『……あら、無傷なの。むっかつく〜』

現れた四人の生け贄を見回し、口を尖らせながらお嬢様が言った。

「しゃ、喋るんじゃないわよ！　なんかあんたの声聞いているところ……痒くなるの！」

『四人……か。お婆、どれとどれが食べたい？』

麗が耳を手で覆いながら言った言葉を完全に無視し、お嬢様はお婆に顔を向けて言った。

「無視かコラアー！！」

「お、落ち着いて、麗？」

喋るなど言ったくせに無視するなど怒鳴り声をあげる麗をなだめる葵。

『ほほほ。そうですねえ』

お婆は目を細めて悠を見遣り、

『……あの黒いのは不味そうなので、こちらの二匹を頂きます』

それから葵と麗の方に顔を向けてそう言った。

「わあ……僕たちは誘拐犯さんに狙われちゃったみたいだね。どうしようか、麗？」

「勿論」

それを聞いて、葵の言葉に麗はこくりと頷くと、

「ぶっ潰しちやいなさい、葵！」

と、言った。

「うん！……って、ええ？！ 僕が！？」

「当ったり前じゃない。か弱いレディーを守るのが男の役目でしょ？」

驚いて聞き返してきた葵に当然のように頷いてみせる麗。

「……？」

「……。……何よ？」

「……ええと、“か弱いレディー”って、麗みたいな人のことを言うの？」

麗の発言に、葵は小首を傾げながら尋ねた。

「そっ……うよ?」

「そっか。分かった」

「……何かしら……か弱いレディーって認めてもらったのに、この気持ちは何かしら……?」

素直に頷いて納得した葵を見て、なんだか胸が痛くなる麗であった。

『不味そうなのでって……まあ、お婆が運んで来てくれたんだから文句は言えないの。じゃあ、あたしはこっちの白と黒を頂くの!』

お嬢様は鈴と悠の方に顔を向けると、彼らを指さしながらそう言った。

「……悠は美味しくなさそうらしい、ですね」

彼女の言葉を聞いて、鈴が静かにそう言つと、

「おお、ラッキーだな。詰まり、俺よりもお前が狙われるってわけだ」

平坦な声で悠が返した。

「鈴、美味しいものは最後にとっておく派、です」

彼より更に平坦な声で返す鈴。

「そうきたか。ちなみに、俺は好きなものだけ食べる派だ」

「……性格がありありと出てる、ですね」

鈴がしみじみと言うと、

「あー、喉渴いた」

喉に手を当てながら悠が言った。

『あら、奇遇なの。あたしも喉カラツカラなの』

お嬢様は驚いたように口に手を当てた。

『だからあ、あなたたちの血を貰うの!』

『ほほほ。頂きます』

お嬢様とお婆はそう言いながら羽を動かした。
すると、二人はふわりと宙に浮いた。

「血い? 何よ、あんたら? もしかして吸血鬼?」

『ピンポーン、大正解なの!』

「だから喋んなって言うてるでしょう!？」

親切に答えてくれたお嬢様に酷い言葉を浴びせる麗。

「……吸血鬼には、十字架とニンニク、です」

「うーん……どっちもないよ?」

鈴の発言を受け、旅に必要なものをしまい込んだリュックを探してみた葵がそう言った。

「……鈴、十字架なら持ってる、です」

「何ゆえ!？」

さも当然のように懷から十字架を取り出した鈴に麗が突っ込みを入れると、

「教会で貰った、です」

と言いながら、鈴はお嬢様とお婆に十字架を向けた。

『うふふ。そんなもの、全然効かないの』

『ほほほ。十字架に負けるような魔物が、神を強く信仰している町に手を出せると思いますか?』

が、彼女たちはそれを嘲笑うかのようにそう言った。

——その声は、鈴と麗の背後から聞こえてきた。

「「っ?!!」」

突然背後に移動した敵の方に振り向く間もなく、彼女たちの首筋にぶすりと何かが突き刺さった。

「! 鈴!! うらー……ら?」

そのことに気付いた葵は、鈴と麗の名前を呼んでいる途中で、

「悠？ 何してるの？」

いつの間にか隣でリュックをあさっている悠に気付いてそう言った。

「揺らめく灯り」

お目当てのものを発見した悠は、葵に答える代わりに呪文を唱えた。

第15話 蚊遣り豚

呪文を唱えて立ち上がった悠の掌には、豚を模した可愛らしい陶器が乗っていた。

「……ええと、蚊取り線香？」

それを確認したと同時に、なんとも言えない芳香を伴う白い煙が漂い始めたのを見て、葵が小首を傾げながら尋ねた。

「ブタ子だ」

「……ちゃんと名前あるんだ？」

葵は、悠が真面目な顔で言った解答を流した後、

「どうしてブタ子を出したの？」

と、白い煙をゆらゆらと吐き出している蚊遣り豚のブタ子を指さしながら再び尋ねた。

「黒い姿、耳障りな声、性別は恐らく雌で、羽が生えた吸血鬼……詰まり、」

すると、悠は鈴と麗の首筋に口を突き刺している黒ローブの二人に顔を向け、

「蚊だ」

と、言った。

『ほ……ほほ……』

『……力が……入らないの……!』

同時に、黒ローブの二人は少女たちの首筋から口を引き抜き、力なく地面に崩れ落ちた。

「かつゆーい!!」

そして、麗が暴れだした。

「……蚊の唾液によるアレルギー反応、です」

「うええ!? 唾液?!」

鈴の言葉を聞いて、その後足元に倒れているお婆を見て顔を青くする麗。

「はい、です」

「うーん……」

頷いた鈴の後ろで虫刺されの薬を探していた葵は、リュックから顔を上げると、

「ないみたい」

と、言った。

「ええ?!　なんで蚊取り線香があつて虫刺されの薬がないのよ!」

「し、知らないよ?　って言うか、なんでブタ子があつたのかも分かないよ」

「……鈴が買った、です」

麗の突っ込みに葵が困つたように言い返すと、鈴がぽつりと呟いた。どうやら、鈴がブタ子を購入したようだ。

「あー。鈴、可愛いもの大好きだもんね?」

それに納得したように言つた麗の言葉に、少し恥ずかしそうに小さく頷く鈴。

「あーもー!　じゃあ、この痒みはどうすればいいのー!」

「叩けばいいんじゃないかな?」

「刺した方が効くと思う、です」

「あ、成程」

「鈴も手伝つ、です」

「ちよつ、ちよつと?　何二人して武器構えてんのって、いやああああ!」

そして、三人はバタバタと走り回り始めた。

『こ……このあたしが……蚊取り線香なんかに負ける……なんて……』

お嬢様は震える手を地面につけ、

『あ……有り得ないの……！』

ぐぐぐつと体を起こしてそう言った。

「……止めておけ」

『！』

すると、彼女の上から静かな声が降ってきた。

「お前らはブタ子に勝てない」

お嬢様が顔を上げると、悠が決め台詞っぽくそう言った。

『く……お婆！ 魔法を使うの！』

再び地面に倒れたお嬢様が悔しそうに叫んだ。

『……体が……動きません……』

しかし、蚊取り線香によって全身が痺れてしまっているせいで、お婆は、彼女の魔法を発動させる条件である右手を対象に向けることが出来なかった。

『……それより貴方』

お婆は倒れたまま、震える声で悠に話し掛けた。

『……ほほ……我慢は体によくないですよ?』

「! ……」

そう言った彼女に、悠は一瞬驚いたが、それから無言で彼女を見下ろした。
すると、

「いやあああああ!」

「……冗談、です」

「え? 冗談だったの?」

「本気で刺す気だったんかい!」

「うん。ごめん」

「……素で頷いた、です」

と言う声が聞こえてきた。

「……葵」

「? なあに、悠?」

悠は、ゆっくりと口を開いて言った。

「止めを」

と。

「……うん。分かった」

葵が剣を振り下ろすと、お嬢様とお婆は光の粒となって消えていった。

「……で、なんで自分で殺らないのよ？」

それを見送った後、麗は胸の前で腕を組みながら悠に尋ねた。

「馬鹿かお前は？　ブタ子を持ってるからに決まってるだろ」

そう言つて、悠が自分の手に乗っているブタ子を見せ付けると、

「そんなの横に置いとけばいいでしょう！？　そつとね！！」

と、麗が突っ込みを入れ、

「エスパーニャ、です」

と、鈴が凜とした声で言った。

同時に、三人の視線が鈴に向かう。

「……ブタ子ではなくて、エスパーニャ、です」

鈴はスツとブタ子を指さしてそう言った。

「いやブタ子だろ」

「エスパニーヤ、です」

「いやブタ子だろ」

「エスパニーヤ、です」

「け、喧嘩しないでよ、二人とも？」

無表情でバチバチと火花を散らし始めた悠と鈴をなだめようと試みる葵。

「葵はどっちがいい、ですか？」

「葵、ブタ子だろ？」

「ええ！？ 巻き込まれた?!」

すると、葵が蚊遣り豚の名前を決める羽目になった。

「…………ええと、じゃあ、」

鈴と悠が真剣に見つめてくるなか、葵は人指し指を立て、

「…………二人のを合わせて、“エ子”…………とか？」

と、困ったように笑いながら言った。

「……エ子……」

こうして、何やら環境に優しいような蚊遣り豚が誕生したのだった。

第16話 雪山にて

祭りの町を後にした四人は、北東に向かって平野を進んでいた。すると突然、辺り一面が真っ白になった。

「……だんだん寒くなってきた、です」

「もうそろそろ本格的に秋が始まるからな」

しかし、鈴と悠は、突如変化した景色にまったく動じなかった。

「いや、全然だんだんじゃなくていきなりすぎだし、寒くなりすぎだし、どっちかって言うところではもう冬でしょ?！」

そんな二人に、麗が思い切り突っ込みを入れた。

彼女の言う通り、彼らの周りの景色はいきなり冬に変化した。

先程まで緑色だった大地は白銀の雪に覆われ、青く晴れ渡っていた空は灰色に変わった。

更に進むと冷たい北風が吹き始め、ふわふわと舞い降りていた雪は、次第に吹雪に変わっていった。

「無駄な体力を使うな。死ぬぞ」

この天候にも関わらず三連突っ込みをかました麗に悠が言った。

「う、煩いわね! って言うかあんた、隣で凍えてるいたいけな女の子にその頭に巻いたマフラーとかそのモコモコした温かそうなコートとかを貸してあげる優しさはないわけ?!」

「ない」

凍える体を擦りながら言った麗の言葉に即答する悠。

「即答っ……あ、あんたには血も涙もないの!？」

「なかったら死ぬだろ。馬鹿かお前は？」

「ぶっ飛ば——」

怒鳴りながら両手を振り上げた麗に、

「麗、マフラーならある、です」

と、鈴が言った。

「大好き鈴!!」

そう言って、素早く鈴に飛び付く麗。

「ありがと、流石鈴ねっ！　優しさの片鱗も存在しない腹黒魔道士とは大違いだわ！」

鈴がリュックから取り出した赤いマフラーを首に巻きながら麗が言う
うと、

「……悠に優しさはあると思う、です」

鈴が、自分も白いマフラーを首に巻きながらそう言った。

「な！？ 何言って―…」

その言葉に驚いた麗が聞き返そうとした直後、

「悠、見て見て！」

楽しそうな葵の声が聞こえてきた。

先程まで、葵は黙々と雪だるまを作っていた。

そして今は、作り終えた雪だるまの横に立っている。

「って、わあ！？」

すると、その雪だるまが崩落し、彼はその頭に潰された。

「！ 葵！」

それを見た悠は葵に慌てて駆け寄り、

「大丈夫か！？」

雪だるまの頭を退かして彼を抱き起こした。

「う、うん。ありがとう」

どじを踏んでしまった恥ずかしさを隠すように笑いながら葵がお礼を言うと、悠は安心したように胸を撫で下ろした。

「……葵限定で」

「……そうね」

そんな悠を見て、鈴の言葉に納得する麗であった。

「吹雪、止みそうにないわねえ？」

「はい、です」

かまぐらの入り口から外の様子を窺いながら麗が言った言葉に同意する鈴。

このまま進むのは難しいと判断した四人は、かまぐらを作り、そこで吹雪が止むのを待つことにしたのであった。

「ってか寒い！　悠、火の魔法を使うとかなんとかしなさいよ！」

「……使えば此処が崩れるが、それでもいいか？」

麗が言うと、悠が静かにそう返した。

「いいわ」

「何言ってるの、麗？！」

真剣な顔で頷いた麗に慌てて突っ込みを入れる葵。

「だって寒いんだもん」

「いや、此処が崩れたらもつと寒くなるんだよ!？」

ぶうつと膨れた麗に葵が言うと、

「……悠、自分の魔法の加減も出来ない、ですか？」

鈴が静かに、且つ、挑発的な声でそう言った。

「……ああ。出来ない」

が、悠は素直にこくりと頷いた。

鈴の挑発作戦、失敗。

「いや、出来ないのかよっ?!」

「悠、この前蚊取り線香につけた火は出せないの？」

そんな悠に麗が突っ込みを入れた後、葵が驚いたように尋ねた。

「……」

すると、悠は力なく頷き、

「……さ……凍っ……力が……出ない……」

何かを呟きながら、どさりとその場に倒れた。

「「悠!?!」」

急に倒れた悠に驚き、同時に彼の名前を叫ぶ三人。

「悠! 大丈夫!?!」

名前を呼びながら悠を揺する葵。

しかし、彼はまったく反応を示さない。

「ちょ、ちょっと悠!?! 某あんパンのヒーローみたいな弱り方止めてよ?!」

「で、では、悠は顔が凍ったの、ですか?」

「鈴、新しい顔は?!」

麗と鈴がわけの分らないことを叫んでいると、

「……なんか、変な音がしない?」

と、葵が言った。

「え?」

「……はい、どどどーっという音がしてる、です」

「うん。どどどーって音がしてるよね」

「え? ちょっと待ってよ? どどどーって……」

そして、葵と鈴と麗はゆっくりと顔を見合わせた。

「「雪崩?!」」

次の瞬間、四人は雪崩に呑み込まれた。

第17話 雪崩の後

押し寄せる雪の波の轟音の中に、凜とした声が響いた。

「隔壁の雫！」

鈴がそう唱えると、杖先が光を放った。
その直後、四人は光に包まれた。

「！ 光の盾！？」

「凄く凄く凄いわ、鈴！ 私、惚れちゃいそ〜！」

温かな光を放つ、まるで水滴のような球形の盾に包まれ、驚きの声を溢す葵と歓声をあげる麗。

「……雪崩の攻撃力を100とすると、鈴の盾の防御力は0.5、です」

すると、鈴がぽつりと呟いた。

「え」

彼女の呟きを聞いて固まる麗。

「……ええと、詰まり？」

葵が恐る恐る尋ねると、

「鈴の負け、です」

鈴はさらりとそう答えた。

「ええええええええええ！？」

「いやあああああ！！」

「レベルアップが必要、ですね」

と同時に、光の盾は雪崩に負けて砕け散った。

「うっ……たた……」

後頭部を押さえ、葵はゆっくりと起き上がった。

「……？ あ、あれ！？ 私たち、生きてる？！」

「はい、生きてる、です」

その隣で起き上がった麗が言った言葉に、そのまた隣で起き上がった

た鈴がこくりと頷いた。

「わあ、ラッキーだね」

「はい、それに」

鈴は葵の言葉にも頷くと、

「街が見える、です」

すつ、と前方を指さしてそう言った。

その先には、白い雪の中にぼつりと存在する小さな街が見えた。

「！ すつこい！！ これは日頃の行いが良いから神様からのご褒美ね！！」

「……では、葵」

はたして麗の日頃の行いは良いものなのか、ということは敢えて口にせず、鈴は葵の隣に倒れている悠を指さして、

「それ、運んで下さい、です」

と言った。

「それって……うん。分かった」

鈴が悠のことを“それ”扱いはたしたことを若干気にしながら、葵は背負っていた剣を外し、その代わりに悠を背負った。

「あ。どうしよう？ 戦えなくなっちゃった」

その為、両手が塞がってしまった葵。

「……鈴は今、悠の代わりにリュックを持っている、です」

その隣で、葵が外した剣を預かり、更に悠の代わりにリュックを背負っている鈴が言った。

「な、何よ、あんたたち？ もしかして、このか弱い麗ちゃんを魔物と戦わせる気？」

「うん。ごめんね？」

「はい、です」

麗の問いに、葵と鈴はこくりと頷いた。

「はあ……分かったわ。ただし、私は基本的に戦闘型じゃないから、どうなっても知らないわ、よっ！！」

麗は溜め息をつきながらそう言い終わるや否や、彼女のポシェットからナイフを素早く取り出し、それを後方に現れた魔物に向けて投げつけた。

『ぐっ——…』

「「！」「」

ナイフは、先程現れたばかりの魔物の胸に突き刺さった。

その魔物の存在にすら気付いていなかった葵と鈴は、驚いて目を見開いた。

「そことそこっ――！」

麗は前方に姿を現した二体の魔物を再びナイフを投げて倒すと、

「ウラァ――！ 出てこい魔物ども――！ って言うか、この麗様がいるからには何処に隠れたって無駄よ――っほっほっ――！」

今度はポシエットから、拳銃のように矢を放つことが出来る、ボウガンという武器を取り出し、ズガズガと連続して矢を放った。

『ぐう――！』

『ぎゃあ――！』

『わあ――！』

ただ暴走して無方向に乱射したかのように見えたその矢は、雪に隠れていた魔物を次々と射止めていった。

「……わあ、麗って戦闘型じゃないのにあんなに強いんだね？」

「いえ、十分戦闘型だと思う、です」

喜々として魔物を倒しながら歩いていく麗の後ろを歩きながら、そんな会話をする葵と鈴。

「……悠よりは弱いようですが、麗にも魔物を察知出来る能力があ

る、ですね」

麗を見ながらそう呟く鈴。

「つと……わ!？」

その隣をふらふらと歩く、悠を背負った葵。

「……」

彼に背負われている悠は、ぐったりとしていて動かない。

「悠…… 大丈夫かなあ？」

そんな悠を心配する葵と、

「…… 葵の方が大丈夫、ですか？」

そう言いながらふらふらと歩く彼を心配する鈴と、

「逃げてんじゃねぞコラァ!!」

魔物が思わず逃げ出すほど狂気に満ちた麗は、その雪原の先にある街を目指すのであった。

「街に着いたら、まず悠を休ませる場所を探さなきゃね」

「それなら、宿屋が良いと思う、です」

「麗ちゃん最高ーっ!!」

第18話　ペンギンの町

「そこだあつ！！」

麗の放った矢が、ふわふわした雪のような魔物を貫いた。

「わあ、本当強いね、麗」

「流石盗賊の頭をやっていただけある戦闘力、です」

彼女の後ろで感心した声を発する葵と鈴。

「……ら？　ありやうや」

と言った麗は、彼らを振り向き、

「ゴメン、弾切れしたわ」

ポシエットを逆さまにして振りながらそう言った。

「え」

「そ、それではどうする、ですか？」

それを聞いて葵は固まり、鈴は近付いてきた魔物を見ながら彼女に質問をした。

「そりゃ勿論」

すると麗は当然のようにくると魔物に背を向け、

「ダッシュで逃げる!!」

物凄い速さで走り出した。

「ま、待ってよ、麗!？」

「流石盗賊の頭をやっていただけある逃げ足の速さ、です」

葵と鈴は、雪煙をあげて走っていった麗を慌てて追い掛けた。

「も……もう駄目……」

町の宿屋に着き、部屋に入った葵は、背負っていた悠をベッドに寝かせると、そのままへたりと床に座り込んだ。

その部屋は、こうこうと燃えている暖炉のおかげでとても暖かくなっている。

「何なに？ もう限界？ 体力ないわね、葵」

そんな葵を見て、暖炉で暖まっていた麗がそう言いながら溜め息をついた。

「だ……だって僕……悠を背負って……走ってた……んだよ？」

「あ、そっか。悠忘れてたわ。うっかりうっかり」

麗は、忘れてたって……と返してきた葵の言葉を聞き流すと、

「それにしても、此处、随分不思議な町よね？」

と言った。

「ペンギン、いっぱい……です」

すると、窓の外を眺めていた鈴が口を開いた。

窓からは町を見渡すことが出来て、町の通りには、沢山のペンギンがよちよちと歩き回っている。

——此处は、“ペンギンの町”。

「……こっちはかなり嬉しそうだけど」

この町の住民であるペンギンたちに釘付けになっている鈴を見て、麗がそう呟くと、

「麗、外に行きましょう、です」

と、鈴が麗に言った。

「はいはい。じゃ、留守番頼んだわよ、葵」

鈴と一緒に外に出ることになった麗は、やれやれと溜め息をついて言った。

「あ、うん。行ってらっしゃい。気を付けてね」

そんな彼女たちに、葵は手をひらひらと振りながらそう言った。

「ふう……っと、あれ？ 枕がびしょびしょ……」

それから少し時間が経過すると、呼吸が整ってきた葵。大きく息を吐いて立ち上がると、葵は悠の頭が乗っている枕が濡れていることに気が付いた。

「このマフラーのせいかな？」

葵は小首を傾げながらそう言い、悠の頭に巻き付けてある黒いマフラーに手を伸ばした。すると、

「触るな！！」

悠が目を覚ますと同時にそう怒鳴り、伸ばされた葵の手を思い切り払った。

「……え……？」

突然怒鳴った悠に驚く葵。

「！わ、悪い、葵……っ！」

はっと我に返った悠は、慌てて葵に謝った。

「あ、う、ううん。僕の方こそごめん」

葵は首を横に振った後、彼に謝り、

「目が覚めてよかった。ええと、何か食べる？」

申し訳なさそうにうつむいている悠にそう尋ねた。

「……きゅっ……」

葵の問いにぱつりと答える悠。

「うん。分かった。探してくるね」

葵はくすりと笑うと、リュックから財布を取り出して部屋を出た。

「麗、この町、ペンギン、いっぱい、です」

「いや、だからそれはもう分かったってば……」

キョロキョロと町を見回しながら、無表情で嬉しそうな声を出す
鈴に、麗は疲れたようにそう返すと、

「ねえ、もう戻らない？」

と、鈴に言った。

「……？ どうして、ですか？」

「寒い」

小首を傾げた鈴に即答する麗。

「気のせい、です」

鈴はそれに即答した。

「いやいやいや、気のせいじゃないわよ?! ペンギンもマフラー
してるくらい寒いのよ!？」

まさかの即答返しに少しばかり怯んだ麗がそう突っ込むと、

「はい、可愛い……です」

と、うつとりとした声で鈴が言った。

「……駄目だこの娘、聞いちゃいねえ……」

「あ、鈴、麗！」

麗が頭に手を当てて下を向くと、背後から葵の声が聞こえてきた。

「！？ 留守番はどうしたの？！ まさか、あんたも可愛いもの好き……」

「きゅうり探してるんだけど、知らない？」

「……ああ、成程。起きたのね、アイツ……」

葵の質問内容で悠が目を覚ましたことを理解する麗。

「見てない、です」

「ペンギンしかね」

「そっか……」

鈴と麗の答えを聞いて肩を落とした葵は、

「？ あそこ……どうしたんだろう？」

町のペンギンたちが一ヶ所に集まっていることに気が付いた。

「……行ってみましょう、です」

葵が指さした所を見て鈴がそう言うと、二人は頷いて彼女に従った。

「皆のもの！ 今日こそ出陣するぞ！」

蜜柑の箱の上にちょこんと乗った町長らしいペンギンが声を張り上げてそう言った。

すると、彼の周りに集まったペンギンたちがオーツと拳を振り上げた。

「力を合わせて氷の女王を倒すんだ！」

町長が言つと、再び気合いの入った声をあげるペンギンたち。

「氷の女王？」

それを聞いて、葵が小首を傾げながらそう言った。

「わあ！ 人間！？」

「「どつしえ〜！！」」

「……可愛い、です」

膝下でどつしえ〜と驚いたペンギンたちを見て、嬉しそうな声を漏らす鈴。

「何なに？ あんたら、今からその氷の女王とやらを討伐にでも行くの？」

「そ、その通りだ！」

麗の問いに、町長は咳払いして体勢を戻し、大きく頷いてそう答えた。

「その武器で？」

恐らく彼らの武器だと思われる武器らしくない武器を指さしながら麗が再びの質問をすると、

「もっ、文句でもあるのか！？ 冷凍魚は固いんだぞ！ これで叩かれると痛いんだぞ！」

町長がその武器——冷凍魚を振り上げてそう言った。
他のペンギンたちも、そうだそうだと冷凍魚を振り上げる。

「碎けて終りだと思っただけど？」

「「うっ……」」

しかし、麗がさらりと言った突っ込みに、ペンギンたちは押し黙ってしまった。

「……ええと、どうして皆さんはその氷の女王という人を倒そうとしているんですか？」

「……人ではない。氷の女王とは魔物のことだ」

葵が質問をすると、町長がそう返した。

「魔物……」

「そう。そして、そいつが氷の洞窟に住み着いた頃から日に日に気温が下がっているんだ」

町長が今のこの町の状況を説明すると、

「このままでは、この町のみんなが凍死してしまいます！」

「ペンギンと言えど！」

「コタツにミカンです！」

それに涙ながらに続くペンギンたち。

「だから今日こそ！ 私たちは奴を倒す為に――！」

「……その洞窟は何処にある、ですか？」

町長の発言を、鈴の静かな声が遮った。

「え？」

「「り、鈴？」「」

その場にいた者たちは一斉に彼女に目を向けた。

「何処にある、ですか？」

「え、えと、ここから真っ直ぐ北に進んだ所に……」

鈴に気圧され、町長が冷や汗を掻きながら答えると、

「葵、麗、行きましょう、です」

と、鈴が言った。

「……やっぱりそうなるのね」

そんな彼女に麗はやれやれと肩をすくめ、

「と言うわけだから、あんたらは此処でその魚でも食って待ってなさいよ」

ペンギンたちに向けてそう言った。

「後、きゅうりありますか？」

そして、かつこよく決めた麗を葵が台無しにした。

第19話 氷の洞窟

鈴が氷の女王討伐を買って出た次の日の朝、

「“丁”の字になれ」

「え？ こ、こう？」

ペンギンの町の外で、麗は悠の言い通りに腕を大きく広げた。

「……そのまま動くな」

そう言つて、悠は麗にすつと右手を向けた。

「空寂な暗闇は友を求む」

後、悠が静かに呪文を唱えると、真っ白な雪原にいくつもの黒い光が点り、最後に麗の頭の周りに黒い霧が発生した。

「……え？」

麗がその異変に気付いた直後、

「きゃあああああ！？」

雪原に散らばっていた黒い光が、彼女の頭を目掛けて勢いよく飛んできた。

麗の頭の周りに漂っている黒い霧を求めるように、黒い光を放ちながら飛んでくるその物体の正体はナイフや矢。

——これらは全て、ペンギンの町に行く間、麗が魔物達に突き刺していった武器である。

「隔壁の雫！」

鈴の声が響き、麗の周りに光の盾が出現した。

麗に向かって飛んできた彼女のナイフや矢はそれに弾かれて地に落ち、彼女の周りの黒い霧は、白い光に照らされて消え失せた。

「鈴！！　ありがとう！！」

「悠、何考えてる、ですか！？」

麗が涙目でお礼を言うのとほぼ同時に、術を解いた鈴が悠に言った。

「……武器を回収すると言ったから手伝ってやったんだろ？　それに」

彼女の言葉に、

「“丁”じゃなくて“十”の字になってたから、邪魔な頭を落とそうと」

悠はさらりとそう応えた。

「ふざけんじゃないわよ！？」

「ああ、成程、です」

悠に突っ込みを入れた麗の隣で、ぼんと手を叩いて彼の言葉に納得

する鈴。

「いや、納得しないでよ、鈴!？」

「ガタガタ吐^ぬかしてないでさっさと拾え」

そんな彼女にも素早く突っ込みを入れた麗に、ペンギンの町で貰ったきゅうりをかじりながら、悠が命令した。

「何その言い様?! あんた一体何様よ!？」

と、彼の態度が気に食わなかった麗が言うと、

「……俺様?」

悠は、ふっと口を綻ばせてそう言った。

「うっざ!! あんたマジうっざ!!」

「みんな!」

麗が騒いでいると、そこに葵の声が聞こえてきた。

こちらに向かつて走って来る葵に、言い争いをやめて顔を向ける麗と悠。

「遅くなってごめ……うわあっ!？」

「! 葵!」

走って来る途中で足を滑らせて転倒した葵に、悠は慌てて駆け寄る

うとした。

その時、彼の足元にさつと麗の足が伸びた。

「ったあ?!」

悠はそれを思い切り踏みつけて、

「大丈夫か!?!」

そのまま葵の元に行った。

「う、うん、大丈夫。ありがとう」

状態を起こすのを手伝ってくれた優しい悠にお礼を言う葵。

「ちよっ……ちよっと!! 別に飛び越えるだけで良いじゃない!?!」

足掛けしようとして出した足を思い切り踏みつけてくれた酷い悠に突っ込みを入れる麗。

「自業自得だろ」

さらりと言い返す悠。

「ぶっ——…」

「中華まん買ってきたんだけど、食べる?」

「食べるう!」

葵の発言に、麗は悠に何か言うことを中止して食い付いた。

「？ 鈴、何してるの？」

麗と悠に中華まんを渡した後で、葵が小首を傾げながらそう言った。

「え？ —— 鈴！？」

その言葉を聞いて、後ろを振り向いた麗は鈴の姿を見て驚いた。

「……麗が、拾わないから……」

「ごっ、ゴメン、鈴！！ ありがとう！！」

辺りに散らばったナイフや矢を一生懸命集めていた鈴に、麗は慌てて駆け寄り、お礼を言って彼女を手伝い始めた。

「わあ、まさに氷の洞窟って感じだね？」

「はい、凍ってる、です」

「きゅうりは美味しいな」

地面と岩壁は凍りつき、天井には巨大な氷柱が無数に垂れ下がっている。

そんな氷の洞窟の内部を見回しながら、葵と鈴と悠が感想を述べた。

「なんで“寒い”っていう感想が出ないのよ!？」

すると、白い息を吐きながら麗が元気に突っ込んだ。

「うん。すつごく寒いよねえ」

「はい、すつごく寒い、です」

「……あんたら、それ本当に寒がつてる?」

麗の言葉にこくりと頷き、くすりと笑いながら葵がそう言うと、鈴もそれに続けて頷いた。

「味噌が欲しいな」

「……こいつに至っては、この寒いのに夏野菜なんか食ってるし……」

まったく寒そうに見えない葵と鈴の発言を聞いた後、きゅうりを食べながらそんなことを呟いた悠を見て、麗は何か疲れたように頭を抱えた。

「……昨日、悠は寒さに負けて倒れたのではない、ですか?」

「ああ。そうだ」

再びリュックからきゅうりを取り出した悠に、鈴が話し掛けた。

「では、きゅうりを食べていたらまずいのではない、ですか？」

小さく頷いた悠を見て、鈴が小首を傾げながらそう尋ねると、

「……きゅうりが不味いだと？」

どすの効いた声で悠が聞き返した。

その左手に、彼の武器である鋭く尖った釵をちらつかせながら。

「言っていない、言っていないわよ!？」

やんのかコラ、とても言いた気に無表情で杖を構えた鈴の代わりに、麗がぶんぶんと手を振って、

「詰まり、鈴は、このただでさえ寒い洞窟の中できゅうりなんか食べて余計に体冷やしたら、墓穴掘ってる上に自分の首絞めてるようなもんでしょ？ って言ってるのよ!」

二人の仲裁を試みた。

「なかなか感心できる自殺の仕方だな」

「出来ないわよ!？」

ブラックジョークをかました悠に素早く突っ込みを入れる麗。

「悠、また倒れたりしないよね？」

葵が心配そうに言うと、

「ああ。大丈夫だ」

悠はそれに頷いた後、葵の頭に手をぼんと乗せ、

「全然寒くないしな」

と、彼の頭をくしゃくしゃと撫でながら薄く微笑んで言った。

「「！？」」

その言葉を聞いて驚く鈴と麗。

「そっか。よかった」

「いやいやいや、全然よくないわよ?!」

「ゆ、悠、感覚がなくなってしまった、ですか？」

安心したように言った葵の言葉を麗が完全に否定し、その次に鈴がそう言った。

「あつたかいぞ。魔法のおかげで」

さらりと返ってきた彼の答えに、麗と鈴は固まった。

「へえ、凄いね。魔法でそんなことも出来るんだ？」

「ああ」

「でも、それならなんで昨日使わなかったの？」

「……油断してた」

「そっか……って、あれ？　どうしたの、鈴、麗？」

「気にするな。それより、葵にも掛けてやる」

「わ、ありがとう、悠！」

それを気にも留めずに、葵の肩に手をまわしてスタスタと歩き始めた悠に、

「「悠！！」」

鈴と麗が同時に叫ぶと、

「断る」

悠は述語も目的語も聞かないでさりと断った。

第20話 状態変化

「葵、後ろだ」

「うん。分かった」

悠の指示に従って葵は素早く剣を抜き、そのまま後方に現れた魔物に向かっていった。

「悠！ まさか本気で私たちにそのあつたかくなる光魔法掛けない気！？」

「めんどい」

白い息を吐きながら訴えてきた麗に、悠は当然のごとく頷いてさらにと答えた。

「めんどがるなコリア！」

「麗、手袋がある、です」

鈴が手袋を持ち出しながらそう言つと、

「ホント天使ね、鈴！！」

麗はころつと態度を変えて彼女に飛び付いた。

「ふっつ」

魔物を倒した葵が、剣を担いで額に掻いた小汗を拭いながら一息つく、

「……葵」

悠が静かに彼の名前を呼んだ。

「？」

「右と左と後ろと前だ」

振り向いた葵に、悠はさらりとそう言った。

「……わあ、いっぱい来たね？」

四方から現れた魔物達を見て、くすりと笑う葵。

「笑ってる場合じゃないでしょう!？」

「鈴も手伝う、です」

「がんば」

「ありがとう、三人とも」

葵は迫り来る魔物達に剣を向けながら、ナイフを構えた麗と、杖を握り直した鈴と、きゆうりをかじっている悠にお礼を言った。

「って、なんで悠もカウントしてんのよ?!」

明らかに戦う気がない悠にもお礼を言った葵に突っ込みを入れる麗。

「え？　だって応援してくれたから」

「あーもーいいヤツだわねあんたは！！」

魔物を倒しながらそんな会話をする葵と麗。

「悠も戦う、です」

魔物に突き刺した杖を引き抜いた鈴がそう言った。

「めんどい」

「めんどがるなコラア！」

まったくやる気を示さない悠に、麗は激しく突っ込んだ。

直後、真横でキーンと大きな音が鳴った。

「！」

「よそ見したら危ないよ、麗？」

見ると、麗に向けて振り下ろされた魔物の爪を、葵が剣を横にして防いでいた。

「ありがとう、葵！　たあっ！」

麗は葵にお礼を言った後、彼に攻撃を防がれた為に動きが止まっている魔物の眉間にナイフを突き刺した。

「これで終わり、です」

その後ろで鈴の首尾一貫が決まり、これで襲ってきた魔物はすべて消え失せた。

「悠、まだ魔物来る？」

「……大丈夫だ」

剣を鞘に納めながら言った葵の問いに、悠が頷いたのを見て、

「そっか。じゃあ、ちょっと休憩しよう？」

と、葵が言った。

「そう、ですね」

「ちょっと待った！」

鈴がそれに同意すると、麗が声を張り上げてそう言った。

「「？」」

「……この辺、トラップの予感がするわ」

小首を傾げた二人に、辺りを見回しながら言う麗。

「？ 洞窟の中なのに罠がある、ですか？」

「随分手の込んだことをする雪女だな」

「氷の女王、です」

「同じようなもんだろ」

さらさらと流れるような会話をする鈴と悠の隣で、

「“予感”？」

麗の言い方に葵が小首を傾げた。

「ええ……寒くていまいち勘が働かなくっ——」

そう言いながら周囲を確認するために一歩踏み出した麗の足元から、カチリという良からぬ音が鳴った。

「て」

素早く自分の足元に目を向ける麗。

「……何か踏んだね」

「ああ、踏んだな」

「はい、踏んだ、です」

三人もそれを確認した。

「踏んじやつたああああ!!」

顔を真つ青にして頭を抱えながら叫ぶ麗。

「……………」

その時、何かが割れたような音が聞こえた葵は、自分達が進んできた道を振り向いた。

「ああああ……一体なんの罠なのかしら？ 本当コメン、みんな！」

「…………洞窟の中の罠と言ったら、岩とかが転がって来るものが、定番、です」

「よくあるあの妙に丸くてでかい岩のことか？」

「ああ、あれね。あれって何故かプレイヤーを追って来るのよね。不思議」

鈴と悠の発言を聞き、何かを諦めたように笑う麗。
すると、

「…………みんな、走って」

後ろを向いていた葵が口を開いた。

「え？ ま、まさか……………」

「岩、ですか？」

「ううん」

葵は顔を白くした麗と鈴に首を横に振り、

「氷柱が来るよ！」

と叫んだ。

「「?!」」

「いやあああああ!?!」

葵が気が付いた、だんだん近付いてくる何かが割れる音、それは、天井の巨大な氷柱が落下して砕け散る音だった。

葵のおかげでそれに気が付いた三人は、彼に従って駆け出した。

「す、凄い畏踏んじやったみたいだね、麗？」

「麗、ドジ、です」

「まったくだ。畏に掛るなら周りを巻き込まずに一人で掛け。笑ってやるから」

「今更だけど、あんたって本当に性格最悪ね?!」

迫り来る氷柱から逃げながら会話する四人。

「ええと、鈴、盾は？」

「分かりました、です」

葵の提案に鈴はこくりと頷き、

「隔壁の雫！」

と唱えながら、地面に杖を突き立てた。

彼女の声に応えるように、光の盾が四人を包み込む。

「……………」

が、氷柱が当たると同時にピシッと盾の天井に亀裂が走った。

「あ、駄目、ですね」

詰まり、鈴の負け。

「もうちょっと頑張ってよおお?!」

「悠、お願い！」

砕け散った盾の上から降り注いでくる氷柱を見て、麗と葵がそう叫んだ。

「真紅に燃える灼熱の剣」

それに答える代わりに、悠は左手で葵の頭を下げさせて、右手で釵をかざして呪文を唱えた。

直後、釵は真紅に燃え上がり、その炎は剣の形を成した。

「…………爆ぜろ」

悠が静かにそう言つと、炎の剣は勢いよく弾け、辺り一面を焼き尽すように広がった。

「きゃあああああ!？」

「あ、あ、危ない、ですっ!」

灼熱の炎は氷柱を溶かし、地面や岩壁に張っていた氷も溶かし、彼の側にいた麗と鈴の頭をかすめた。

「……炎魔法は苦手だ。加減が効かん」

葵の頭から手を離し、釵をしまいながらぼつりと呟く悠。

「……?　なんか揺れてない?」

氷柱の罨を回避することが出来、ひとまず安堵していた麗が小首を傾げてそう言った。

「はい、地震、でしょうか?」

それに同意する鈴。

確かにこの洞窟は今、ゴゴゴという不気味な音を立てて揺れていた。

「……みんな、走って」

すると、葵が再びそう言った。

「こ、今度は何……ですか?」

それを聞いた鈴が恐る恐る尋ねると、

「水が来るよ！」

と、葵が叫んだ。

同時に、彼らが歩いてきた道から大量の水が押し寄せてきた。

「あれ、悠が溶かした氷、ですか？」

「わあ、悠の本気は凄いだね〜？」

「本気出しすぎよ馬鹿ああ!!」

「炎は好かん」

「知らないわよおお?!」

そんなことを言いながら、四人は押し寄せてくる水から全速力で逃げ出すのであった。

第21話 氷の女王

押し寄せてくる水から逃れる為に走る四人。

しかし、勢いがついた水の速度に勝てる筈もなく、四人はあっけなく水に吞まれてしまった。

（わあ、どうしよう？ 僕泳げないんだよなあ）

水に吞まれたカナヅチの葵は、バタバタと懸命に手足を動かしていた。

（あ。暴れても無駄な体力消費するだけだし、泳ごうとしなきゃいいのか）

が、そう思い、暴れるのを止めて水の流れに身を任せることにした。溺れているのに、葵は妙に落ち着き払っていた。

（あ……葵っ！？）

遠くの方で急に動かなくなった葵を見て、悠は心配心配。

まさか、力尽きてしまったのではないか？ という考えが通り、悠は近くで苦しんでいる鈴と麗を見て笑うのを止め、慌てて葵の元へ泳いでいった。

当然のごとく鈴と麗の前を素通りして。

（本当に性格最悪ね?!）

（……光魔法に呪いの魔法はない、でしょうか?）

「だ、大丈夫か!？」

「ゴホッ……う……うん、大丈夫。ありがとう、悠」

悠のおかげで無事に岸に上がることが出来た葵は、

「悠って本当にいいひとだね」

「どこがじゃボケエ!!」

そう言った直後、麗の見事な飛び蹴りによって吹っ飛ばされた。

「……悠、何か鈴と麗に言うことはない、ですか？」

それとほぼ同時に、杖で体を支えている鈴が悠に尋ねた。
その様子から、必死で岸に上がったということが窺える。

「別にない」

「……そう、ですか」

悠のさりりとした答えを聞き、

「覚悟、です」

鈴は杖を強く握り締めて、鋭く尖った杖先を悠に向けた。

「ぶ。俺に勝てると思ってるのか？」

それを見て、悠は顔色を変えるところか不敵に笑ってそう言った。

『ほーっほっほっほ！』

その時、静かな氷の洞窟に高笑いが響き渡った。

氷で出来た玉座に足を組んで腰掛け、岸に上がってきた四人を待ち構えていた、雪のように真っ白な髪と、氷のように透き通った青白い肌をしたその女性。

——彼女こそ、氷の女王である。

『よく此処まで……』

氷の女王が口を開くと、

「い、いきなり何するの、麗？」

彼女の登場に気が付いていないのか、飛び蹴りによって吹っ飛ばされた葵が頭を擦りながら起き上がってそう言った。

「じゃかあしい！！ あんたはあいつに騙されてんのよ！！」

「じゃ、じゃかあ……？ 落ち着いて、麗？」

葵は、ビシッと自分を指さして怒鳴った麗をなだめようとし、

「って、騙す？」

その途中で小首を傾げて彼女の言葉を聞き返した。

「……思っている、と言うより、勝てる、です」

「何？」

その隣では、鈴と悠が火花を散らしている。

『辿り着い……』

「これが目に入らぬか！……です」

彼女も氷の女王にまったく気付いていない模様。

鈴は図らずも氷の女王の言葉を掻き消しながら、リュックからきゅうりを取り出してそう言った。

「マジでゴメンナサイ」

きゅうりを見た瞬間、直角に頭を下げる悠。

彼は、大好物のきゅうりの為なら、なんの躊躇もなくプライドを捨てる事が出来るようだ。

「そうよ！ あんたが見てる悠は虚偽、虚構、虚妄、虚像！ 詰まり、フィクション腹黒悠なのよ！！」

小首を傾げた葵に、麗は言いたい放題言い放った。

「腹黒じゃなくて石黒だよ？」

「違う！！ あいつは頭先从爪先まで真っ黒ってこと！！」

と、反対側に小首を傾げて素で言い返してきた葵に麗が言うと、

「うん。確かに頭先从爪先まで真っ黒だね」

鈴から貰ったきゅうりを食べている悠の格好を見ながら葵が頷いた。確かに、彼は少し長めの黒い髪が覆う頭に黒いマフラーを巻き、黒いロングコートを身に纏い、おまけに黒い靴を履いている、と。

しかし、麗が言いたかったのは恐らく見た目のことではないだろう。

『って、聞けコラア！！』

すると、四人から完全に無視されていることに対して非常に腹が立った氷の女王が思い切り怒鳴った。

「「？」「」

ここで、四人はようやく自分達の背後にいる氷の女王の存在に気が付いた。

『……よく此処まで辿り着いたな？ わらわの二重トラップを生き抜いて抜かれた奴は久しぶりぞ』

やっと気付いてくれた、と安堵しながら、氷の女王は高い目線でそう言った。

「二重？ 氷柱しか襲ってこなかったわよ？」

彼女の言葉に小首を傾げる麗。

「その次に水が来ただろ」

すると、その隣できゅうりを食べている悠がさらりと言った。

「ええ？！ あれ、あんたが氷を溶かしたせいじゃなかったの！？」

「ぷ。そんなわけないだろ？ 馬鹿って悲し……」

素で驚いた麗を馬鹿にしている途中で、

「へえ、そうだったんだ。僕も悠が氷を溶かしたからだと思ってた」

「間違いは誰にでもある」

と葵が言ったので、悠はそれを中止して彼の頭にぼんと手を乗せながら優しくそう言った。

「一体なんなのよ、あんたは？！」

いつそ清々しい彼の変貌ぶりに、麗は思い切り突っ込みを入れた。

『ええい！ 無礼者！！ わらわを無視するな！！』

再び蚊帳の外にされた氷の女王は、青白い顔を赤くして怒鳴った。
すると、

「……首尾一貫」

『え？』

背後から声がして、氷の玉座が砕け散り、彼女の腹部に熱い衝撃が走った。
見ると、鋭く尖った杖が腹を貫いていて、そこから青い血が溢れ出ている。

「無礼はあなた、です」

鈴は氷の女王から乱暴に杖を引き抜き、

「……可愛いペンギンをいじめる、許さない、です」

彼女を感情の薄い目で睨みつけながらそう言った。

『くっ……お、おのれ！』

口から血を吐きながら、氷の女王は鈴を睨み返した。

「癒しの風」

すると、鈴が杖先で地面をつついて呪文を唱えた。

『なっ！？』

自分の腹の傷が見る見る回復していくのを見て、目を見開く氷の女王。

「楽に死ねると思わないで下さい、です」

『え』

何故敵である自分の傷を治したのかと思い、鈴の方を向くと、彼女が再び杖を構えたので、氷の女王の血の気がさつと引いた。

「……天罰、です」

『ぎゃあああああ？！』

鈴は無表情で氷の女王を力の限り貫き、突き刺し、滅多刺しにしては治しを繰り返して、彼女を思う存分苦しめ続けた。

「わあ……あんなに怒った鈴初めて見た」

「ええ……しかもあの娘、杖の使い方完全に間違ってるわよね？」

「と言うか、回復役が喜々として相手を傷付けるっていつのはどうなんだ？」

その見るもおぞましい光景を傍観しながら、のほほんとそんなことを言う三人であった。

第22話 町外れ

荒涼とした氷の洞窟に、思わず耳を塞ぎたくなるような断末魔の叫びが響き渡った。

「すっきりした、です」

鈴はふう、と息を吐いて満足気にそう言った。

「お、お疲れ様、鈴……」

「はい、です」

顔が青くなっている葵の労いの言葉に、鈴はこくりと頷いた。

「よかったわ……返り血も魔物と一緒に消えて」

彼の隣で、青白い顔をした麗が言った。

「……返り血？ 鈴、そんなもの浴びた、ですか？」

「ええ。目一杯」

「き……気付かないほど夢中になってたんだね？」

きょとんとした様子で小首を傾げた鈴に、葵と麗はますます顔色が悪くした。

「……出口だな、これ」

その時、いつの間に移動したのか、彼らから少し離れた所で悠が言った。

彼の目の前の岩壁には、一人が通れるくらいの不自然な穴が空いている。

「グッジョブよ、悠！ さあ、早く出ましょ？」

「うん。そうだね」

穴の向こうに見える空を見て、麗と葵は直ぐ様外に出ようと動いた。どうやら、早く外の空気が吸いたいようだ。

「……って、何これ？　なんか焦げた臭いがするんだけど？」

「気のせいだ」

その穴を通る途中で、悠が麗が言った言葉をさらりと流すと、

「……悠、」

今度は後ろから鈴に話し掛けられた。

「？」

名前を呼ばれたので悠が後ろを振り向くと、

「さっきのは悠のおかげ、です。ありがとうございました、です」

鈴は相変わらずの無表情で彼に言った。

——彼女は氷の女王に、ペンギンをいじめた怒りと、悠に対する日頃の鬱憤とをぶつけていたようだ。

「おお、もっと感謝しろ」

彼女の言葉の意味を知ってか知らでか、悠は人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべてそう言った。

氷の洞窟から四人が戻って来ると、ペンギンの町で氷の女王討伐成功を祝うパーティーが開かれた。

パーティーで賑わう町から少し外れた場所。

そこで葵がすつと右手を伸ばした。

すると、そこに雪のような白い小鳥がそこに舞い降りた。

「こんにちは」

くすりと笑って挨拶をする葵。

小鳥はまるで彼に挨拶を返すかのように、可愛らしくピイと鳴いた。

「相つ変わらずね？」 動物が餌もやらずに寄ってくるなんて」

「……凄い特技、です」

もう少しすればリスや蝶々も数匹集まって来そうなくらい御伽話ワールド全開な空間に、麗と鈴がやって来た。

「あれ？ もうパーティー終わったの？」

背後に現れた彼女たちに、小鳥を右手に乗せたままゆっくりと振り向いて尋ねる葵。

「まだ続いてる、です」

「でももうお腹一杯だし、この町寒いから早く出ようってわけ」

彼の問いに答えた後、

「って、あれ？ 悠は？」

辺りを見回しながら麗が言った。

「え？ 悠、麗たちと一緒にパーティーに行っただんじゃなかったの？」

それに小首を傾げながら返す葵。

ちなみに、葵がパーティーに行かなかった理由は、なんか面倒臭そうだからだとか。

「いえ、来てない、です」

鈴がふるふると首を横に振った次の瞬間、

「！」

麗は背後に気配を感じ取った。

「まったく……何処行つてたのよ、ゆー……」

そう言いながら麗が振り向くと、

『クワ？』

振り向いた先にあつた川の中から、緑色の肌を持つ、頭に皿を乗せた人のような魔物が顔を出した。

「う」

取り敢えず最後まで発言する麗。

「……河童だよ？」

「麗、失礼、です」

顔を出した魔物を見て小首を傾げながら葵が言い、その魔物と悠を間違えた麗に鈴がそう言った。

彼女は悠にとって失礼と言ったのか、河童にとって失礼と言ったのか。

残念ながら、それは定かではない。

「……」

『おい、お前ら』

麗が目をぱちくりさせていると、魔物が口を開き、

『此処らで河童見なかったか？』

と言った。

「はい、見た、です」

『うつそ、マジで！？ 何処何処？！』

鈴が頷いたのを見て、興奮した様子でキョロキョロと辺りを見回す魔物。

「そこ、です」

鈴はその魔物を指さしてそう言った。

『オレのことかい！！』

大きな水の音を立ててずっこける魔物。

『オレが聞いてんのは違う河童！ アナザー河童！ つうか何処の世界に自分の居場所聞く奴がいるんだよ！？ オレ、いじめられてんのか、ああ？！』

「え……ええと……」

いつの間にか小鳥がいなくなってしまった右手を剣の柄にかけた葵は、この愉快的魔物を攻撃すべきかすまいか考えていた。

『あ。待つて待つて、見習い剣士さん。オレ、仲間探しに來ただけだから。争う気ないし!』

すると、魔物が両手を前に出して言った。

「え？ あ、そうなんですか」

葵は剣から手を離すと、

「僕たち、あなた以外の河童さんは見てませんよ?」

魔物に穏和な笑顔を向けて言った。

『そつか、分かった。あんがとな』

魔物はそう言うのと、岸を足で蹴り、

『秘技・河童の川流れ!』

と言つて、川を流れていつてしまった。

あゝれゝとか言いながら。

「「……」」

三人がぼかんと口を開けて河童が流れていった方を見ていると、

「何してるんだ?」

そこにやって來た悠が、きゅうりをかじりながら小首を傾げて彼ら

に尋ねた。

「！ い、いえ、何でもないわ？」

「不思議な魔物もいる、ですね」

「うん、そうだね」

「？」

実際にあの魔物と会話まで交しておいても、何があつたのかよく分からない三人は、悠の問いに上手く答えられなかった。

第23話 野宿

紺色の空に金色の月が高く昇った頃、

「……また野宿っすか」

ゆらゆらと燃える焚き火を眺め、今更ながら麗がげんなりした様子で呟いた。

「まだ街が見えないんだから仕方ないだろ」

そんな麗の呟きに、自分達がいる場所からすぐ近くにある暗い森に目を向けていた悠が、彼女の方に顔を向けてそう返した。

「あーもー、隣町まで山越え谷越えって、どんだけ田舎なのよこの世界は!？」

「谷は越えてない」

「うつさい!」

「麗、近所迷惑、です」

悠の的確な突っ込みに麗が言い返すと、鞆の中を見ていた鈴が顔を上げて彼女に向けて静かに言った。

「う、ゴメン……って、何処にご近所さんがいるのよ!？」

素直に謝った後で、鈴の発言に突っ込みを入れる麗。

「……葵を見習う、です」

すると、鈴はそう言っで自分の右斜め前を指差した。

「へ？」

その先を見る麗。

「……くっ……」

そこには葵が丸くなって眠っていた。

「七時就寝」

「早くない?!」

鈴が状況を説明をすると、麗は透かさず突っ込んだ。

「当然だろ。葵が一番戦ってるんだ。お前が戦わないから」

それを聞いた悠が、すやすやと眠っている葵にそつと毛布を掛けながらそう言った。

「だってめんどー…ゴホンッ! そ、そう言うあんただって全然戦ってないじゃない!? ってか何毛布かけてんのよ?!」

「そのまま寝たら風邪引くだろ」

「ホントに葵だけには優しいわね?!」

麗と悠がそんな言い争いをしていると、

「……………ん……………ブーフ……………ジャーキー……………」

ぱりぱりと頬を搔きながら葵が寝言を言った。

「……………」

……………犬？　とか悠と麗が思っていると、

「……………この世界にボスキャラは何体いる、でしょうか？」

ふいに鈴が口を開いた。

「何体かしらね？　結構進んだ気がしないでもないけど」

彼女の声ではつと我に返った麗は、肩をすくめてそう言った。

「鈴たちが今まで会ったボスキャラは、巨大ゾンビ、麗、吸血鬼、氷の女王の四体、です」

「待て待て待て？　なんで私がカウントされちゃってるの？」

ナチュラルにボスキャラにカウントされたので、麗は鈴の言葉を遮った。

「？　違う、ですか？　でも、ボスキャラのような登場の仕方だった、です」

それを聞いた鈴は、若干驚いた顔をして言った。

「そつ、そうだったかしら……？　って、私、あんたたちと戦っていないし、第一ボスキャラが仲間になるわけないでしょう！？」

「悪役が仲間になるのは、王道、です」

麗の突っ込みに鈴がそう言い返すと、

「その逆もな」

悠がさらりと付け足した。

「何ちゃっかり不吉なこと言ってるのよ？！」

不穏な発言をした悠に、麗は勿論突っ込んだ。

「……で、何故急にそんな話を持ち出したんだ？」

悠は、まるでその突っ込みが初めからなかったかのように、至極自然な流れで鈴に問うた。

「流した！？」

「……お金……」

鈴も麗の突っ込みを軽く無視し、鞆に目を戻して小さく呟いた。

「？」

視界の隅で軽く凹んでいる麗を当然のごとく黙殺し、鈴に疑問符を向ける悠。

「なくなつた、です」

静かな夜に、鈴の小さな声がエコーを効かせてやけに響いた。

「……ええ！？ あんなにあつたのに？！ 一体何にそんなに使つたのよ！？」

エコーが消えた頃、やっと麗が我に返つた。

「主に旅に必要な道具代、宿代、食費、きゅうり代、旅の彩り代、麗の洋服代、です」

「……」

無駄遣いするな、と突つ込むに突つ込めない悠と麗。
何故なら、無駄遣いリストに自分もランクインしているから。

「ですが、一番の原因は、氷の洞窟、です」

顔を背けた二人を気にも止めずに、鈴は悔しそうにそう言った。

「？ 氷の洞窟？」

麗が小首を傾げると、

「ああ、流されたのか」

「はい、です」

さらりと悠が言い、こくりと鈴が頷いた。

「……ね、ねえ、鈴？　ちなみに後どれくらい残ってるの？」

突っ込む元気もなくなったのか、彼らのさらさらした行動を流して恐る恐る尋ねる麗。

「5N、^{「お」}です」

N^{「お」}＝この世界のお金の単位。

「5Nですって?!」

「きゅ、きゅうり三分の一本分だと!？」

「それじゃヘアピンすら買えないじゃない!!」

「……ぬいぐるみも、買えない、です」

まさかの残金を聞いて、珍しく取り乱す悠と、頭を抱える麗と、しょんぼりと下を向く鈴。

どうやら、旅の彩り代とは鈴の趣味に使った金のことのようなのだ。と言うか、趣味に走っている場合ではない。

「なんで流されないように大事にしっかり持ったのかなかったのよおあ?!!」

頭を手でぐしゃぐしゃにしながら叫ぶ麗。

「過ぎたことをとやかく言っても、無意味、です」

クールに言い返す鈴。

「いやいや、開き直ってんじゃないわよ!？」

「よし、明日からお前の出番だ」

そんな彼女に思い切り突っ込みを入れた麗に、悠が真顔でそう言った。

「は? ——!」

「ま、まさか……」

彼の言葉の意味にはつと気が付く麗と鈴。

「まつかせい! 盗賊上等おお!!」

などと、麗がイケナイことを叫んでいると、

「!」

ガサガサツと背後の森から物音が聞こえてきた。

サツ（警察）か!? と、体勢を低くして素早く茂みに隠れる三人。

ちなみに、彼らはまだ法を侵してはいない。念の為。

「あ!」

森から姿を現したのは警察ではなく青髪の少年だった。

「も、もしかして旅人さんたちですか!？」

しかも、隠れたつもりだが三人はバレバレだったようだ。

そう言いながら、恐怖というものはないのか、少年は怪しげな行動をしている三人に向かって真っ直ぐ歩いてきた。

「え、ええ、そうよ。て言うか駄目じゃない。がきんちよがこんな時間に出歩い……」

警察ではないと分かり、麗はほっと胸を撫で下ろして立ち上がった。

「お願いです! 街を……街のみんなを助けて下さい!!」

すると、少年は麗の発言を遮り、思い切り頭を下げて三人にそう言った。

「「……」」

深々と下がった頭を見下ろし、三人の心は珍しく一つになった。

「「いくらで?」」

物欲で。

第24話 森

「街のみんなが連れ去られた？」

次の日の朝、目が覚めた葵が驚いたように言った。

「……はい。虫取網で」

葵の言葉にこくりと頷く青髪の少年。

「そ、壮絶だね」

何が壮絶なのかはよく分からないが、葵は真顔でそう言った後、

「じゃあ、みんなはエディとエディの街の人達を助ける為に？」

と、鈴と悠と麗の方に顔を向けて尋ねた。

「はい。500000によ——ムグ」

三人は、破格の依頼引き受け金額を言おうとした青髪の少年、エディの口を押さえ、

「そ、そうだ。こいつ、相当困ってるようだしな」

「も、勿論、です。困っている人は助けるのが当然、です」

「あ、あつたり前じゃない！ 人として——！」

冷や汗を掻きながらわざとらしい綺麗事を並べた。

「わあ、みんな優しいね」

が、それを聞いて、葵は嬉しそうに微笑んだ。

（あ、葵……）

彼が何ひとつ疑うことなく向けた素敵な笑顔を見て、酷く胸が痛くなる三人。

「じゃあ、僕も協力させてもらうね、エディ？」

「あ、ありがとうございます！ では、早速出発しましょう！」

こうして、五人は森の中に入っていった。

木々が鬱蒼と生い茂る森の中を進んでいる途中で、

「そう言えば、どうしてエディだけ無事だったの？」

葵が小首を傾げながらエディに質問をした。

「ボク、お散歩してたんです」

エディは顔を上げてそう返した。

「お散歩から帰る途中で、虫取網を担いだ怪しい奴が街から出てきたのを見て……ボク、怖くて慌てて花の中に隠れたんです」

その時のことを思い出しながら語るエディ。

「そこから恐る恐る様子を窺ってみると、奴が持つてる虫籠の中に街のみんながごっちゃり……」

「そろそろ突っ込むわよ、なんじゃそら?!」

エディの突っ込み所満載な解答に、痺れを切らした麗が彼に思い切り突っ込みを入れた。

「虫籠の中に街人がごっちゃり……ホラー、です」

「それに、虫取網で連れ去られたとか、花の中に隠れたとかあからさまにおかしいでしょう!?!」

鈴の発言の後に二連突っ込みをかます麗。

「……? どこがおかしいの?」

「おかしいとこ分かんないヤツいたー!!」

麗は素で首を傾げた葵に突っ込みを入れた後、

「……たく、何の為に擬態使ってるのよ？」

と、頭に右手を当てて溜め息をつきながらエディに言った。

「「？ 擬態？」」

彼女の言葉に小首を傾げる葵と鈴。

「！ 気付いてたんですか？」

その隣で、エディは驚いたように目を見開いて麗を見た。

「当然。気配が違うわ」

「……」

腕を組んで偉そうに頷いた麗を無言で見る悠。

「……何よ？」

それに気が付いた麗が聞くと、

「……虫ついてるぞ」

と、自分の右肩をちょいちょいと指さしながら悠が言った。

「へ？ —— いやあああ！！」

自分の右肩を見た麗が絶叫した。

彼女の右肩には、鮮やかな黄緑色をした親指大のイモムシが這っていた。

「虫！ 虫い！！ 悠、お願い取ってええ！！」

それを見た虫が大の苦手な麗は青ざめ、涙目で悠にお願いした。

「そのくらい自分で取れ」

が、悠はふいと顔の向きを変えて、すたすたと歩き出した。詰まり、全く取り合ってくれなかった。

「無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理！！」

ほとんど泣きながらそう叫んでいる途中で、

「……………」

麗は自分に背を向けた悠の肩が微かに震えていることに気付いた。

（……………笑ってやがる……………）

悠にとって、人の不幸はきゆうり味（葵以外）。

「こんの腹黒大魔王！！」

麗の中で、悠はいつの間にか大魔王に昇格していたようだ。

「ええと、擬態って？」

「詰まり、エディは人ではない、ですか？」

悠と麗がそんなことをしている間、葵と鈴はエディに先程の話を続きを聞いていた。

「……はい、そうです。ごめんなさい。この姿じゃないとみなさんが驚くと思って……。実はボク、」

エディはそれに応えてこくりと頷くと、

「「！」「」

ポン、と小爆発を起こし、少年の姿から淡い青色の光の玉に四枚の薄い羽がついた姿、

「妖精なんです」

——妖精に変わった。

「わあ……ファンタジーだね」

「フェアリー、です」

「……あれ？　それだけですか？」

鈴と葵が思ったより、と言うか、まったく反応を示さないので、ちよびつとシヨックを受けるエディ。

「……妖精、」

「あ、は、はい？」

悠に声をかけられたので、エディはしょんぼりと下に向けていた顔を上げて、

「その怪しい奴ってのはどんな奴だ？」

「怪しい奴です」

「喧嘩売ってんのか？」

「すみません」

という流れを終えた後、

「黒いローブを着た、虫籠を肩に下げて、虫取網ととても大きな鎌を担いだ奴でした」

と答えた。

「詰まり、こいつか？」

「はい。そいつです」

五人の前に黒いローブを着た、虫籠を肩に下げて、虫取網ととても大きな鎌を担いだ奴が現れた。

「長いわ!!」

直後、麗が謎の突っ込みをかました。

右肩に乗っていたイモムシは、どつやら癩に取ってもらったようだ。

第25話 死神

『トリック・オア・トリート?』

目の前に現れた黒ローブは、担いでいた大きな鎌と虫取網を肩に預け、物欲しそうに両手を前に出して小首を傾げた。
そんなことを突然言ってきたものだから、

「「は?」」

「「……」」

麗とエディは思わず聞き返し、鈴と悠は極寒の視線を黒ローブに向けた。

『お菓子をくれなきゃ、悪戯しちゃうぞ?』

しかし、そんなことはお構い無し。

黒ローブは先程の台詞を和訳して再び言った。

そのどこか眠たそうな目は限りなく真剣で、キラキラと輝いている。

「……何? なんなのこいつ?」

「ね!?! ボクが言った通り怪しい奴でしょう!?!」

「鈴たちにお菓子を要求している、です」

「甘いものは好かん」

そこで、三人と一匹の妖精は、急遽小さな声で小会議を始めた。

「誰もあんたの好みなんか聞いてないわよ」

「……これは、畏、なのでしょうか？」

麗が、議題と関係のない発言をした悠に突っ込みを入れると、鈴が小首を傾げて言った。

「分からないわ。だから、もう少し様子を――」

麗が首を横に振ってそう言っている途中で、

「はい。ハッピーハロウィン」

『！』

葵が微笑みながら黒ローブにチョコレートをあげた。

「つて、バカー――！」

「いたっ！？」

そんな葵に、麗は飛び蹴りを見舞わした。

「ちゃんと人の話を聞きなさいよ！？　つて言うか、なんでチョコなんて持ってたのよ？！」

葵を前後にガクガク揺らしながら、話を聞いていなかった、ということよりも、金欠で食糧難だと言うのにチョコレートを持っていた

ことに対して突っ込みを入れる麗。

「非常食用に持っておいたんだ。ほら、遭難した時にチョコを食べたおかげで生き延びたって話、聞いたことあるでしょう？」

その突っ込みに対して、葵は右手の人さし指を立てて微笑みながらそう言った。

「はい、あります、です」

「流石葵。しっかりものだな」

彼の言葉を聞いて、感心したように鈴と悠が頷いた。

「死神に非常食あげてどうすんのよー!？」

「尤もな突っ込みを入れる麗。」

『ほう。よくオレ様の名前が死神だって分かったな。もぐもぐ』

すると、黒ローブ、死神が効果音を自分で言いながら驚いたように言った。

「そんなのでっかい鎌見たら分かる……って、名前なの!? っ
て言うか、自己呼称“オレ様”?! しかも、早速チョコ食ってる
!？」

先程から突っ込み通しなのに、三連突っ込みを見事に決める麗。

『鎌子のことか?』

でっかい鎌、と言われて、死神が肩に預けている鎌を指さしてそう言った。

「鎌子？ お前、ネーミングセンスないな」

「悠、人のこと言えない、です」

突っ込み続きで息切れした麗のことを気遣ってか、鈴が彼女の蚊遣り豚をブタ子と名付けた悠に突っ込みを入れた。

「やい、死神！ 街のみんなを返せ！！」

まったく話が進まないの、痺れを切らしたエディが勇ましく言った。

葵の後ろに隠れながら。

『やだ』

が、簡潔に断られてしまった。

「……ええと、どうして死神さんは妖精さんたちを捕まえたりしたんですか？」

あっさり断られた為に凹んでしまったエディに代わって、葵がそう尋ねた。

『お菓子をくれなかったから』

またもや簡潔に答えを述べる死神。

「だからってそんな……」

『でも、少年はチョコくれた』

葵の発言の途中で、

『お礼する。何欲しい？』

と言った。

「え？ ええと、じゃあ、その妖精さんたちをください」

『らじゃ』

葵が言うと、死神はすんなりと了解して妖精が沢山入った虫籠を彼にプレゼントした。

「……なんか普通に返してもらっちゃったわね？」

「はい、です」

予想外の出来事にぽかんとした顔になる麗と鈴。

「はい。エディ」

「あ、ありがとうございます！！」

エディは少年の姿に変身して葵から虫籠を受け取ると、

「では、皆さん、ご機嫌よう!」

と言って、爽やかに去ろうとした。

「待てコラ」

「ですよね」

が、悠にがしっと捕まってしまった。

「……?」

何やら後ろの方で悠と鈴と麗がエディとこそこやっているので、小首を傾げる葵。

『少年』

すると、自分のことを死神がそう呼んだので、

「僕、葵って言います」

葵はそう言いながら振り向いた。

『……葵、チョコありがとう。美味かったぞ』

「どういたしまし……」

『好き』

葵の発言の途中で、死神は彼のことを抱き締めた。

「て？」

「「！？」 葵！！」」

突然の出来事に驚く葵と鈴と麗。
同時に、辺りの空気がざわついた。

「……鈴、奴の弱点は何だ？」

ざわつきの原因は悠。

彼は、葵に抱きついていて死神に殺気が籠った鋭い眼光を向けながら、隣に立っている鈴に静かに尋ねた。

「しつ、“死神”……人を死に誘う魔物、弱点は光魔法、です」

完全に何か良からぬものが切れている悠の声。

その声で質問されたので、鈴は慌ててエディから受け取った報酬を鞆にしまい、魔本を開いて彼に死神の弱点を教えた。

「暗雲の閃光は……」

『ちやお』

が、悠が呪文を唱えている途中で、死神は力が抜けるような抑揚のない声で別れの挨拶を言つて、ヒュ、と姿をくらました。

「……破滅をもたらす」

そのまま呪文を中止するのはなんか癪だったので、悠は周りの森

をぶっ飛ばした。

「悠、森林破壊は地球温暖化に繋がる、です」

「此処地球じゃないだろ」

「……盲点、です」

第26話 カエルの町

「……？」

ぽつ、と肌に何かが当たり、葵は空を見上げた。
見上げた空は、青々と晴れていた先程までとは打って変わって、どんよりと鉛色をしていた。

「雨、です」

その隣で鈴が言った。

彼女も、葵と同じように空を見上げている。

「うつそ？ さっきまであんなに晴れてたのに？」

最悪、とでも言いた気に空を見上げる麗。

「……」

悠は、乾いた地面に徐々に増えてゆく水の跡を無言で見つめていた。

「わあ、強くなつてきちゃったね」

「笑ってる場合じゃないでしょう!？」

くすりと笑いながら言った葵に麗が突っ込みを入れると、

「街が見える、です」

鈴が前方を指さしてそう言った。

「ついてるぅー！ 走るわよ、野郎共！！」

麗が拳を振り上げながら、盗賊の頭領だった頃のように言った。

「……鈴、野郎じゃない、です」

「き、気にしなーい気にしない！」

鈴が突いてきた細かいところを笑って誤魔化す麗。

「……本当に強くなってきたね、悠？」

本降りになったので、自分の後ろを歩いていた悠の方に顔を向けながら葵が言った。

「……」

が、悠は反応しなかった。

「……？ 悠？」

「何？ あんた、まだ死神のこと怒ってんの？」

小首を傾げた葵の隣で、麗が呆れたように言うと、

「……別に怒ってない」

悠は短くそう返した。

「あつそ。じゃあ、早くあの街に行くわよ」

「悠、行こう？」

「……分かった」

そうして、四人は前方に見える街を目指して駆け出した。

「いやあああああ？！」

「か、かか、カエル、です！」

街の宿屋に入ると、麗と鈴が顔を青くして叫んだ。

「わあ、“カエルの町”はペンギンの町みたいに住んでる人がみんなカエルなんだね」

そんな二人をよそに、くすりと笑いながらカウンターに向かう葵。

「わ、笑ってる場合じゃないでしょう！？　って言うか、人じゃないしー！！」

「あ、葵、早く此処を出ましよう、です」

麗が突っ込み、珍しく動揺していながらも相変わらずの無表情で鈴が言つと、

「え？ もう部屋取っちゃったよ？」

「お部屋はその階段を上がってすぐケロ。ごゆっくりケロン」

葵が振り向いてケロリと言い、カウンターにいるヘッドドレスをつけたカエルがにこつと笑いながらそう言った。

「あーもー、このうつかり症候群！！」

「……早くも擬音まで感染されやがって、です」

そんな彼の発言に、頭を抱えてわけの分からないことを叫ぶ麗と、若干口が悪くなる鈴であった。

「雨、止みそうにないね」

部屋の窓から外の様子を見ながら葵が言つと、

「……この町には長くいたくない、です」

椅子に座った鈴がぽつりと呟いた。

「そうよ！ だから早く雨止ませなさいよ、葵！」

すると、ベッドに倒れていた麗が立ち上がり、葵をズビシツと指さしてそう言った。

「ええ！？ 無理だよそんなの?!」

「葵って名前なんだから空くらい青くしてみなさいよ!!」

「ええ！？ 意味分かんないよ、麗?!」

「……寒い、です」

そんな会話を聞いて、鈴が再び呟いた。
はたしてその“寒い”は、体感温度に対してなのか、麗の発言に対してなのか。

「って、悠！ 何笑ってんのよ!?!」

すると、麗が今度は悠を指さしてそう言った。

三人に背を向けて壁を向いている悠は、肩が震えていた。

「……」

が、まったく悠は反応を示さなかった。

「……………？ 悠、寒いのか？」

「寒いってどういう意味よ！？」

心配そうに首を傾げた葵とは対照的に、麗は寒いの意味を取り違えて悠の腕をがしつと掴んで彼を振り向かせようとした。
すると、

「触るな！！」

「きゃあ！？」

悠は麗を思い切り突き飛ばした。

「……………！」

はっと我に返った悠は、三人から逃げるように部屋を出ていった。

「！？ 悠？！」

「麗、大丈夫、ですか？」

「え、ええ……………」

突然部屋を出てしまった悠に驚く葵と、突き飛ばされた麗の元に行く鈴。

「……………悠、何処に行った、でしょうか？」

「うん……傘も持たないで大丈夫かな？」

「そこかい」

最後までしっかりと突っ込む麗であった。

第27話 作戦R

「ゆう？」

友人の名前を呼びながら雨が降り頻るカエルの町の中を歩き回る三人。

「どこにもいないわね。……たくもー、いないなら“いないよん”って返事ぐらいしなさいよね！」

「麗、それは無理な上に、悠はそんなキャラじゃないと思う、です」
麗がプンプン怒りながら言った言葉を聞いて、鈴が静かにそう言う
と、

「フレンチジョークよ」

と、麗が言った。

何故フレンチ？ とか思う鈴。

「悠……本当に何処に行ったんだろう？」

これだけ探しても、悠が一向に姿を見せないの、葵は下を向いて心配そうに呟いた。

「よし！ こうなったら作戦Rよ！」

すると、麗が拳を振り上げてそう言った。

「「作戦R?」」

その発言に、葵と鈴は小首を傾げた。

「……」

「……」

「……」

物陰に隠れ、無言でじっと一点を真剣に見つめる三人。

「……ねえ、麗?」

そんな空間に耐えられなくなったのか、葵がゆっくりと麗に話し掛けた。

「何よ?」

「これは……本気?」

返事をした麗に、葵は先程まで自分達がじっと見つめていた方、前

方を指さして尋ねた。

その指の先には、大きなザルをつつかえ棒で支え、その下に餌としてきゅうりが置いてあるという、至ってシンプルな罠が仕掛けてある。

——これが“作戦R”。

「もち」

「葵、無駄、です」

「うん。そうみたいだね」

真顔で頷いた麗を見て、鈴と葵は何かを諦めたようにそう言った。

「何、やる前から諦めてんのよ?! 諦めたらそこで試合終了なのよ!?!」

そんな二人に、どこかで聞いたことがあるようなカッコいい台詞を言う麗。

「麗、これに誰か引っ掛かると思っの?」

「……ましてやあの悠、ですよ?」

だが、そんなことは関係なしに、葵と鈴が彼女に言い返した。

「ひ、引っ掛かるわよ! あのかきゅうり好きなら間違いなく“しまった!”とか言いながら……」

そう言っている途中で、

「！　きたあ！！」

人影を視界の隅に捉えた麗は、手元の糸を思い切り後ろに引っ張った。

それによつてつつかえ棒が倒れ、きゅうりを取ろうとしていた者の頭にザルが落ちた。

『しまった！』

きゅうりを取ろうとしていた者、紺色の髪の毛が覆う頭にザルを乗せた死神がそう言った。

「つて、死神かよ！？」

罨に掛り、自分の予想通りの反応をしたのはいいが、それが悠ではなく死神だったので、麗は彼に思い切り突っ込みを入れた。

「あの罨に引っ掛かる人がいた、です……！」

「す、凄いね」

彼女の隣でちよつとした感動を覚える鈴と葵。

『むっ……きゅうりを餌に獲物を誘き寄せるとは実に巧妙』

別に動けないというわけではないのに、頭にザルを乗せたまま巨大な鎌、鎌子を担いでいる死神がそう言った。

「よ、よしなさいよ。照れるじゃない」

彼の誉め言葉に照れる麗。

どうやら彼女は誉められると弱いようだ。

「……あなたもきゅうり好き、なのですか？」

葵とともに物陰から姿を現した鈴が尋ねると、死神は簡潔にこう答えた。

『野菜は嫌いだ』

「ならなんで引っ掛かったのよ!？」

意味不明な死神に再び思い切り突っ込みを入れる麗。

「死神さん、悠見てませんか？」

そんな麗は置いといて、葵が死神に質問をした。

『ユー?』

何それ、美味しいの? と言つかのように首を傾げた死神に、

「黒コートを着た、頭に黒マフラーを巻いてる黒魔道士、です」

「前に森であんたに向かって魔法ぶつ放そうとしてたヤツよ」

と、鈴と麗が言った。

『おお。見たぞ』

それを聞いて、首を傾げた筈なのに頭からザルが落ちていない死神が気付いたようにそう言った。

「！ 本当ですか！？」

『ん』

驚いて聞き返してきた葵に頷いて見せる死神。

「何処で見た、ですか？」

『何？ オレ様のプロフィール？』

深く尋ねてきた鈴に、死神は真剣な顔でそう聞き返した。

「そんなこと誰も聞いてないわよ？！ って言うか、どう聞いたらそう聞こえるのよ！？ 更に言っと、どうでもいいわよ！！！」

『がびーん』

麗の、どうでもいい、と言う言葉にショックを受ける死神。

「ム力つく！！ なんかム力つく！！！」

「死神さん、悠を何処で見たんですか？」

どうどう、と麗をなだめながら葵が質問をすると、

『あっち』

死神は西の方を指さしてそう言った。

「あっち？」

彼の指さした先に目を向ける葵。

『ん。黒いのならあっちに走ってったぞ』

それに頷いて応える死神。

「あっちって……森じゃない」

「……どうして悠は森に行った、でしょうか？」

西を見た麗と鈴が小首を傾げながら言った。

その先には、先程自分達が抜けてきた森が広がっている。

『もう我慢の限界だったんだろ』

すると、頭に乗ったザルを取りながら、それに応えるように死神が言った。

「！？　が、我慢の、」

「限界ですって?!」

その言葉に衝撃を受ける鈴と麗。

二人は森から目を離し、バツと葵に振り向いた。

「？」

「葵！！ あんた、悠に何かされたの！？」

小首を傾げた葵に、麗が可哀想な目を向けながらそう尋ねた。

「？ 別に何もされてないけど、“何か”って何？」

「そ、そんなこと、鈴たちに聞かないでください、です！」

小首を傾げたまま素で聞き返してきた葵に、鈴が無表情のまま怒鳴った。

「???? ご、ごめん？」

葵はわけが分からないという様子で鈴に謝った後、

「……ええと、とにかく悠は森に行っただんですね？」

と、死神に再確認した。

『ん』

葵の言葉に頷く死神。

「ありがとうございます！」

『何、お礼はほっぺ……』

「もう葵行っちゃったわよ？」

『……』

麗の突っ込みを受け、死神は発言を中止したまま固まった。はたして、死神は葵に何を求めていたのか。

『……お前らは行かないのか？』

石化が解けた死神が小首を傾げながら麗と鈴に尋ねた。

「行きます、けど……」

「あんた、魔物なのにどうして……」

疑いの眼差しを向けながら鈴と麗がそう言っている途中で、

『お前の勘は外れてないと思うぞ？』

死神が左手の人さし指でくるとザルを回しながら麗に向けてそう言った。

「！」

それにはっとなった麗は、

「行くわよ、鈴！！」

「？ は、はい、です」

鈴の腕を引っ張り、森に向かって走り出した。

『いつてら』

死神に見送られながら。

第28話 穴の中

再び森に入った葵は、辺りを見回しながら引き続き悠を探し回っていた。

「悠、何処に――って、うわあ!？」

そうやって左右にはかり気を取られていたせいか、葵は雨でぬかるんだ地面に足を滑らせ、そのままうつ伏せに転んでしまった。

「いったた……」

葵がそこから状態を起こすと、

「?」

丁度真正面の地面に、大きめの穴が空いていることに気が付いた。

「……穴?」

「……ったく……葵め……なかなか足速いじゃない」

「……これで探すのが二人になってしまった、です」

葵に遅れて森に入った麗と鈴が、息を切らしながらそう言った。

「あーもー、か弱いレディほつといてどっか行くてどういうことよ?！」

「こづいこと、です」

「アゝンド、ぐちゃぐちゃだし、ドロドロだし、びしょびしょだし、寒いし、風邪引くし、雨降ってるし、最悪だし!！」

「傘が何処にも売ってなかったから仕方ない、です」

頭を抱えながら叫ぶ麗に淡々と言葉を返す鈴。

「大体“あっち”ってアバウトすぎんのよ、死神のヤツ!! もつと深く! 細かく! 繊細に教えなさいってのよ!!」

「……麗、取り敢えずあそこで雨宿りしましょう、です」

残念ながら、麗が何故そこで“繊細”という言葉を使ったのか理解出来なかった鈴は、大きな木の下を指さしてそう言った。

「うなゝ」

よく分からない唸り声を発しながら、彼女が指さした木の下に移動

する麗。

「！麗、あちらを見てください、です」

「うな？」

すると、うなだれている麗に鈴が別の木の下を指さしてそう言った。

「！あ、あれは……！」

そちらに目を向けると、麗は大きく目を見開いた。

「はい、いかにも怪し気な穴がある、です」

こくりと頷きながら鈴が言つと、

「100N銀貨……！」

鈴が指さした大きな穴の少し手前に落ちている小さな銀貨を発見した麗が嬉しそうに叫んだ。

「……そう、ですね」

彼女の発言を聞いて初めてその存在に気付いた鈴。

「凄いわ……！ こんなところにお金が落ちてるなんて……！」

「いえ、この距離でそれに気が付いた麗の方が凄い、です」

銀貨を拾い上げてエキサイトしている麗に、左手を横に振りながら

無表情で鈴がそう言った。

「……で、こんなところにお金が落ちてるってことは、」

すると、麗は銀貨から目を離し、

「此处を通った人がいる、ってことね」

目の前の地面にぽっかりと空いている大きな穴を見据えて不敵に笑いながらそう言った。

「！」

麗はふざけているのか真面目なのかよく分からない、と鈴は思うのであった。

穴の中は、真っ暗な闇の世界が広がっていた。

「わあ……真っ暗」

その中に入った葵が思わずそう呟くと、

『まあ、穴の中だからね』

と、前方の闇から返事が返ってきた。

「あ、そっか。そうですねー…って、わあ!？ 水?!」

葵は、独り言の筈が返事が返ってきたことを驚かずに、自分の右足が水の中に入ってしまったことに驚いた。

『大丈夫。ただの水溜まりだよ』

「ほ、本当ですか？ よかった」

闇の中から聞こえてくる声を聞いて、ほっと胸を撫で下ろす葵。

『……足、怪我してるね。血が出てるよ?』

すると、この暗闇の世界でも視力が利くのか、声の主がそう言った。

「はい。さっき上で転んじやって」

そのことをまったく不審に思っていない葵は、照れ笑いしながら応えた。

『痛そうだね。いい薬をあげるよ』

「わあ、本当ですか？ ありがとうございます」

『じゃあ、もっとこっちにおいでよ』

そう言つて、声は葵を前方に招いた。

「はい……って、あれ？ 僕は誰と話してるんだろっ？」

それに返事をして歩を進めた葵は、やっと自分が何者かと会話している不思議に気が付いた。

そして、自分の足が深々と水の中に入るのを感じた。

『河童だよ』

そう言つた直後、声の主、河童は、先程からずっと構えていた三日月型の鎌を振り下ろした。

「え——」

勿論葵は、暗闇のせいで目の前にいる河童がどのようなことをしようとしているのか分からない。

そうして、ただ鎌が自分の身に振り下ろされるのを待っている葵を、

「葵——！」

聞き慣れた声の主が抱き締めるようにして自らが盾になった。

鎌は勢いを殺さず、その背中を深く切り裂いた。

「！？ 悠？！」

自分が探していた友人、悠の突然の登場に驚く葵。

それに次いで、葵は自分の手に温かい液体が付着したのを感じた。

「ゆ、悠……これ、もしかして……血？」

恐らくそこにあるであろう悠の顔に、恐る恐る顔を向ける葵。

「……大丈夫だ。だから速く此処から出る、葵」

すると、悠は葵を離し、出口に向かうように葵の背中を押した。

「出る、って……悠は？」

何も見えないのだが、葵は振り向いてそう尋ねた。
その時、辺りが少し明るくなるのを感じた。

『邪魔するな！ その人間はオレの獲物……』

自分の攻撃を邪魔された為に腹が立った河童は、再び鎌を振り上げながら怒鳴っている途中で、

『……だ……』

眉間に鋭いナイフが突き刺さり、そのまま仰向けに倒れた。

「葵！ 悠！」

鎌の豪快な落下音が消えると、今度は河童を見事一撃で倒した麗の声が聞こえてきた。

「！ 麗、鈴は！？」

その声を聞き、葵はそちらに振り向いた。

「此処にいます、です」

すると、麗のすぐ後ろに、杖先に一点の白い光を点した鈴が走ってきた。

そのおかげで、真っ暗な穴の中は随分と明るく照らされた。

「お願い！　悠が怪我してる！」

「分かりました、でー…」

葵の言葉に了解している途中で、鈴は言葉を詰まらせた。

「？　鈴？」

そんな鈴に疑問符を向ける葵。

すると、鈴は悠を指さして言った。

「ゆ、悠、血が……青い、です」

「え？」

鈴が指さした方、悠に振り向くと、予想外の光景に葵は目を見開いた。

「悠………！？」

「………」

鈴の明かりに照らされた悠は、背中から大量に青い血を流していた。

「……俺は悠じゃない」

悠は三人の視線から逃れるように漆黒の瞳を伏せると、

「河童だ」

静かな声でそう言った。

第29話 一緒に

「か、河童!？」

悠が突然告げた言葉を、鈴は驚いて聞き返した。

「……ああ。しかも、ボスキャラだ」

穴の中を流れる川の浅瀬に座り込んで背中走る激痛に耐えながら言葉を付け加える悠。

「! そんな――」

「……まあ、」

悠は、更に驚いたわりには相変わらず無表情の鈴の発言を遮り、

「そこにいる盗賊は最初から感付いていたようだがな?」

「!」

と、麗に顔を向けてそう言った。

それにつられるように、鈴もそちらに顔を向ける。

「……当然よ。気配が違っわ」

すると、麗は悠を見据えて静かに言った。

「う、麗……では、本当に悠は……」

麗と出会った金山で、彼女が悠の心臓目掛けてナイフを投げつけたことを思い返し、恐る恐る麗に尋ねる鈴。

「魔物の血は青いの。それは鈴もよく知ってるでしょう?。」

麗が鈴に向き直って、彼女の目を真っ直ぐに見ながらそう答えると、

「どうだっていいよ、そんなこと」

今まで黙っていた葵が、その言葉を打ち消した。

「!?!?」

「どっ、どっ?!」

その言葉を思わず聞き返す麗と、いつもと感じが違う葵に驚く鈴と悠。

「鈴、早く回復魔法。悠が死んじゃうでしょう?。」

「は、はい、です」

「! ま、待て、葵!? 俺は魔物で、しかもボスキャラなんだぞ?!」

鈴に回復魔法を使わせる指示をした葵に、悠が慌ててそう言った。

「だから?。」

と、聞き返してきた葵に、

「敵を回復させてどうする?! 俺はこのまま死んだ方が……」

悠がそう答えかけると、

「!」

悠の顔に、冷たい輝きを放つ諸刃の剣が突きつけられた。

「……それ以上言ったら、そのかつこいい顔に傷がつくよ?」

予想外の行動に驚いている悠に対し、葵はうつ向き加減に、不良のような脅し文句を口にした。

「あ、葵……」

「……」

名前を呼ばれても、黙って下を向いている葵。

「……今、俺を回復させたら、すぐにお前らを殺しにかかるかもしれないんだぞ?」

そんな彼が突きつけている剣が微かに震えているのを見ながら、悠は静かに尋ねた。

「大丈夫だよ。今までも大丈夫だったし、さっきだって、悠は僕を殺すどころか命がけで助けてくれたでしょう?」

彼の問いに、葵は下を向いたままそう答えた。

「さっきみたいに都合よく正氣に戻らなかったらどうする？」

が、悠が再び質問をした。

「……俺は……お前らを殺したくない」

悠はそう呟いた後、

「……それなのに、俺の青い血はお前らの赤い血を求めてやまないんだぞ？」

顔に突きつけられている諸刃の剣を掴んで、自分の首に向けさせた。

「だから――……」

「僕だつて悠を死なせたくない！！」

その手に力が入る前に、葵は顔を上げて彼に向かってそう叫んだ。

「……！」

その顔を見て、悠は目を見開いた。

それは、珍しく怒っている彼が泣いていたから。

「……だから、死んだ方がいいなんて言わないで」

葵は自分の頬を伝う雫を拭くと、

「これから一緒にこの旅を続けて、一緒に元の世界に戻ろう?」

悠の手を剣から外しながらそう言った。

「……あ——」

「ごちゃごちゃとっさいわよ、ザビエルハゲ」

そんな葵に何か言いかけた悠に、麗が言った。

「ぎ、ざびっ!?!」

「あんたに拒否権なんてあると思ってんの?」

麗は、予想だになかった酷い呼称を思わず聞き返してきた悠を見据え、

「……リーダーがついて来いって言ってんだから、あんたは黙ってついて来ればいいの」

腕を組んでそう言った。

「それに、もう四人分の宿代を払ってしまいました、です」

すると、彼女に続いて、

「悠が来ないと、もったいない、です」

相変わらずの無表情で鈴が言った。

「お前ら……」

素直ではないけれど、二人の気持ちはしっかりと伝わった。

「って言うか、あんたは主戦力なの！ あんたがいなかったら、私まで戦わなくちゃなくなるでしょう？」

「……それに、攻撃してきたら返り討ちにしてやる、です」

すると、じわじわと恥ずかしくなったのか、麗と鈴は照れを隠すようにそっぽを向いてそう言った。

「というわけだから、町に戻ろう、悠？」

「……」

そんな二人を見てくすりと笑いながら、葵は悠に右手を差し延べた。悠は少し迷ったが、

「……分かった」

決心したようにその手をとって立ち上がった。

そう言ってくれた悠に、葵はいつもの笑みを向け、鈴と麗は胸を撫で下ろした。

「……が、葵、」

「？」

名前を呼ばれたので、葵が小首を傾げると、

「そろそろ死にそうなんだが」

と、どくどくと背中から青い血を流しながら悠が言った。

「わあ！？ 鈴、早く早く！！」

「い、癒しの風！」

その一言で悠が大怪我をしていることを思い出した葵は、慌てて鈴に回復魔法をお願いした。

第30話 リーダー

次の日の朝、鈴と麗の希望通り、四人はカエルの町を素早く後にした。

「わあ、いい天気だね」

「ああ、そうだな」

自分の隣を歩いて、以前と同じように同意してくれた悠に、なんだか嬉しくなる葵。

「……詰まり、あのマフラーの下にはお皿がある、ですか？」

「ぷぷー！ 超ダサイんですけど！」

すると、後ろからそんな会話が聞こえてきた。

「すると、雪山で倒れたのはお皿が凍ったせい、ですか？」

「きゃはは！ ちょっとやめてよ、鈴……」

鈴が言ったことに対し、麗が楽しそうにきゃらきゃらと笑っている
と、

「宙を舞う三日月」

悠が、前を向いたまま、さらりと呪文を唱えた。

「きゃあああああ？！」

その魔法によって発生した風に吹き飛ばされる麗。

「ったいわね！ いきなり何するのよ！？」

起き上がったものの申し始める麗。

「おお。これはいいストレス解消法だ」

それを無視し、邪悪な笑みを浮かべながら悠がそう言った。

「って言うか、なんで私だけなのよ！？」

「鈴、避けた、です」

「なんですとお！？」

そんな三人を微笑みながら見ていた葵は、

「あ、そう言えば麗、いつの間に僕がリーダーになったの？」

ふと、昨日疑問に思ったことを聞いてみた。

「は？ そんなの、あんたの職業が剣士だからに決まってるでしょ？」

その問いに、麗は小首を傾げながら答えた。

「？ 剣士だとリーダーなの？」

「あつたり前じゃない」

葵の二つ目の問いに、さも当然のように頷いて答える麗。

「でも、僕、剣士の見習いだよ?。」

そんな麗に、葵がさらりとそう言った。

「はわ!?。」

葵の言葉にはつとする麗。

「そ、そうだったわね……見習いがリーダーってのはちょっと変かもだわ……」

「何を言っている? 葵以外リーダーになれる奴がこの中にいると思っっているのか?。」

ぼそつと呟いた麗に、悠が溜め息をつきながらそう言つと、

「あ、ありがとう。でも、実力で考えると、悠が一番強いし、頭も良いから、悠がリーダーの方がいいんじゃないかな?。」

彼にお礼を言つた後、葵は小首を傾げながらそう言つた。

「あ、葵……」

「……そう言えば、悠は学年トップ、でしたね」

葵の言葉を聞いて、照れる悠と、思い出したように言っ鈴。

「ただのきゅうり馬鹿にしか見えないのにね？」

「学年ワースト十位は黙ってる」

「ワースト九位よー!!」

「麗、下がってる、です」

そんな会話をしている傍らで、

「うーん、誰が一番リーダーに向いてるのかな？」

葵は首を捻っていた。
すると、

『やっぱり断然オレ様だろ』

と、後ろから抑揚のない声が聞こえてきた。

「って、あんたこのパーティーのメンバーじゃないでしょう?!」

「！ 死神さん」

その声を聞き、麗が突っ込みを入れて、後の三人も彼に振り向いた。

『ふわふわ』

振り向いて見てみると、死神は巨大な鎌に乗って宙に浮いていた。

「じ、自分で効果音を言ってる、です」

「ええ。ただ者じゃないわね」

それとは別のところに驚きポイントを置く鈴と麗。

「……貴様、何処から湧いて出た？」

そんな二人はほつといて、悠は睨みを利かして死神に質問をした。

『お前、馬鹿？ 人が湧いて出てくるわけないだろう？』

その質問を聞き、死神は右手で自分の頭を指さして、それをくくると回しながら悠に言った。

「貴様は人じゃないだろ」

悠は、ぷ、と噴き出した麗を釵を突きつけて黙らせた後でそう言った。

『すたっ』

すると、死神は鎌から降りて、

『ん。神だ』

えへんと胸を張って言い放った。

「「……」」

死神と四人の間を、冷たい風が吹き抜けた。

「……あそつか。“死神”だから」

数秒後、ぽん、と手を叩いて葵がそう言うつと、

『流石葵。大好きだ』

死神は葵を抱き締めた。

「暗雲の閃光は破滅をもたらす」

悠は即座に光魔法の呪文を唱えた。

直後、轟音を伴う激しい雷が死神目掛けて落下する。

『ぶん』

それが直撃する寸前、死神は自分で効果音を言いながら大鎌、鎌子を振るった。

「！」

「か、雷を……」

「斬った……です」

すると、あろうことか、雷は切り裂かれ、斬撃に負けて消え去った。そんな信じ難い光景を目にし、四人はただただ驚くばかり。

『……まだまだ修行が足りないな』

死神は鎌子を担ぎながら、目を見開いて固まっている悠にそう言った後、

『む。おやつの間だ』

と言って、

『ちやお』

姿をくらました。

「「……」」

死神が消え去った場所を無言で見つめる四人。

「……ええと、リーダーどうしようか？」

そんな居た堪れない空気を変えるべく、話題を元に戻す葵。

「……」

「……」

「……葵でいいわよ」

「う、うん。分かった」

こうして、葵がこのパーティーのリーダーとなった。

第31話 眠気

背の高い草むらの中を進む四人。

「それにしても、一体何をしに来たのかしら？ 死神のヤツ」

草を掻き分けて道を作りながら、先程現れた死神について麗が言った。

「きつと僕たちと遊びに来たんだよ」

すると、彼女の前を歩いていた葵が振り向き、くすりと笑いながらそう言った。

「……いいわね？ 葵は頭の中まではのぼりして」

そんな葵を見て、一気に体の力が抜ける麗。

「？ 違うの？ じゃあ、死神さんは一体何をしに僕たちの所に来たの？」

「どうあゝかあゝらあゝ、それが分からないから質問したんでしょー！？」

足を止めて小首を傾げて尋ねてきた葵の両頬を、麗は思い切り左右に引っ張った。

「……確かに、何もしないで帰っていったな」

その隣で悠が言うと、

「いえ、悠の鼻をへし折っていった、です」

彼の後ろでさらりと鈴がそう言った。

「きさー……」

鈴に悠が何か言い返そうとしたところ、

「う、嘘！？　悠、大丈夫？！」

「！」

葵が心配そうに悠に顔を向けて言った。

悠の方が背が高いので、葵は必然的に彼の顔を見上げる形になる。

「だっ……大丈夫だ。と言うか、今のはただの表現技法だ」

そんな風に心配そうな顔で自分を見上げる葵を見下ろしながら、悠は若干恥ずかしそうにそう応えた。

「よかったぁ……って、え？　そうなの？」

胸を撫で下ろした後、小首を傾げた葵に、悠が言葉の意味を説明し始めた。

「……もしくは、葵に会いに来た、です」

「……あり得るわね」

その様子を見て、そんなことを呟く鈴と麗。

「……たくもー、男のくせにこのプリチー麗ちゃんより男にモテるってどういうことよ?」

そう呟いた後で、心持ち膨れながら溜め息まじりに麗が言つと、

「……」

鈴は、麗の顔を無表情、且つ、無言で見つめた。

「……何よ?」

それに気付いた麗が尋ねると、

「麗、葵に焼き餅、ですか?」

と、小首を傾げながら鈴が言つた。

「! ち、違うわよ!?」

「……あれ? 霧が出てきたね」

顔を赤くして否定した麗の発言のすぐ後に、悠から言葉の意味を聞き終わった葵がそう言つた。

「そう、ですね」

周りを見回した後、こくりと頷く鈴。

四人の周りには、彼の言葉通り、いつの間にか白い霧が発生していた。

「なんかだんだん濃くなってきたわよ？」

歩を進めるに連れて濃くなっていく霧を見ながら麗が言うと、

「……この濃霧の中をこれ以上進むのは危険かもな」

悠がその場で足を止め、背負っていたリュックを降ろしてそう言った。

「宙を舞う三日月」

悠の魔法のおかげで、背が高い草が茂っていた彼らの前に、三日月型に開けた場所が出来る。

「そうだね。じゃあ、此処にテント張ろっか」

葵はリュックの中から道具を取り出し、そこにテントを張ることにした。

「鈴、手伝う、です」

「ありがとう」

テント張りを手伝うと言ってくれた鈴に、くすりと笑いながらお礼を言う葵。

「じゃあ、私は見張りね」

辺りに魔物はいないかと気配を探る麗。

「俺はきゅうりだな」

「働けよ」

腰を下ろしてきゅうりを食べ始めた悠に、麗は素早く突っ込みを入れた。

「よいしょっ」

「完成、ですね」

葵と鈴によって二つのテントが完成すると、

「ふあ……」

「……鈴、急に眠くなってきた、です」

「ええ……私も……」

「うん……じゃあ、今日はもう寝よっか」

突然の眠気に襲われ、四人は男女に分かれてテントの中に入っていた。

『……………』

テントから少し離れた所に、木の幹に隠れながら、四人の様子を

見ている少女がいた。

『……ふうん。あれが恒わたるのお気に入るか』

『む』

ピエロのような格好をしたその少女が面白そうに四人を眺めながらそう言った。

すると、それに答えるかのように、彼女の頭に乗っているトンガリ帽子の横から顔を出した、丸い犬のぬいぐるみのような生物が鳴いた。

『面白そうまる。さあ、行くまるよ、むうちゃん！』

『む』

四人がテントの中に入ったことを確認すると、少女はそちらへ向かって、不思議生物と共に走り出した。

第32話 悪夢

太陽が昇り、テントの入り口の隙間から眩しい朝日が差し込んできた。

「ん……」

その光が顔に当たり、麗は顔をしかめてゆっくりと目を開けた。

「……もう朝か」

状態を起こしながらそう言った麗は、

「……？」

自分の高い声を聞き、喉元に右手を持っていきながら不思議そうに首を傾げた。

「……」

その動かしした右手が視界に入り、麗はぱきつと固まった。

「な、なんだ、これは……！？」

麗はそう言っ素早く立ち上がり、自分の姿を見回して見た。

白い肌に明るい色の可愛い服を来て、まだ縛ってない狐色の髪は腰まで伸びている。

それは、いつもと変わらない麗の姿。

「……っ！」

自分の姿を見て顔を真っ青にした麗は、

「おい、起きろ、鈴！」

と言って、隣で寝ている鈴を起こした。

「……？ ……なん……ですか、麗？」

麗にやかましく起こされ、目を擦りながら少し不機嫌そうに鈴が尋ねた。

「違う！ 俺は悠だ！」

彼女の質問に、麗は真剣な顔でそう叫んだ。

「……」

すると、鈴はまだ眠たそうな目を麗に向けた。

「……麗？ 鈴の感情が薄いから、それを改善するために、毎日朝一番でボケてくれるのは、嬉しい、ですが、」

鈴はそう言った後、

「朝から大きな声を出さないでください、です」

と言って、再び横になり、深々と布団を被った。

「こ、これが冗談に――」

そんな鈴に、麗が何か言いかけると、

『きゃあああああ――！』

「――！？」

隣のテントから、つんざくような叫び声が聞こえてきた。

何事かと思い、急いで隣のテントに向かう麗と鈴。

二人がテントの入り口を開けると、

「超最悪――！ あり得ない――！ マジ最っつ低――！ 死ねよこのエ
口河童――！」

「ちよっ……いたっ……痛いっば――！」

顔を真っ赤にして怒り狂っている葵と、彼に手当たり次第に様々な物を投げつけられて痛がっている悠がいた。

「こ、これは……！？」

その光景を見て、目を見開く麗と、

「あ、葵にここまで言わせるなんて……！」

悠は一体何をしたのか、と思う鈴。

「――！ 鈴――！ ちちち、違うわよ――！ おっ、起きたらいつの間にかこいつが私の隣に寝てて――！」

鈴の姿を見た葵は、顔を真っ赤に染めて必死に彼女に弁解している途中で、

「…………え？」

彼女の隣に立っている麗を見て固まった。

「きゃあああああ！！ ドッペルゲンガー！！」

そして叫んだ。

「…………たた…………それは僕の台詞だよ？」

すると、起き上がった悠が葵に向かってそう言った。

（（ぼ、“僕”?!））

悠の聞き慣れない自己呼称に驚く鈴と葵。

「あ、葵……………なのか?!」

そんな二人をよそに、麗が恐る恐る悠に尋ねた。

「え？ そうだけど……………何言ってるの、麗？」

「違う。俺は悠だ」

小首を傾げながら答えた悠に、麗がきつぱりとそう言った。

「ええ！？　じ、じゃあ、もしかして……麗？！」

それを聞いて、悠は葵を指さしてそう尋ねた。

「そ、そうよ」

葵は頷いて答えた後、

「……え？　詰まり、私たち、入れ替わっちゃったってこと？！」

頭を抱えてそう言った。

「……成程、詰まり、この葵は麗で、この麗は悠で、この悠は葵、
になってる、ですね？」

どういわけか中身が入れ替わってしまった三人を順に指さしながら鈴がややこしいことを言うと、三人は頷いた。

「世の中、不思議なことがいっぱい、ですね」

「いや、俺はお前だけ入れ替わってないことの方が不思議でならないんだが？」

ふむふむ、と頷きながら鈴が言うと、麗姿の悠がさりと突っ込んだ。

「……その体に入ると、誰でも突っ込み役になる、ですか？」

そんな悠に、鈴は小首を傾げてそう言った後、

「恐らく、これのおかげ、です」

懷から壊れた十字架を取り出した。

これは、吸血鬼との戦闘時に出したものだ。

「ああ、これってあの時の十字架？」

「はい、です」

鈴は、葵姿の麗の言葉にこくりと頷いた後、

「この十字架には、魔除けの力があつた、です」

と言った。

「でも、壊れちゃってるよ？」

すると、悠姿の葵が小首を傾げた。

「……はい、魔除けの効果は一度切り、だったよう、です」

中身が葵だということは分かっているのだけれど、いつもとはまっ

たく違った悠の言葉遣いにどうにも馴染めない鈴。

「……ということは、私たちは寝てる間に誰かに魔法を掛けられたってことね」

その隣で腕組みしながら麗が話をまとめた。

「魔法掛けたヤツ出てこいウラァ!!」

そして叫んだ。

「……葵の姿でそんな下品な言葉を口にするな」

すると、悠がさりとそう言った。

「下っ……あ、あんただって、私の姿でそんなぶすつとした顔しないでよ!」

「は？ それはもともとだろ？」

「なんですって?!」

そうして火花を散らし始める麗と悠。

「け、喧嘩しないでよ、二人ともっ？」

二人を止めようとする葵。

「ゆ……悠が喧嘩を止めてる、です」

そんな様子を見て、やはりどうしても馴染めない鈴であった。

第33話 鬼ごっこ

取り敢えずテントから外に出てみると、四人の前に長い桃色の激しくうねった髪少女がにっこりと笑って立っていた。

その少女の顔は真っ白で、鼻には赤い球のようなものがついていて、左の目の周りにはオレンジ色の大きな星がペイントがしてある。

「……誰？」

道化師のような格好をした少女を見て、葵姿の麗は一言そう言った。

『まろろ、まろはナイトメアの“マロ”まろ。で、こっちは……』

名前を聞かれたので、笑いながらそれに答える少女、マロ。

『……まろ？』

自分の連れを紹介しようとしたら姿がなかったので、マロは辺りを見回した。

『あ』

「……可愛い、です」

『む〜』

探していた連れは、鈴に捕まっていた。

『そっちは夢魔の“むうちゃん”まろ』

「あつそ。で？ 私たちになんの用、まるまる？」

『違うまる。マロまる。まるまるじゃないまる』

小首を傾げて再び質問してきた麗に、マロは首を横に振ってそう応えた後、

『それに、なんの用って、失礼まる。ぞつきーがまるのこと呼んだくせに』

麗を指さしてぷうつと膨れた。

「へ？ 私が？ って言うか、ぞつきーって何よ？」

『盗賊のお姉ちゃんだから“ぞつきー”まる』

マロはニッケネームの由来を答え、

『ぞつきー、さつき“魔法掛けたヤツ出てこい、ウラァー！！”って、言ってたまる』

と言った。

「…………え？ 詰まり、あんたが私たちに魔法掛けたの？」

その言葉を聞き、確認するように聞き返す麗。

『そうまる』

こくんと頷くマロ。

「戻せ」

『いいまろよ』

マロは麗の要求に素直に頷いた。

「……へ？」

あっさりと要求が通ったので、麗が拍子抜けしていると、

『まろを捕まえられたら戻してあげるまろ！』

『む〜』

マロは鈴から夢魔を取り返してからそう言って走り出した。

「なっ！ ま、待ちなさい！！」

「む、むうちゃん！」

そうして彼女を追うように走り出す麗と鈴。

「……」

麗姿の悠は倦怠感溢れる溜め息をついた後、

「天空を巡る無形の刃」

と、いつものように魔法を唱えた。

「……？」

しかし、魔法はいつになっても発動しなかった。

『まろろ、無駄まろ、きゅうちゃん』

そんな悠を見て、マロは面白そうに笑いながらそう言った。
さしずめ、きゅうりが好きだからきゅうちゃんなのだろう。

「き、きゅうー……」

『人間は魔道士以外は魔法は使えないまろ』

「……！」

きゅうちゃん、と呼ばれたことに対してもの申そうとしたところ、
マロにそう言われたので、悠は今、自分が麗の姿になっていること
を思い出した。

「くっ……」

魔法が使えないと分かった悠は、バツと葵の方に顔を向けた。

「こんにちは」

葵は、指に止まった黄色い小鳥にくすりと笑いながら挨拶をしていた。

悠の姿になっけていても、葵ワールドは健在だった。

「ど、動物に嫌われてた筈の悠の指に小鳥が!？」

「……と言つか、悠が爽やかに笑ってる、です」

そんな悠を見て目を見開く麗と鈴と、

「……」

こんな非常時にそんな呑気なことをしていても、中身が葵だから怒らない悠。

「……仕方ない」

悠はまたひとつ溜め息をつく、と、不意だがマロを追って走り出した。

盗賊らしく、ポシエットいっぱいに入った狩猟用ナイフを投げながら。

『まろろろろろろ!?!』

『むゝ?!』

「うっ、うらー…悠、やめる、です!」

「ああ、あ、危ないでしょう!?! 私たちもいるのよ?!」

この行動にはマロと夢魔は勿論、鈴と麗も驚いて叫んだ。

「ナイフを投げられたくないなら止まれ、餓鬼」

お子様は嫌いなようで。

悠は再び両手の指と指の間に、計八本のナイフを挟んで構えると、

「ああ、ちなみに言つとくが、その体傷付けたら殺すからな」

それらを投げながら葵姿の麗にそう言った。

「ならそんな危ない物投げんじゃないわよおお?!」

ご尤もな突っ込みを入れながら、麗は死ぬ気でそれらを避けた。
そして、避けながらも必死にマロを追い続けた。

『まろろ！ すつごく楽しいまろね、むうちゃん!』

『む〜』

自分を追ってくる三人との距離を時々確認しながら、マロと夢魔は、
楽しそうに笑った。

そう。彼女たちにとって、これは楽しい鬼ごっこ。

『まろ!?!』

時々ナイフが飛んでくるけれど。

『ま……』

飛んできたナイフをなんとか避けたマロ。

しかし、悠もでたらめにナイフを投げていたわけではない。

『むっ！』

彼の思惑通りにバランスを崩したマロは、そのまま豪快に転んでしまった。

その際に、彼女の腕に抱かれていた夢魔は投げ出された。

が、夢魔は長めの耳をパタパタと懸命に動かして、飛んだ。

『いったた……』

『む……』

そんな夢魔が、痛がるマロの元に飛んでいく前に、

「大丈夫？」

悠姿の葵が彼女に手を差し出した。

『……！』

顔を上げたマロは、衝撃に打たれて固まった。

綺麗な指先は自分に向けて差し出され、低い美声は限りなく優しく、美しく整った顔に浮かんだ表情は、自分を心配してくれている。

『……素敵な殿方……』

どうして彼の手を拒むことが出来ようか、いや、出来ない。

赤い瞳の中にハートマークの光が宿ったマロは、その手を取って、彼と一緒に立ち上がった。

「わあ、痛そうだね。鈴」

青い血が滲み出ているマロの膝を見て、葵はすぐに鈴を呼んだ。

『きゅん』

『……むん？』

彼の優しさにキュンキュンしているマロに、そいつ、河童だぜ？
と言う夢魔の突っ込みは届かなかった。

第34話 目覚め

「大丈夫？」

と言いながら、悠姿の葵が転んでしまったマロに駆け寄った時、

「ぷ。ダッサ」

麗姿の悠は、転んでしまったマロを小馬鹿にするように笑っていた。

（……これが葵と悠の差ね）

（転んだ人を見て心配する葵と、笑う悠……対照的、です）

二人を見比べながら、そんなことを思う麗と鈴。

「鈴」

「あ、はい、です」

葵と呼ばれたので、鈴は思考を停止して彼の元へ移動した。

『りんりんのおかげで痛くなくなったまる。どうもありがとうまる』

治療が終了すると、マロはぺこりと頭を下げて鈴にお礼を言った。

「……どういたしまして、です」

りんりん、と呼ばれたことが若干気になりながらも、鈴はそう応えた。

「はいはい、良かったわね。てなわけで、早く元に戻してくれない？」

『はいまる。むうちゃん』

麗の発言にマロはこくりと頷いた後、夢魔を呼んだ。

『む』

すると、夢魔は水が入った金ダライを頭の上に乗せてマロの隣にやって来た。

「「?」「」

「……可愛い、です」

その金ダライを見て小首を傾げる葵と麗と悠と、金ダライの重みで少し潰れている夢魔を見てとろろーんとする鈴。

『ご苦労様まる』

マロは夢魔から水が入った金ダライを受け取ると、

『現実世界へ、四名様、おかえりまろ〜！』

「「！？」」

と言って、その水を四人に向けてぶっかけた。

「いやあ！？」

叫び声をあげながら、麗はガバツと布団から起き上がった。

「あ……あれ？」

自分が濡れていないことに気付いた麗は、不思議に思っ自分の体を見下ろしてみた。

「！ も、戻ってる……」

見下ろすと、そこにはいつもの自分の姿があった。

「……夢才チ？」

麗がポリポリと頭を掻きながらそう言つと、

『まろろ、夢だけど夢じゃないまろ』

背後からマロの声が聞こえてきた。

「！ ……夢だけど夢じゃない？」

そちらを振り向きながら、何かの映画で聞いたことがあるようなマロの台詞を聞き返す麗。

『そうまろ。さっき見た夢は、まろの能力まろ。まろがぞつきーたちに見せた夢は、現実と同じように痛みも感じれば、お腹だつてすくまろ。詰まり、夢であつて夢じゃないまろ』

マロは長くてややこしい説明を終えると、

『まろはナイトメア。夢を操る魔物まろ』

くるりと回つた後、腰に手を当ててそう言つた。

「……な……成程……」

プスプスと頭から煙を出しつつも、取り敢えず頷いておく麗。

『ま!』

「?」

すると、マロは何を感じ取ったのか、ぴくんと反応すると、物凄い勢いでテントから出ていった。

「何事かしら? 鈴、起き―…」

その行動に小首を傾げながら、麗がまだ隣で眠っている鈴を起こそうとしたところ、

「?!?」

激しい爆発音が隣のテントから聞こえてきたので、鈴は麗に起こされるまでもなく飛び起きた。

二人は顔を見合わせた後、隣のテントへと向かった。

「じ、これは……?!」

外に出ると、鈴は目を見開いた。

それは、背の高い草が生い茂っていた筈の自分の目の前に焼け野原が広がっていたから。

「い、一体何が――」

麗は言っている途中で、

「!？」

「……」

戦場に一人の鬼がいることに気が付いた。

「ゆ、悠？」

「どうした、ですか？」

テントが吹っ飛んだというのに彼の隣で丸くなって眠っている葵は置いていて、鈴と麗は恐る恐るその鬼に話し掛けた。

「……俺の……」

悠はわなわなと震えながら小さく声を発した。

「「？」」「

『いったた……いきなり何するまるか、きゅうちゃん?』

小さすぎて聞き取れなかった悠の言葉に麗と鈴が首を傾げると、爆煙が晴れ、数十メートル離れたところでマロが腰を擦りながら立ち上がった。

同時に、

「俺の皿に触るなあああ!!」

悠が怒鳴った。

「さ、皿?!」

未だ嘗てないほどの悠の怒りように慌てふためく鈴と麗。

『お、お皿なんか触ってないまる! まろはただ“おはようまる”って言うてきゆうちゃんに抱きついただけまる!』

すると、両手をブンブンと横に振ってマロがそれを否定した。

(抱きついたのか、アイツ!?)

とか思う鈴と麗はほっというて、

「壮麗なる龍は全てを呑み込む!!」

悠は恐ろしいほどの殺気を放ちつつ、今まで一度も聞いたことがない呪文を唱えた。

直後、悠のすぐ後ろの地面が爆発し、そこから全身水で出来た巨大な龍が姿を現した。

「……綺麗、です」

朝日を浴びてきらきらと輝く水龍を見て、鈴は思わずそう呟いた。
美しい輝きを放った後、水龍は身をくねらせ、マロに向かって勢いよく突進していった。

『ま、まま、まずいまるっ！！』

衝撃で地面を削り飛ばしながらこちらに向かってくる水龍に、マロは白い顔を真っ青にすると、

『むうちゃー！ーん！！』

マロは力一杯そう叫んだ。

『む~~~~~~~~！！』

すると、夢魔は物凄い速さでマロの前に飛んできた。
麗を担いで。

「麗！？」

いつの間にか自分の隣からいなくなっていた麗に驚く鈴。

「ちよっ……えええ？！」

『流石むうちゃん！ これならきゅうちゃんは攻撃できないまる！』

『むっ！』

パニック状態になっている麗をよそに、助かった、と目を輝かせる

マロと、えへと胸を張る夢魔。

この展開に、水龍は猛突進を続けながらちらりと悠の方に顔を向けた。

「構わん。行け」

そんな水龍に、悠はあっけらかんと言いつつ放った。

「ふざけんじゃないわよおお!?!」

『まろろろろろろ!?!』

『む~~~~~~~~?!』

こうして、二人と一匹は水龍に吞まれていった。

第35話 プロフィール

優しい風に顔を撫でられて、ぱち、と葵が目を開けると、

『まろっ、まろの無礼をお許しくださいまろっ』

『むむっ』

まず始めに、悠の目の前に平伏しているマロと夢魔の姿が目に入っ
た。

「……それだけで許されると思っているのか？」

その次に葵の瞳に映ったのは、そんな彼女たちを見下ろして楽しそ
うに笑う悠。

『め、滅相もございませんまろ！ どうかここはひとつこれで……』

『むむっ』

マロと夢魔は、頭を深々と下げたまま、きゅうりがいっぱいに入っ
たバスケットを悠に献上した。

「……いいだろう。だが、次はないと思え」

その献上物に、ちょっぴり嬉しそうな顔を見せたが、すぐに無表情
に戻る悠。

『まろっ！ ありがたき幸せまろっ！』

『むむ』

マロと夢魔は、へこへこ何度も頭を下げた。

「……」

——おかしい。

葵はそう思った。

何故なら、彼の知っている悠は、こんなことをするような人物ではないから。

こんな、他人に土下座をさせ、それを見下ろして笑うような加虐的な人物では。

（……寝惚けてるのかな？）

葵は、ぐしぐしと目を擦って再び目を開けてみた。

すると、

「目が覚めたか、葵？」

先程の黒い彼ときゆうりは何処へやら。

悠は、ふ、と顔を綻ばせ、葵の短めの銀髪についての寝癖を手で優しく撫でつけながらそう言った。

「うん。おはよう、悠」

そこにいたのは、葵が知っているいつもの優しい悠。

やはり寝惚けていたんだ、と思いながら、葵は彼に挨拶をした。

「……二重人格、です」

悠の変わりようを見て、麗に癒しの魔法を掛けながら、鈴はそんなことを呟くのであった。

「……で、貴様は此処に一体何をしに来たんだ？」

ちゃっかり隣で朝食を自分達と一緒に食べているマロに、悠がきゆうりを手に取りながら質問をした。

『まろ、遊んで欲しかったまろ』

マロは口の中の物を飲み込むと、にこっと笑ってそう言った。

「遊んで欲しかったあ？」

予想外だったのか、思わずその答えを聞き返す麗。

『そうまろ』

「……どうして鈴たちと遊びたかった、ですか？」

こくと頷いたマロに、夢魔の頭を撫でながら鈴が尋ねた。

『だって、恒が言ってたまる。みんなと遊ぶと楽しいって』

彼女の問いに、マロはハムにフォークを突き刺しながら答えた。

「？ わたる？」

聞いたことのない名前に、小首を傾げる葵。
すると、

『呼んだ？』

「「！？」」

突如、葵の背後に大鎌の柄と刃に足をかけて浮遊している人物が現れた。

四人がバツとそちらに振り向くと、その人物は眠そうな顔で、ちゃお、と彼らに挨拶した。

『まろろ、ニーハオ。相変わらずいつ何処から現れるか分からないまろね、恒』

『む〜』

驚いて固まっている四人をよそに、ころころと笑いながら挨拶するマロと夢魔。

（どうして挨拶だけ日本語じゃないんだろう？）

という葵の些細な疑問はほっとして、

「わたる?!」

「あなたの名前は、死神、ではないのですか？」

麗と鈴がいきなり現れた人物、死神に向かって質問をした。

『それ、苗字。オレ様のフルネームは“死神^{しにがみ} 恒^{わたる}”だ』

その問いに、死神はさらりとそう答えた。

「苗字が“死神”?!」

『12月25日生まれ of 山羊座で、好きなものは甘いものと葵で、嫌いなものは甘くないもの。身長は90M^{みょん}だ』

んな無茶苦茶な!! と突っ込みを入れる麗を完全に無視し、自分のプロフィールを語り始める死神。
ちなみに、M^{みょん}この世界の長さの単位。

「完全無視かよ!?! って言うか、いらぬ情報流してんじやないわよ!?!」

『……体重は秘密だ』

「いや、自分から言い出したくせに何、恥じらってんのよ!?!」

自由奔放な死神に突っ込みを入れまくる麗。

「貴様、もう一度言ってみろ？」

彼のプロフィールの好きなものの中に、葵が含まれていたことに対してご立腹の悠。

『！……成程。お前、そんなにオレ様のことが……いいぞ。メモ用紙は持ったか？』

悠の言葉をそのままの意味で受け取った死神は、照れ臭そうにそれを了承した。

「……と言つか、死神のくせに、キリストと同じ日に生まれた、ですか？」

自意識過剰な死神を吹っ飛ばす為に魔力を高め始めた悠の隣で、鈴が小首を傾げながらそう言った。

『ん。同じ神だからな』

「天空を巡る無形の刃」

高慢すぎる答えを述べている死神を、悠はなんの躊躇もなく吹っ飛ばした。

ついでに、麗と鈴も巻き込んで。

「死神さんは180cmなんですか。高いですね〜」

『まろろ、あおぴょんはいつもほのぼのしてるまろね〜』

『む』

目の前で大乱闘が始まったにも関わらず、葵はくすりと笑ってそう言った。

第36話 棒つき飴

「よしよし」

『む』

頭を撫でてやると、夢魔が気持よさそうに鳴いたので、葵はくすりと思つてもう夢魔の頭を一度撫でた。

『あ、あおぴょん？』

そんなほのぼのとした空間にマロが足を踏み入れた。

「？ 何、マロ？」

葵はその声に振り向いて、小首を傾げながら彼女に用件を尋ねた。

『これ、止めなくていいまるか？』

すると、マロは震える指で右手をさした。

「これ？」

マロの指に従って、葵はそちらに顔を向けた。

「首尾一貫！」

恐ろしい技名を言いながら鋭く尖った杖を悠に向かって突き出す鈴。

「宙を舞う三日月」

顔色ひとつ変えずに平然と呪文を唱え、彼女を吹き飛ばす悠。

「集中豪雨う！！」

そんな悠に狙いを定めてボウガンを連射する麗。

『む？ 飴？ 飴と言ったら、オレ様はメロン味が一番好きだぞ』

聞き違いをして関係のない話を持ち出す死神。

「知らないわよ！！ ちなみに私は檸檬味が一番好きよ！！」

今度は死神に向けて矢を放ちまくる麗。

「鈴、莓味がいい、です」

立ち上がって再び杖を構える鈴。

「甘いものは好かん」

そう言って、再度魔力を高め始める悠。

マロが指さしたその先では、鈴と悠と麗と死神による大乱闘が繰り広げられていた。

「わあ、楽しそうだね」

が、それを見た葵は、くすりと笑ってそう言った。

『いや、楽しそうって、確かにたわいない微笑ましい会話してるけど、これ、マジバトルまるよ?』

肩の所で右手をブンブン横に振りながら、葵に見た目年齢に不相応な冷静な突っ込みを入れるマロ。

「うーん、僕はミルク味が一番好きかなあ」

『……まろは葡萄味が一番まる』

これ以上何を言っても無駄だと思ったのか、マロはがっくりと肩を落としてそう言った。

「葡萄……あつた。はい」

『まろ?』

「うん。マロの言う通り、もうそろそろ止めた方がいいかもね」

突然手渡した物に驚いているマロを残し、葵は背負った剣をスラリと抜いて歩き出した。

『ありがとうまろ、って、あおぴょん!? 危ないまろ……』

葵がくれた棒つきの葡萄味の飴のお礼を言った後、マロは慌てて彼を止めようとした。

「連雨!」

「首尾一貫！」

『あ、UFO』

「地を這う……」

それは、葵が剣一本で矢と杖と私語と魔法とが飛び交う危険極まりない戦場に向かって歩いていったから。

「ストップ」

しかし、マロの心配は無用だった。

『「!？」』

葵は剣を使って、麗が放った無数の矢を弾き落とし、鈴が突き出した杖を受け止め、最後に悠の口の前に左手の人指し指を立てて詠唱を止めさせた。

「そろそろ出発しよう？」

驚いて固まっている五人をよそに、葵はくすりと笑いながらそう言っ
って剣を収めた。

「よしよし」

『む〜』

いつものように柔らかく微笑みながら、すっかりなついて自分の頭の上に乗っている夢魔を撫でる葵。

「……何、何？ 詰まり、葵が一番強いってこと？」

その後ろを歩いている麗が檸檬味の棒つき飴をくわえながらこそつと言つと、

「……そのよう、ですね。葵、一番戦ってた、でしたから」

その隣で苺味の棒つき飴を口から離して鈴が応えた。

『メロンの飴にメロンメロン』

メロン味の棒つき飴をくわえ、鎌に乗って浮遊しながらその後ろを進む死神。

『まろろ、きゅ〜うちゃ〜ん』

「天空を巡る無形の刃」

『まろお!〜?』

自分に引っ付いてきたマロを即座に吹っ飛ばす悠。

「悠、モテモテ、ですね」

「ええ、モテモテね。あんながきんちよにまで」

『オレ様もモテモテだぞ』

「知らないわよ」

鈴と麗と死神が無表情でそんな会話をしていると、

「あ、街が見えてきたよ」

先頭を歩いていた葵がそう言った。

頭に乗っていた夢魔は、マロの元に飛んでいってしまっていないなくなっていた。

「あら本当。結構大きな街ね」

「鈴、疲れた、です」

『オレ様も疲れたぞ』

「知らない、です」

『オレ様、しょんぼり』

先程と同じテンションで会話をする三人。

『しくしく。葵』

知らない、と二回も冷たくあしらわれた死神は、悲しげな効果音を自分で言いながら葵の元へ飛んでいった。

「天空を巡る無形の刃」

が、悠の魔法によって、それは叶わなかった。

「てんぷらの町」

そのことに気が付かなかったのか、葵は顔を上げて町の入り口の大きな門に書かれた文字を音読した。

「てんぷらの町い？」

「わあ、美味しそうな町の名前だね」

「……油っこそう、です」

「まさか、住人全員がてんぷら……!？」

「ええ!？ それじゃあ、てんぷらが町中を歩ってるの、悠?!」

「……体脂肪が気になる方にはお勧め出来ない町、ですね」

「って、んな分けないでしょう!？」

そんなことを言いながら、四人はてんぷらの町に入ってしまった。

第37話　てんぷらの町

「わあ、賑やかな町だね」

町の中心部から離れた静かな所にある宿屋の部屋を取った後、外に出た葵がそこから町を見回してそう言った。

「ホントホント！　お店がいっぱいだわ！　どんなお店があるのかしら？」

その隣で同じように町を眺めながら麗が言った。
数え切れないほどの様々な店が立ち並ぶ、そんな賑やかで華やかなこの町の名前は“てんぷらの町”。

「あれ全部がてんぷら屋ではないことは確か、です」

「……住人も普通に人間だったな」

「まだそんなこと言ってたの?!」

この町の様子を見ても表情が変わらない鈴と悠に突っ込みを入れる麗。

「では、この町でのお小遣いを渡します、です」

鈴はそう言って麗の突っ込みをさらりと流し、三人に同じ金額が入った小さな布袋を手渡した。

「じゃあ、ここから各自、自由行動ね！」

袋を受け取ると、麗が目を輝かせながら言った。

「うん。用事が済んだら此处に戻って来ればいいんだよね？」

「はい、です」

葵の確認に鈴が頷いたのを見た後、

「それじゃ、解さーん！」

麗の元気いっぱいな声と共に、四人はそれぞれ別の方向に向かって歩き出した。

「わあっ、可愛い」

町の中心部に着くと、麗は早速目に入った洋服の店の前で立ち止まった。

「うーん、こんな素敵な町なのに、どうして“てんぷらの町”なんて変な名前なのかしら？」

そうして品物を見ながら麗が疑問を浮かべていると、

「てんぷら、何かお探しですか？」

店員の一人が爽やかに微笑みながらこちらにやって来た。
ちなみに、てんぷら〓この世界のお店での挨拶。

「あ、いや、可愛いなあと思って」

先程の答えが見付かったことに気付いていない麗。

「ありがとうございます。そうですね……あなたは可愛いから、
こんなお洋服はいかがでしょう？」

にこやかに笑いながらお高そうな洋服を勧める店員。

「か、可愛い？」

常套手段に乗せられてしまう麗。

「はい、とっても。ああ、これなんかもどうでしょう？」

盗賊風味な小娘が店に来たから警戒の為に近付いたのだが、いい鴨
を見つけた、と店員は心の中で腹黒い笑みを浮かべ、可愛いと言わ
れて照れている麗に次々と商品を紹介した。

「わあ、それも可愛い！」

「……」

まんまと店員に乘せられている麗を見掛けた悠は、

「ぶ。ダツサ」

彼女を助けずにその店を素通りして隣の店に立ち寄った。

「あ、てんぷーらー……」

客が入ってきたので顔を上げたその店の娘は、客を見た途端に硬直した。

（かつ、かか、かつこいい……！！）

それは、自分の店にとんでもない美形さんがやって来たから。

「きゅうりはあるか？」

とんでもない美形さん、悠は、石化した店員に簡潔な質問をした。

「ひゃ！？ あ、はい！ ええと、パパー！」

そんな彼に話し掛けられ、店員は嬉しそうに顔を赤らめて素早く父親を呼んだ。

「おう。なんだ？」

すると、眉間に皺を寄せたいかにも頑固そうな父親がやって来た。

「お客様よ。きゅうりは何処にあるの？」

「あ？」

顔を赤く染めている娘を見て、父親は客である悠に訝し気な視線を向けた。

「……」

明らかに敵意がある父親の鋭い視線を、表情をまったく変えずに受け止める悠。

「けっ……ほらよ。きゅうりは此处だ」

そんな態度が気に食わなかったのか、父親はきゅうりがいっぱいに入った籠を乱暴に持ち出した。

「いくらだ？」

真っ黒なロングコートのポケットに手をつ込んだまま尊大に値段を尋ねる悠。

「一本100Nだ」

吐き捨てるように値段を教える父親。

「いくらだ？」

すると、悠が再び値段を聞いた。

「ああ？ だから100Nだって……」

答えている途中、言葉では言い表せないほど恐ろしい悠のプレッシャーに当てられる父親。

「う、50によ……」

「いくらだ？」

「タダでございます」

プレッシャーに耐え切れなくなった父親は、頭を直角に下げてそう言った。

「そうか。では、この店に置いてある分全部頂こう」

深々と下がった頭を見て、悠は腹黒い笑みを顔全体に浮かべながらそう言った。

「「て、てんぷら……」」

毎度あり、と目の端に涙をうつすら光らせる父親と、まだうつとりと悠を眺める娘。

こうして、悠はきゅうりの代金を踏み倒して八百屋から出ていった。

「……？」

巨大な袋を担いで足早に町の中心部から離れていく悠を見掛け、鈴は小首を傾げた。

「もう、用事が済んだ、でしょうか？」

と言いながらも、どうしてもよさそうにパンダとクマのぬいぐるみに目を戻す鈴。

「……どちらがよい、でしょうか？」

鈴は、それらのどちらを買おうか悩んでいた。

旅する身である彼女が、等身大のパンダ、またはクマのぬいぐるみを買ってどうするつもりなのか、それは彼女しか知り得ないミステリーなのであった。

麗が店員に乘せられて、店員が悠に乘せられて、鈴がパンダとクマで迷っている頃、

「はあっ、はあっ……」

葵は1000N札を数枚握り締め、息を切らして走っていた。

「ヒヤハハ！ 待ってよ、葵ちゃん」

しかも、危ない感じの三人のお兄さんに追い掛けられていた。

「な、なんでこんなことになったんだろっ？」

必死に走りながら、葵は今ここに到るまでの経緯を思い返した。

（ええと、町を歩いてて、まず、木に風船が引っ掛かって困ってた男の子の風船を取ってあげて、次に荷物が重くて困ってたおばあさんの荷物を持ってあげて、最後に道で倒れていた妊婦さんを病院まで運んだらこのお金を無理矢理渡されて……）

慈善活動しまくりな葵。

（それでこのお金をどうしようか考えてたらあの人たちが来て……）

「名前何て言うの？」

「え？ ええと、葵です」

「可愛い名前だね。葵ちゃん、俺らと遊ばない？」

そう言われた。

そして、服を掴まれた。

で、逃げた。

「て、僕は男だよお！？」

目の前の現実には、珍しく激しく突っ込みを入れる葵。

だが、突っ込みも虚しく、危ない感じの三人はニヤニヤといやらしく笑いながら追い掛けてくる。

彼らにとって、恐怖に怯えて逃げ惑う中性的な可愛らしい顔をした葵は魅力的なようで。

「怖がらなくても大丈夫だよ、葵ちゃん」

「だから僕は男……うわあ!？」

大きな曲がり角に差し掛かった時、彼らに突っ込みを入れている途中で、葵に不幸が訪れた。

普段からよく転ぶ彼は、こんな非常時にも何かにけつまずいてしまった。

全速力で走っていた為か、葵は大きく前方に飛んだ。

「!」

願ってもない幸運なハプニングに目を輝かせる三人。

——しかし、

「わ?!」

「! 葵!？」

前方に飛んだ葵は、真っ黒な人物の胸に飛込む形になって転ばずに済んだ。

そして、その真っ黒な人物は、

「! 悠!」

きゆうりが大量に入っている袋を担いだ悠だった。

「ど、どうしたんだ？」

突然横から自分の胸に飛込んできた葵に目を白黒させる悠。

「っ！！ ゆゝ！！」

禍が福に転じた安心感からか、彼の胸の中で泣き出してしまふ葵。

「！？ あ、あおっ？！ なっ、泣いてる！？ ど、どうしたんだ、葵？！」

そんな葵に、珍しく慌てふためく悠。

「……彼氏イケメン……」

突然現れた悠を葵の彼氏だと勘違いし、まったく勝ち目がないと思った三人は、町の中に消えていった。

この判断は、最善だった。

第38話 質疑応答

「あ、葵……」

気持ちが落ち着くのに時間がかかるのか、なかなか自分から離れない葵。

そんな彼の行為は、悠の落ち着きを失わせた。

「……」

ざわつく体。

高鳴る鼓動。

無意識に何かを求めて下に向かう左手。

「っ!」

自分が冷静さを失っていることに気が付いた悠は、

「い、一体どうしたんだ、葵?」

担いでいたきゅうりの袋を降ろして、両手で葵の両肩を掴み、不本意ではあるが彼を自分から遠ざけた。

「……へ……変な三人組の男の人たちに追い掛けられて……」

大分気持ちが落ち着いてきた葵は、ゆっくりと彼の問いに答えた。

「!?!? 変な三人組の男に襲われただど?!」

若干聞き間違える悠。

「どんな奴らだ？」

そして、さりげなく探りを入れる、漆黒の瞳に怒りを宿した悠。

「ええ……と、顔はよく覚えてないけど、髪型はリーゼントとアフ口とモヒカンだったよ」

本当に変な三人組の男の人たちに追われていた葵。
予想だになかった個性豊かな髪型を聞かされて、憤っていた悠も、
思わず言葉を失ってしまった。

「……そうか。それは怖かったな？」

が、すぐに我に返ることが出来た悠は、ロングコートの袖で葵の瞳に残る涙を拭いながら、女性が聞いたならそれだけでくらくらしてしまいそうな、限りなく優しい声でそう言った。

「うん。ありがとう、悠」

すると葵は、思わず抱き締めなくなるような笑顔で、自分を助けてくれた悠にお礼を言った。

『きゅんきゅん』

キュンキュンした死神は、素直にそれを実行した。

「天空を巡る無形の刃」

突然現れて葵を抱き締めた死神は、悠の魔法によって吹っ飛ばされた。

「見て見てこの服超可愛くない?!」

すっかり暗くなって、宿屋の部屋に戻った麗は、目を輝かせながら鈴に今日買ってきた服を見せた。

「……麗、またそんなに買った、ですか?」

すると、溜め息まじりに無表情な彼女がそう返した。

「だ、だって可愛かったんだもん……エヘッ」

可愛らしく笑って誤魔化そうとした麗に、

「また荷物が重くなる、ですよ?」

鈴はズバツとそう言った。

「そ、そう言う鈴だつて、そのやたらでかいクマさんは何よ?」

そんな彼女にズバツと言り返す麗。

「チエルシー、です」

しかし、鈴はなんの臆面もなく巨大なクマのぬいぐるみの名前を答えた。

「ち、ちえる……って言うか、そっちの方が荷物になるんじゃない?」

若干呆れながらそう聞き返す麗。

「大丈夫、です」

すると、鈴はポケットの中から白いポケットを持ち出した。

「あの幻のポケットを見付けた、です」

そのポケットは、あの有名な、某猫型ロボットが愛用している、物理的な法則を完全に無視してなんでも収納することが出来るポケットだった。

「!?!? も、もしかそれはあの超有名な四次元……」

麗が危つくそのポケットの名称を言いそうになったところ、

「「?」「」」

隣の部屋から、ドアが閉まり、その後鍵を閉めた音が聞こえてきた。

「……………？ あの二人、もう寝たのかしら？」

それを聞いて、小首を傾げながら呟く麗。

「七時就寝、です」

「ご老体！？」

ふかふかのベッドに入って早くも眠りに落ちた葵を部屋に残し、ひとり屋上に向かう悠。

勿論、昼間の危ない輩がまた現れて、葵の寝込みを襲う、なんてことがないように、ばっちり部屋には鍵をかけた。

「……………此処か」

そう呟いた後、悠が扉を押し開けると、

『エビフライ！！』

屋上の真ん中で、死神が海老のように体を反らしていた。

「……」

悠は静かにドアを閉めた。

『見いたあなあ?』

「!?!」

そして回れ右をすると、目の前に死神がいたので驚く悠。

『フッフッフ。ばれちゃあ仕様がな』

そんな悠に、死神はそう言っ大鎌、鎌子を担ぎ、

『オレ様は死神だ!』

「知っている」

と、迫力満点に自己紹介したのだが、悠にあっさりと流されてしまった。

『……しょつきんぐびんく……』

ショックを受けた死神は、意味不明なことを呟きながら、

『ふらふら、ごっつん』

と、壁に右肩と頭を預け、アンニュイオーラを発生させた。

「……」

何故死神はわざわざ自分で効果音を言うのか、と疑問を浮かべる悠が、そんなことを知ったところでなんの役にも立たないだろうと思つた悠は、敢えてそこには触れないことにした。

『……の字、の字、の字、の字、の字、』

「……死神、」

『の字、の字、……む？　なんだ？』

悠が静かに話しかけると、右手の人指し指で壁に連続して“の”の字を書いていた死神はその指を止め、悠の方に顔を向けた。

「貴様に殺人欲求はないのか？」

そんな彼に、直球な質問をする悠。

『あるぞ』

「……ならば、何故貴様は葵にずっと抱きついていても平気なんだ？」

即答した死神に次の質問をする悠。

「……俺はあの時……葵を殺そうとしてしまったのに……」

今日の昼間、葵に抱きつかれた彼は、全身がざわついた。心地好いどころか、不気味なほど脈が速くなった。

ロングコートのポケットに入っている、鋭く尖った釵を求めて、無意識に左手が動いた。

この行動を彼にさせたものは、葵に対する友情でも愛情でもない、殺意。

——そのことを思い出しながら、悠は辛そうな顔で、小さくそう付け足した。

『愛の力だ』

死神は真剣な顔でそう言った後、

『……ぽ』

恥ずかしそうに両手で顔を隠した。

「……」

そんな死神を見て、悠は無言で部屋に戻り始めた。

『河童少年』

「……」

死神が悠をそう呼び止めると、彼は振り向かずには足を止めた。

『ストレスは、溜め込むから爆発しそうになるんだ』

死神は、悠が振り向かないことを少しも気にしていない様子でそう続けた。

『だったら、溜めなければいい』

「……どうやって？」

それが簡単なことのように言う死神に、悠が後ろを向いたまま尋ねた。

『簡単なことだ』

すると、死神はさも当然のように、

『ストレスは、欲求を満たすことで解消される』

と言った。

「っ？！ ま、まさか貴様――」

それを聞いて、目を見開いた悠がバツと振り向くと、

『ちやお』

死神は口元に不敵な笑みを浮かべて姿をくらました。

第39話 濃霧

「……？ 霧、です」

次の日の朝、四人が町の中を歩いていると、突然霧が発生した。

「わあ、本当だ」

どんどん白く濃くなっていく霧を見て、葵が言った。

「ええ？！ なんで霧が出てきたくらいでお店が閉まっちゃうの？」

すると、すべての店が慌ただしくシャッターを下ろし始めたので驚く麗。

「お前みたいな盗賊がいるからだろ」

そんな彼女に、きゅうりをくわえた悠がさりりと言った。

「な、なんですって？！」

「火事場泥棒？」

「ぶっ飛ばーすー！」

そんな二人はほっというて、

「……だんだん人もいなくなってきた、です」

「うん。みんな、一体どうしたんだろう?」

辺りを見回しながら鈴と葵がそう言った。

「って言うか、この霧、私たちがこの町に来る前に出たヤツと似てるわね」

「……魔物か?」

二人に続いて麗と悠がそう言うと、

「ん。この辺りは龍太の住みかだからな」

と、いつの間にか葵の隣に現れた死神が言った。

「龍太?」

「あいつワガママだから、オレ様嫌い」

「それは貴様が言えたことではないだろ?」

小首を傾げて聞き返した葵に、頷いてそう応えた死神に対してさりと突っ込みを入れる悠。

「って言うか、何ナチュラルに話に加わってんの……むぐ」

「しー。龍太に見付かっちゃうぞ?」

やっと死神が突然現れたことに対して突っ込みを入れてくれた麗は、

突っ込み途中でその口を死神の両手によって塞がれてしまった。

「む……ぐ……」

言動は意味不明だけど、綺麗に整った顔の死神に後ろから口を塞がれ、若干顔を赤くする麗。

「……龍太とはそんなに危険な魔物、なのですか？」

『違う。オレ様が会いたくないだけ』

鈴が首を傾げて尋ねると、死神は麗の口を押さえたままそう言った。

『ああ、ちなみに、オレ様よりは弱いぞ』

『どあーれがお前より弱いって？』

死神がその言葉を付け足すと、背後から少年の声が聞こえてきた。

「「！」「」

『あ。見付かつちゃった』

それを聞いて、驚いて声が聞こえた方に振り向く四人と、露骨に嫌そうな顔をする死神。

『あー、クソ。汚れちゃったじゃねえか』

その先には、赤い染みがついた白い服を着た、緑色の髪の少年が立っていた。

『人間臭えし、最悪だな。……お？』

服についた赤い染み、返り血を見てそう言った後、少年は死神に目を向けた。

『おお！　そうやって殺せば汚れねえのか！　お前、頭いいな！　オレほどじゃねえけど！』

『む？』

少年が目を輝かせたので小首を傾げる死神。

「んー！！　んー！！」

『あ。忘れてた』

その時、顔を真つ赤にしてバンバン自分の手を叩いている麗に気が付き、死神は彼女の口を塞いでいる手を退けた。

「っはー……っはー……」

麗は地面にへたり込み、思い切り体に酸素を取り込んだ。

「……チッ」

「……なんの舌打ちよ、それは？　言わなくていいけど」

小さく舌打ちした悠に弱々しく突っ込みを入れる麗。

『！！ おつ、お前らは、人間のくせに第4ステージのボスと、河童のくせに第7ステージのボスじゃねえか！！』

すると、麗と悠を指さして少年が叫んだ。

「え？」

それを聞いて固まる麗。

「う、麗……やっぱり」

「えええ！？ 私、本当にボスだったの？！」

口に手を当てて言う鈴に続き、頭を抱えながら驚いたように麗が言った。

「……？ 第4？」

巨大ゾンビを倒してすぐ姿を現した麗が第4ステージのボスと聞いて、小首を傾げる葵。

『ん。第1ステージのボスが吸血鬼“リリーナ”で、第2ステージのボスが雪女の“クラリーネ”。第3ステージのボスが巨大ゾンビ“イルメラン”で、第4ステージのボスがこの盗賊少女“ウララ”だ』

そんな彼に、死神がさらりと説明した。

「へえ、じゃあ、僕たちはいきなり第3ステージのボスと戦ったんだ？」

「……成程、道理で攻撃がまったく効かなかった、ですね」

それを聞いて、成程、と頷きながら納得する葵と鈴。

『あ。ちなみに、奴は第6ステージのボス、龍太こと“セネリオ”で、お前が第7ステージのボス“ユウ”だ』

「じゃあ、第5ステージのボスは誰なのよ？　って言うか、この世界のボスは随分バラバラな順番で登場するのね？　あと、どうでもいいけど“龍太”って名前じゃないのかよ」

説明を付け足した死神に、麗がやる気のない突っ込みを入れた。

『第5ステージのボスは病……』

「何故各ステージのボスの名前まで知っている？」

麗の問いに答えようとして発した死神の言葉を、悠は静かに遮って、

「……貴様がラスボスなのか？」

と、尋ねた。

「……」

それを聞いて驚いた葵と鈴と麗は、バツと悠と死神に顔を向けた。

『む？　何を言っているんだ？　ラスボスは……』

悠の問いに、死神がそう答えかけると、

『気に食わねえ』

少年、龍太ことセネリオが不機嫌そうな声を出した。

「「？」」

会話を中止してセネリオに顔を向ける四人と死神。

『死神も、お前も、魔物のくせに人間なんかと一緒にいやがって…』

セネリオはわなわなと震えながら、鋭い眼光を死神と悠に向けた。

『特にお前だ、河童野郎っ！！ 後から出て来たくせに、』

そして、セネリオは悠を指さし、

『お前のせいでオレの順位が下がっちゃったじゃねえかああ！！』

そう怒鳴りながら、ドロンと小爆発を起こして灰色の煙に包まれた。

第40話 セネリオ

「俺のせいで貴様の順位が下がった？ 最高だな」

「どんだけSなのよ、あんたは?!」

セネリオが小爆発を起こす直前に放った言葉を聞いて、愉快げに笑みを浮かべた悠に、麗は素早く突っ込みを入れた。

「……？ えす？」

その隣で、メロンキャンディをくわえた死神が、麗の突っ込みの際に用いた言葉に小首を傾げた。

「……怪我をした人や、困っている人を見て、面白そうに笑うような奴のこと、です」

そんな死神にさらりと簡単に説明する鈴。

「何を言ってる？ 困ってる奴がいたら相談に乗ってやるに決まってるだろ？」

すると、心外そうに悠が口を挟んだ。

「いや、何今更良いヤツぶってんのよ!？」

白々しすぎる彼に透かさず突っ込みを入れる麗。

「で、相手を信用させた上で突き落とす」

「と、思いきや、まったく良いヤツじゃねえ?! まあ、知ってたけどね!!」

「ちなみに、怪我は無料でより深くしてやるぞ」

「いろんな意味で出血大サービス!? 有り難迷惑極まりないわよ?!」

などと、悠と麗が漫才を繰り広げている時、

「……」

葵は、セネリオが小爆発を起こした所をじっと見つめていた。そこには、灰色の煙がセネリオを包むようにもくもくと発生している。

その煙を見ていた葵は、真剣な表情でこう言った。

「……自爆?」

と。

「んなわけあるかあ!!」

「いたっ!?!」

直後、葵は麗にスパアンと突っ込みを入れられた。

「いたた……でも、龍太くん爆発したよ?」

「……本来の姿にでも戻ったんだろ」

葵が麗に言っていると、悠は麗に叩かれてしまった彼の頭を優しく撫でながらそう言った。

「本来の、姿？」

『ん。龍太に戻るぞ』

悠の言葉に鈴が小首を傾げると、死神は飴をくわえたままこくりと頷いた。

「！？ ま、まさか、あいつの正体は、龍なの？！」

ピンと閃いた麗が死神にそう言っていると、

『いや、竜の落とし子だ』

死神はさらりとそれを否定して、セネリオの正体をさらりと言った。

「タツノオトシゴ？！」

その答えに驚いて、バツと煙の向こう側に目を向ける麗と、彼女に続く三人。

すると、そのタイミングに合わせたかのように、灰色の煙が晴れ、そこから本来の姿に戻ったセネリオが姿を現した。

「ぷっ」

そして、悠が嘔き出した。

『デメエエ！！　今、オレ見て嘖き出しやがったなあ！？』

そんな彼に、当然のごとく腹を立てるセネリオ。

彼は頭から蒸気を発し、くるくると巻かれた尾を延び縮みさせ、長い管状の口からくぐもった怒鳴り声を出した。

「……可愛い、です」

どうやら鈴の無表情な栗色の瞳には、少年の時と同じ大きさで、宙に浮くために短いヒレを懸命にパタパタと動かしている、全身緑色の巨大タツノオトシゴは、とても可愛らしく映ったようだ。

『そつ、そんなこと言われたつて、全然嬉しくないんだからな！！』

そう言いながらも、若干嬉しそうな声と顔になるセネリオ。

「……なんかアイツ、悪いヤツじゃないっぽい？」

そんなセネリオを見て、麗は顎に人指し指を当て、小首を傾げながら呟いた。

『オレ様はあんまり好きじゃないぞ』

すると、飴をくわえながら大鎌を担いでいる死神がさざりと言った。

「どうして、ですか？」

彼の言葉を聞いて、小首を傾げて質問をする鈴。

『龍太は自分が気に入らない奴なら、人間は勿論、魔物だつてすぐ殺すからな』

彼女の質問に、死神はそう答えた。

「え？」

「人間は……勿論？」

その答えを聞き、驚いて固まる麗と、彼の言葉をゆっくりと聞き返す鈴。

『……魔物が人間を殺すことは、当たり前のことだ』

すると死神は、彼の蒼白い肌の色のような冷たい声でそう言った。

「そんな……」

『デメエエ！！ またオレのこと“龍太”って呼びやがったなアア！？』

「『！』」

そんな死神に、信じられないと言うような顔で麗が何か言おうとしたところ、セネリオの口から発射された勢いのいい無数の泡がこちらに飛んで来た為、その言葉は遮られた。

「『……？』」

いつまで経っても痛みが襲って来ないので、鈴と麗が反射的に固

く瞑った瞳を開くと、

「……ふう、よそ見してちゃ駄目だよ？」

安堵の溜め息をつく葵が、いつの間にか彼女たちの前に立っていた。どうやら先程の泡は、剣を盾にして防いだようだ。

「あ、葵……！　ゴメン、ありがとっ！！」

「っです」

自分たちを守ってくれた葵にお礼を言った後、麗と鈴は、ボスキャラが目の前にいることを今思い出したように、慌ててそれぞれ武器を構えた。

「どういたしまして」

そんな二人に、いつものようにくすりと笑って応える葵。

『お、オレの攻撃を防いだと……！？』

自分の攻撃を剣一本で全て防がれたことに衝撃を受けるセネリオ。

『流石葵。オレ様惚れ直しちゃったぞ。ふわふわ』

すると、上から死神の抑揚のない声が聞こえてきた。

（（――！　薄情者っ――！））

先程の攻撃の時に、死神が一人だけ鎌に乗って空に逃げたことが分

かった鈴と麗は、心の中でそう叫んだ。

『何！？ アイツ女だったのか?!』

死神の言葉を聞き、葵が女の子だと勘違いするセネリオ。

「否定はしない」

きゆうりをかじりながら葵の隣に歩み出た悠は、彼の言葉に賛同した。

「ええ?! 否定してよ、悠!？」

それに驚いて悠に突っ込みを入れる葵。

「僕は男だよ？」

そして葵は、ぷうつと頬を膨らませて悠に向かってそう言った。

「!」

そんな可愛らしい葵を間近で見た悠は、

「……悪い」

ふつと微笑み、謝りながら葵の膨れた両頬を右手で挟んでみた。すると、ぷすつと空気が抜ける音がした。

「も、もう、悠! 本気で謝ってるの!？」

そうしてポカポカと悠を叩き始める葵。

「や、やめろ、葵」

彼の弱い攻撃を釵を持った左手と腕で防ぐ悠。

一見微笑ましい光景だが、葵は右手に剣を持ったまま叩いてくるので、悠は結構本気で先程の台詞を言っていた。

『戦闘中にいちやついてんじゃねえぞ、テメエらアア!!』

セネリオはご尤もな怒鳴り声をあげた。

「……はっ！ いけない、いけないっ！ 鈴！」

葵と悠のせいで削がれた戦意があまりに大きかった為に、蝶々を追い掛けていた麗は、セネリオの怒鳴り声で我に返り、慌てて鈴に声をかけた。

「！ は、はい、です！ 束縛の鎖！」

例のポケットからぬいぐるみのチエルシーを出そうとしていた鈴は、彼女の呼び声を聞いて慌ててそれをしまい、呪文を唱えながら杖を地面に突き立てた。

直後、彼の足元から飛び出した白い光で出来た鎖に、彼の胴体が束縛された。

『な——』

「大雨洪水注意報っ！」

セネリオが驚く暇もなく、謎の技名を言いながら、麗が彼に向かって十本のナイフを同時に投げつけた。

鈴の魔法で身動きが取れない上に腕がないセネリオは、その十本のナイフを全て自らの体で受けることになった。

『っ！！』

鋭いナイフが体に突き刺さると同時に光の鎖が消え、セネリオは仰向けに倒れ込んだ。

そして、セネリオの周りの地面が彼の青い血で染められていく。

「……」

「や、やったの……？」

「……みたい、ですね」

その様子を見て、そろそろと麗が口を開くと、鈴がぎこちなく頷いた。

『おー』

彼女たちに向けて、ぱちぱちと拍手をする死神。

「わあ、凄——」

そう言って、葵が剣をしまおうとした瞬間、

「うわあ?!」

いつの間に伸ばしたのか、葵の足にセネリオの尾が巻き付き、葵は彼の元に引き寄せられた。

「「！ 葵――」」

『動くな――！』

すぐに彼を助けようとした三人は、セネリオの一言によってその動きを止められた。

『……動いたら、こいつを絞め殺す』

「「――」」

ヒレを動かして上体を起こしたセネリオは、自分の尾を葵の胴まで巻き付けながら三人にそう言った。

『ふ……フハハ！ これでデメエら……オレに攻撃出来ねえだろ……！――！』

固まった三人を見て、息を切らせながらも得意気に笑うセネリオ。

「……いいなあ」

「って、今それどころじゃないでしょう？！」

『いや、動くなよ！？』

ぼそつと悠が言った言葉に思わず突っ込みを入れてしまった麗。そんな彼女の突っ込みに、セネリオは突っ込みで返した。

『「……こいつがどうなってもいいのか……？」』

そう言つて、セネリオは今度こそ三人の動きを止めることに成功した。

「あれ？ でも、僕は攻撃出来るよ？」

『え』

三人の動きは。

「えいつ」

『嘘お?!』

葵の腕まで縛り付けていなかったセネリオは、彼の剣に貫かれてしまったとき。

第41話 剣士

葵の剣に貫かれ、セネリオは無数の光の粒となって天に昇っていった。

「第6ステージ、クリア、ですね」

その光を見送りながら、鈴が静かにそう言った。

「ええ。それに、私と悠も合わせたら、これで6ステージ終わったことになるわね」

彼女の隣で、右手で眩しい太陽の光から目を庇いながら、同じように空を見ていた麗が言った。

「……ラスボスまで、あとどれくらいなんだ？」

すると、悠が死神に向けてそう尋ねた。

『4いるぞ』

彼の問いに、さらりと素直に答える死神。

「4！？　じゃあ、私たちもう半分を超えたってわけね！」

「ラスボスまであと少し、ですね」

それを聞いて喜ぶ麗と鈴。

「ねえ恒、残りのボスはどんなヤツなの？」

そして麗は、残りのボスについての質問を死神にしてみた。

『残りのボスは、病弱娘とメルヘン男と超イケメンとラスボスだ』

再びさらりと答える死神。

「……病弱娘？」

「……メルヘン……男？」

麗と鈴は、ボスに似つかわしくない言葉を思わず聞き返した。

「……ここからだ、第5ステージと第8ステージはどっちの方が近いんだ？」

そんな二人を無視し、悠は死神に更なる質問をした。

『8のが近いぞ』

「そうか。なら次は第8ステージだな」

答えを聞いて、悠は次の行き先を決定した。

「そう、ですね。恒、第8ステージに向かうには、ここからどちらに向かえばいい、ですか？」

『んーと、あっち』

鈴の問いに、死神は少し考えた後、南の方角を指さした。

「あっちね。……って、わあ！ 海が見えるわ！」

南に目を向けた麗は、その目を輝かせながら言った。

「では、次は海に向かう、ですね」

「そのようだな。葵」

彼女に続いて南に顔を向けた鈴がそう言った後、悠はまだこちらに戻って来ていない葵を呼んだ。

「……」

しかし、葵からの返事が返って来ない。

「……？ 葵？」

不思議に思った悠は、地面に座ったままの彼の名前を再び呼んでいた。

「……ど、どうしよう、悠？」

すると、葵がゆっくりとこちらに顔を向け、

「……折れちゃった……」

そう言っ、右手に持った剣を悠に見せた。
彼がこれまで愛用していた鋼の光沢を持った諸刃の剣は、彼の言う

通り、刀身の真ん中からぱっくりと折れていた。

「「!？」」

葵の言葉を聞いて、折れた剣を見せられ、悠と鈴と麗は驚いて目を見開いた。

『おお。めでたいな。ぱちぱち』

そんな三人の隣で、死神がぱちぱちと手を叩いた。

「いや、全然めでたくないわよ?!」

『? 何故だ? “見習いの剣”が折れたんだぞ?』

麗が死神に突っ込みを入れると、彼は小首を傾げながらそう言った。

「……見習いの、剣?」

死神の言葉を聞き返す鈴。

『詰まり、葵は立派な剣士になったということだ』

すると、死神は彼女に頷いてみせた後に、葵に向けてそう言った。

「……へ?」

思わず間抜けな声を出してしまった麗。

「わあ、本当ですか!?!」

『ん』

驚いたような葵の声にこくりと頷く死神。

「流石葵だな」

「おめでとうございます、です」

見習い剣士から剣士に昇格した葵に祝福の言葉を送る悠と鈴。

「うん。ありがとう、みんな！」

微笑みながら彼らにお礼を言う葵。

(……遅くない？ とか、絶対言っちゃいけないわよね……)

嬉しそうな彼らの隣でそんなことを思う麗。

「じゃあ、早速新しい剣を買いに行かなくちゃね」

「そう、ですね」

「これだけの町なら、武器屋くらいいくらでもありそうだしな」

「……そうね。じゃあ、私も新しい武器でも探してみようかしら？」

そんな流れで、セネリオがいなくなったおかげで霧が晴れ、再び賑わい出した町に四人が歩き出そうとしたところ、

『……では、オレ様はこの辺で失礼するぞ』

と、死神が言った。

「え？ もう行っちゃうんですか？」

それを聞いて、残念そうに葵がそう言うのと、

『な、何！？ 朝までオレ様と一緒にいたい？！』

「失せろ」

目を見開いてそう言った後に、きゃっ、葵、大胆！ と恥ずかしそうに顔を両手で隠した死神に、悠はさらりとそう言った。

「うーん……剣って結構高いんだね」

新しい剣を背負っててんぷらの町を出た葵は、

「あんなに沢山使っちゃってごめんね、みんな？」

申し訳なさそうに三人の友人に謝った。

「大丈夫、です。その剣、鈴が買ったチエルシーより全然安……こほん、です」

「そうよ。私が買った服の合計なんか、その剣よりもっと高……こほんこほん」

何かまずいことを言いかけてしまったので、咳払いをして誤魔化す鈴と麗。

「？ 二人とも、風邪引いたの？ 大丈夫？」

すると、葵が心配そうに尋ねてきたので、鈴と麗は胸が痛くなった。

「大丈夫だ、葵。風邪じゃない。こいつらは自分の無駄使いを隠してるだけだ」

二人を心配している葵に、きゅうりをかじりながら悠が言った。

「え？」

「な、何言ってるのよ、悠！？」

「と言うか、あなたも無駄使いしている、です」

小首を傾げた葵にこれ以上詮索される前に、麗と鈴は慌てて悠にそう言った。

「は？ 何のことだ？」

そんな二人の言葉を尋ね返す悠。

「その袋のこと、です」

「そうよ！ その中に入ってるきゅうりだつて、合計すれば葵が買った剣より高かったんでしょ！？ あの町、何気に物価高かったし！！」

白々しい態度を取る悠に、鈴と麗は彼が担いでいる大きな袋をズビシッと指さしてそう言った。

「……馬鹿か、お前らは？ これは善良なる八百屋の店員Aから全部タダで頂いたものだ」

すると、二人を馬鹿を見るような目で見て、鼻で笑った後、悠はいつもの調子でそう答えた。

「わあ、親切な人だね。よかったね、悠」

それを聞いて、くすりと笑って言う葵。

「踏み倒したわね」

「踏み倒した、です」

ヒトを疑うことを知らないような葵の隣で的確なことを言い当てる麗と鈴。

「何か言ったか？」

「別に何も言っていない、です」

「そうよ。 自意識過剰なんじゃないの、ザビエルハゲ？」

「宣教師カット、です」

「暗雲の閃光は破滅をもたらす」

こうして、二人は海に向かって歩いて行き、二人は海に向かって吹っ飛んで行くのであった。

「わあ、そんなに海が楽しみなんだね」

「そのようだな」

第42話 青と白と黒

「うわぁ、綺麗〜！」

「です」

焼けつくような太陽、雲ひとつない青空、見渡す限りの広大な海、白波が打ち寄せる白い砂浜。
そんな夏真っ盛りの風景に目を輝かせる少女二人の隣には、頭から爪先まで真っ黒な人物が。

「……」

「……」

「……なんだ？」

鈴と麗の視線に気付き、悠はきゅうりを口から離して二人に何の用件でこちらを向いたのかを尋ねた。

「……似つかわしくない、です」

「ええ。似つかわしくないわね」

「は？」

鈴と麗がぼそぼそと言ったことを聞き返す悠。

「「脱げ」」

「……変態か、お前ら？」

服を脱げと言ってきた鈴と麗に、悠は呆れたようにそう言った後、再びきゅうりを食べ始めた。

「いや、あんたにそんなこと言われたくないわよ?! って言うか、視界に入るだけでも暑苦しいから、そのロングコートを脱げって言ってるの!!」

「断る」

麗の必死の長い突っ込みを一言で片付ける悠。

「暑くない、ですか？」

そんな彼に、鈴が不思議そうに質問してみた。

「暑いに決まっているだろう」

「いや、だから脱げって言ってるんですけど!？」

「断る」

「暑くない、ですか？」

「わあ! ねえ、みんな、見て!」

鈴と悠と麗による終わりそうもない言い争いは、葵によって止められた。

「「？」」

「ほら、あそこ！ “竜宮城” って書いてあるよ！」

疑問符を出しながらこちらを向いた三人に、葵は前方を指さしてそう言った。

「…… “竜宮城” って書いてあるわね」

「 “竜宮城” って書いてあるな」

「 “竜宮城” って書いてある、です」

葵が指さした先に目を向けた三人は、白い貝殻で創られているような巨大な城の入り口にある門にデカデカと書かれた文字を、胡散臭そうに音読した。

「わあ、竜宮城って、本当にあっただね！」

そんな三人の隣で、ひとり目を輝かせている彼は、日向 葵、15歳。

「行ってみたいなあ……」

行きたいのなら勝手に行けば良いのだけれど、彼には自力で竜宮城に行けない理由があった。

「でも、葵泳げないでしょう？」

「……うん」

それは、その竜宮城が離れ小島にあるから。

麗の的確な突っ込みに、こっくりと頷く葵。

しょんぼりと下を向く葵。うるうると瞳を揺らす葵。

叱られて反省している子犬のような葵。

無性に抱き締めたくなるような顔をする葵。

「ゴメン！！ 私が悪かった！！」

「あ、安心しろ、葵！！ 俺が竜宮城に連れて行ってやるから！！」

「鈴、ボート借りてくる、です！！」

そんな葵を見て、三人はわたたと葵を竜宮城へ連れて行く為の行動を開始するのであった。

鈴が借りてきたゴムボートを麗が膨らませ、そこに乗り込んだ後、悠が風魔法を使ったおかげで、一行は飛ぶような速さで竜宮城が建

っている島に辿り着くことが出来た。

「ほ、ほら！ 竜宮城に着いたわよ、葵！」

「……わあ……！」

陸地に足をつけ、麗の声を聞いてゆっくりと顔を上げた葵は、目の前にある巨大な竜宮城を見て活力を取り戻し、

「ありがとう、みんな！」

本当に嬉しそうな笑顔でそう言った。

「はいはい。よかったわね」

「……どういたしまして、です」

ひらひらと手を振ってそれに応える麗と、疲れたように胸を撫で下ろす鈴。

「——！？」

その時、何かを感じ取った悠は、バツと後ろを振り向いた。

「？ どうしたの、悠？」

そんな悠の行動に小首を傾げる麗。
彼が振り向いた先には、先程自分達が渡った静かな海が広がっている。

「……………」

悠は麗を無視し、今度は辺りを見回し始めた。

「……………」 悠？

葵が不思議そうに彼の名前を呼ぶと同時に、

「……………」

空を見上げた悠は、驚いて目を見開いた。

彼に少し遅れながらも、彼と同じようにその気配を感じ取った麗もまた、空を仰いで固まった。

「？ 麗までどうした、です……………」

鈴の質問の途中で、

「……………」 下がれ……………」

「……………」 え……………」

悠と麗が同時に叫び、悠は葵を、麗は鈴を抱えて出来る限り後ろに跳んだ。

直後、轟音が響き渡った。

「……………」 ？……………」

自分達が先程まで立っていた場所で凄まじい爆発が起こったのを見て、葵と鈴は目を見開いた。

一体何が、と二人が疑問を口にする前に、それは自ら姿を現した。

「――！！」

バサリ、という羽音と共に突風を産み出し、辺りの粉塵を一瞬にして晴らしたそれは、大地を揺るがして盛大に吠えた。

『グオオオオオオオ！！』

――四人の目の前に、ドラゴンが現れた。

第43話 集中攻撃

竜宮城に着いた四人の前に突如として現れたのは、大きな翼と鋭い牙と爪を有し、腹以外は茶色い鱗に覆われている、蛇のような目を持った巨大な魔物。

「ど……ドラゴン……？」

その魔物、ドラゴンを目の前にし、葵がゆっくりと口を開くと、

「有ーりー得ーなーいーっ!!」

頭を抱えた麗が思い切り叫んだ。

「麗、見てしまったからには信じなければならない、です」

彼女の隣で、鈴が例のポケットの中から何かを探しながらそう言った。

「……タツノオトシゴの次はドラゴンか」

「うん。本当にこの世界はファンタジーだね」

悠に続いて、葵は油断なくドラゴンを見ながら、

「鈴、載ってた？」

彼の後ろにいる鈴にそう尋ねた。

「はい、です」

葵の問いに、鈴はこくりと頷いた後、

「ドラゴンの弱点は、お腹と氷、です」

探し当てた魔本に載っていた、ドラゴンの弱点をさらりと答えた。

「お腹かぁ。確かにお腹斬られたら痛いよね」

「いや、どこ斬られたって痛いと思うわよ!？」

自分のお腹に手を当てながら葵が言った言葉に、麗が透かさず突っ込みを入れると、

「「!」」

ドラゴンがこちらに向かって火を吹いた。

「……じゃあ、行って来るね」

それを避けた葵は、新しい剣を持ち、ドラゴンに向かって走っていた。

「氷が弱点……所詮、自力で体温調節が出来ない大型の爬虫類か」

同じく炎をかわした悠は、魔力を高めながらそう呟いた。

「ありがとう、鈴」

「はい、です」

光の盾で炎から身を守った鈴と麗は、

「ところで、河童は何類、ですか？」

「うんうん。何類なの？」

と、悠に質問をした。

「自由を奪う凍てつく罠」

悠は氷の魔法の呪文を唱えた後、

「……………爬虫類だ」

小さな声でぼそつとそう言った。

「「！」「」」

素直に答えた悠に驚くのと同時に、彼がいつもきゅうりを食べている理由と、ロングコートを脱がない理由が分かり、すまないという気持ちになる鈴と麗。

きゅうりは体温を下げる為に、ロングコートは体温を保つ為に。

そしてきつと、暑くてもコートを脱がないのは、背中にあるであろう甲羅を隠す為。

……………甲羅……………

「「「「」」」」

鈴と麗は、思わず嘖き出しそうになったのを、力一杯押さえ込んだ。

『グオオオオオオオ！！』

悠の魔法によって足元の地面と両足が凍りついて動けなくなってしまったドラゴンは、その冷たさに悲鳴をあげた。

「いくよっ」

動きが止まったドラゴンの無防備な腹を、葵は剣で切り裂いた。

「！」

『ギャオオ！！』

剣によって刻み込まれた深い傷に目を見開く葵と、再び悲鳴をあげるドラゴン。

「こ……この剣、すっごく斬れるんだね……」

新しい剣を初めて使った葵は、銀色に美しく輝くそれについた青い血を見ながら呟いた。

その瞬間、

『グオオ！！』

「うつ！？」

腹を斬られたドラゴンが黙っている筈もなく、ぼうつとしていた葵は、鋭い爪によって弾き飛ばされてしまった。

「壮麗なる龍は全てを呑み込む!!」

「! 葵!」

それを見た悠は、次の魔法を唱え、鈴は、慌てて大きなクマのぬいぐるみ、チエルシーを持ち出した。
すると、すぐ後ろの海の中から水龍が飛び出し、

「わふっ?!」

吹っ飛んできた葵はチエルシーの胸の中に収まった。

「あ、ありがとう、鈴」

「チエルシーにもお礼を言う、です」

「あ、うん。ありがとう、チエルシー」

切り裂かれてしまった左腕を押さえながら、葵が鈴とそんな会話をしている時、

『グオオオオオオオ!!』

「くっ……」

ドラゴンの炎と悠の水が競り合っていた。
炎は水を蒸発させ、水は炎を消していく。
双方とも一步も退かない状態が続く、辺りに白い水蒸気が大量に立ち込めた。

——この視界が悪い状況下で一番活躍するのは、

「集中豪雨う！」

悠曰く、火事場泥棒。

もとい、盗賊少女、芦川 麗。

多少視界が悪くても、麗は正確に狙いを定めてボウガンを連射した。その技名の通り、ドラゴンの腹の一ヶ所に集中的に無数の矢が突き刺さる。

勿論そこは、葵が大きく深く切り裂いた場所。

『グキヤオオオ!!』

ただでさえ深い傷がより深くなり、ドラゴンは甲高い叫び声をあげた。

「おお。もう火は吹かないのか？」

『!!!』

その瞬間、悠の水龍がドラゴンに襲いかかった。それによって、ドラゴンは後方に吹っ飛んだ。

『……』

「や、やったのかな？」

「……起き上がらないな」

「それに、動いてないわよ？」

『……グ……ガ……』

麗がそう言った瞬間、ドラゴンがよろよろと起き上がり、

『グオオオオオオオ！！』

「……！！」

最後の力を振り絞って、口から光線を放った。

若干気が緩んでいた上に、炎よりも遥かに速い光線が避けられる筈もなく、三人は光線に吞まれていった。

「一意、専心っ！！」

『——！！』

同時に、ドラゴンの腹の深い傷に、鋭く尖った木製の杖が深々と突き刺さった。

途端に光線が消え、ドラゴンは仰向けに豪快に倒れ込んだ。

「……ふう、」

鈴は、ドラゴンの腹に刺した杖をずぶずぶと抜き出すと、

「……大丈夫、ですか？」

倒れている三人の仲間の元に移動した。

「……」

「……」

「……」

返事がない。
ただの屍のようだ。

「いい、癒しの風っ!!」

不吉なナレーションに焦ったのか、鈴は慌てて白魔法を唱えた。
暖かい光を伴う風が、徐々に三人を癒していく。

「……う……」

「いたた……」

「は……はれ？　鈴、ドラゴンは？」

すると、うめき声を発する悠と葵と、キョロキョロと辺りを見回す麗。

「よ、よかった……です」

そんな彼女を見て、鈴は、心の底から胸を撫で下ろした。

『凄い、凄いです！　イヴを負かしただなんて!』

「「!?!」」

背後から突然聞こえてきた声に、ある程度回復が終わった四人は驚いてそちらに素早く振り向いた。

『ああ、ボロボロですね。ごめんなさい。ドラゴンは加減するといふことが出来ないから、いつも全力で遊んでしまっんです』

そこに立っていたのは、真っ黒なシルクハットと燕尾服を身に纏い、真っ赤な蝶ネクタイをつけた、自分達と同年ぐらいの少年。

まるで紳士のような格好をしたその少年の薄い茶色に染まった短めの髪は、毛先がくるくると渦を巻いている。

彼は、ボロボロになっている四人を順に見た後、申し訳なさそうにそう言った。

「!? あ、あれが遊んでたって言うの?!」

少年の言葉を聞いて、麗が信じられないと言うような口調で彼に尋ねた。

『はい。とっても楽しそうに遊んでいました。何せ、貴殿方は久しぶりのお客様でしたから』

その問いに、少年は嬉しそうそう答えた。

「……だろうな。ドラゴンが出る城と知っていれば、普通誰も近付かない」

すると、きゅうりをかじりながら悠が言った。

「あ、だから“竜宮城”なのかあ」

彼の隣でぼん、と手を叩いて納得する葵。

「……竜が住む城で竜宮城……成程、です」

彼の言葉に感心する鈴。

「えらい所に連れていかれたもんだな。浦島は」

「そうね。もしかしたら、助けた亀が浦島太郎をドラゴンに献上してたかも……って、怖いわ!!」

悠の発言の後に麗が乗り突っ込みをかますと、

『そうですね。ドラゴンは基本肉食ですから』

少年が爽やかに微笑みながらそう言った。

「いや、だから怖いって言ってるでしょう!？」

そんな彼に突っ込みを入れる麗。

「亀助けはするもんじゃないな」

きゆうりを食べ終わった悠が手を軽く叩きながらそう言つと、

「……と言つか、悠なら亀を助けるどころか、いじめに参加しそうです」

鈴がぼそりと呟いた。

『でも、ドラゴンを嫌いにならないでください。彼らは無邪気で、素直で、優しくて、可愛くて、とってもメルヘンで素敵な魔物なんです』

すると、少年はぐったりと倒れているドラゴン、イヴの隣に移動し、その頭を優しく撫でながらそう言った。

(……メルヘン?)

少年の口から出た言葉に小首を傾げる四人。

『イヴと遊んでくださってありがとうございました。お疲れになられたでしょう? もしよろしければ、僕の城でお休みになってください』

そんな四人に、少年はぺこりと頭を下げて、彼らを城の中に導こうとした。

「……良いの、ですか? 鈴たち、そのドラゴンを殺した、ですよ?」

少年に鈴がそう言つと、

『気にしないでください。イヴがこうなったのは、この子が貴殿方に攻撃を仕掛けたからです』

少年は微笑みながら、詰まり、自業自得です、と言つた後、

『それに、大丈夫です。ドラゴンはこのくらいでは死にません』

イヴの傷付いた腹を指さしてそう言った。

「わあ……凄い！」

そちらに目を向けた葵は、目を見開いてそう言った。

イヴの傷は、徐々に癒えていっていた。

「って言うか、ええ?! これ、あんたの城だったの!?!」

その後で、少年の言葉に遅れて驚く麗。

「詰まり、このドラゴンはいいつのペットか」

その隣でさらりと悠がそう言った。

「ドラゴンがペット?!」

「わあ、お散歩とか大変そうだねえ」

「って、アホか!?!」

「あ、あなたは一体何者、なのですか?」

悠の発言に、葵と違って麗と同じように驚いた鈴は、少年に向かって尋ねた。

『え? ああ、申し遅れました。僕は“フラン”』

すると、少年、フランはシルクハットを脱いで優雅に会釈し、

『第8ステージのボスの、ドラゴンマスターです』

再びシルクハットを被り、ふわりと微笑んでそう言った。

第44話 乙姫

「はじめまして。日向 葵です」

自己紹介をしてくれたフランに、葵はにこやかに微笑みながらそう言って右手を差し出した。

「って、バカ!!」

「いたっ!？」

すると、左から鉄拳が飛んできた。

「い、痛いよ、麗。……？ 悠？」

麗に叩かれた所に左手を当てながらそう言っている途中で、フランに向けて差し出した右手を悠が無言で取ったので、葵は小首を傾げて彼の名前を呼んだ。

「話聞いてなかったの!？ こいつは第8ステージのボスなのよ？
！ って、何ちゃっかり葵の手え握ってるのよ、悠!？」

葵に突っ込みを入れた後、ちゃっかりしている悠にもしっかり突っ込みを入れる麗。

「……だって」

『ウフフ、嫌ですね。そう身構えないでください、麗さん』

ムツとした表情で悠がぼそつと発した言葉は、フランによって掻き消された。

『ご安心を。僕は貴殿方と戦うつつもりはありませんから。多分』

「なんで曖昧?! って言うか、どうして私の名前を――」

爽やかな笑顔で、最後に四人を不安にさせる単語をつけたフランに麗が突っ込みを入れると、

『貴殿方のことは、恒さんからよく聞いていましたので』

フランはそう答えて、竜宮城の入り口に向かって歩き出した。

「フランさんと死神さんはお友達なんですか?」

悠と繋いだ手を前後に緩く揺らしてほのぼのと笑いながら、葵はフランに質問をした。

『はい。彼、よく此处に来てくれるんですよ』

質問に答えたフランは、竜宮城の入り口である大きな扉を押した後、再び四人に向き直り、

『ようこそ、僕の城へ』

ふわりと微笑んでそう言った。

ガコン、という大きな音を立てて扉が開き、まず初めに目に入ったものは、

『メリークリスマス、あお……』

『まろっ！ メリークリスマスまろ、きゅっ……』

と言いながら、葵と悠に向かって飛び込んできた死神とマロ。
勿論、そんな危険極まりない人物は、悠が振り向きざまに回し蹴り
をして吹っ飛ばした。

「お、お花畑！？」

「と、川がある、です」

「わあ、綺麗だね」

吹っ飛んでいった死神とマロを完全に無視して、次に目に入った
ものは、竜宮城の中の様子。

城の中は、室内だというのに、色取り取りの花が鮮やかに咲き乱れ、
その間を綺麗な川が流れている。

「そしてドラゴンがずらり?!」

「……食費が大変そう、です」

最後に、花畑の中にいるドラゴン達を発見した。

『ああ、その点は全く問題ないんですよ』

そのドラゴン達を見て、鈴がぼつりと発した言葉に、

『鈴さんは、“弱肉強食”という言葉をご存知ですか?』

フランは爽やかに微笑みながらそう言った。

「弱——」

『ウフフ、言ったでしょう？ ドラゴンは基本肉食だって』

嫌な予感にぱきつと固まった鈴に向け、フランがその予感を的中させた。

「……成程。それでお金を使わずお腹いっぱい、ってことか」

二人を吹っ飛ばした後、何事もなかったかのようにきゅうりをかじっていた悠がそう言うのと、

『はい。意外と美味しいんですよ？ ドラゴンの肉って』

「って、あんたも食うのかよ!？」

と、爽やかな笑顔で言ったフランに、麗が透かさず突っ込みを入れた。

「……あれ？ でも、魔物は死ぬとすぐに消えてしまいますよね？」

それでどうしたらお腹がいっぱいになるのだろうと、葵が小首を傾げてフランに聞いた。

『魔物は死ななければ消えませんか？』

すると、葵はフランに逆に聞き返された。

「え？」

「……詰まり、部分的に食べる、ということ、ですか？」

疑問符を出した葵の隣で、鈴がそう言うと、

『ウフフ、見たでしょう？ ドラゴンは再生能力が凄いです』

フランは爽やかな笑顔でそう言った。

「……ええと、あんたはドラゴンが好きなのよね？」

『勿論大好きですよ。ドラゴンは無邪気で、素直で、美味しくて、優しくて、可愛くて、とってもメルヘンで素敵な魔物ですから』

「……なんかひとつ増えてない？ とは、敢えて突っ込まないわよ？」

にこにこと笑って答えるフランに、麗は引きつった笑顔でそう返した。

『ああ、そうだ！ 今、恒さんのささやかな誕生日パーティーをしていたところなんですよー……って、あれ？ 恒さん？』

そんな麗の呟きを綺麗に流したフランは、死神の姿が見えないことに今気が付いた。

「……死神なら、あそこの木に引っ掛かってるぞ」

すると、悠が城の中にある木を指さしてそう言った。

『え?』

『ぶらんぶらん』

疑問符を出したフランは、自分で効果音を言いながら木の枝にぶらさがっている死神を見て、

『もう、本当に馬鹿ですね?』

とびきりの笑顔でそう言った。

(分からない、私こいつが分からないわ!!)

(……本当にお友達、なのでしょうか?)

フランの笑顔に言葉に出来ない不安を覚える麗と鈴。

『そんな馬鹿なことしてないで、パーティーを続けましょう?』

『らじゃ』

フランが声をかけると、死神は、

『すたっ』

と地面に降りた。

すると、

『ぐえまろ』

丁度そこに倒れていたマロが、少々無理がある悲鳴をあげた。

『む。めんごめん』

『もう、ちゃんと謝ってください。乙姫様を踏みつけるなんて最低ですよ、恒さん?』

乙姫様の格好をしたマロにさらりと謝った死神に、フランが怒ったようにそう言つと、

『かたじけない』

死神は地面に手について謝罪した。

『もう、本当に意味不明ですね』

溜め息をつきながらも微笑みを絶やさずに、

『では、貴殿方も一緒にどうぞ。って、ああ、でもその格好は、パーティーにふさわしくありませんね』

と言って、フランはパキンと指を打ち鳴らした。

「「!?!」」

直後、ボロボロな服から、鈴と麗はひらひらしたドレスに、悠は新品のロングコートに変わった。

「どど、ドレス?!」

「っです」

今まで着たことがないような服を着せられ、麗と鈴が焦っていると、

『よくお似合いですよ』

フランはふわりと微笑んでそう言った。

『なかなかだけど、乙姫様のまろほどじゃないまろ。ね、きゅうちや〜ん?』

素敵な笑顔でそんなことを言われたものだから、若干顔が赤くなつた麗と鈴に向けて、乙姫様の格好をしたマロが悠に同意を求めてそう言った。

「は? 乙姫が何処にいるんだ?」

『ま、まろのことま……』

キョロキョロと辺りを見回しながらそう言った悠に、マロがじたばたしながら言つた言葉は、

「あ、あのう……」

葵によつて遮られた。

「『? ——!?!』」

その声に疑問符を出しながら振り向いた六人は、彼を見た途端に固まった。

「どうして僕までドレスなんでしょうか……？」

それは、葵がふわふわのドレスを来ていたから。
もじもじと恥じらいながら言う葵の姿は、

（（お、乙姫……！！））

悠と死神のハートを撃ち抜いた。

「葵、可愛い、です」

『まろろ、お人形さんみたいです！』

「うんうん！ もういつそのことそのまま女の子になっちゃいなさいよ！」

「ええっ！？ 何言ってるの、麗？！」

鈴とマロと麗にそう言われて困っている葵を見て、

『ええっ！？ 女の子じゃなかったんですか？！』

フランは驚いて無意識に一步下がった。

『で、では、何故恒さんは……』

『それ以上踏み込んだんじゃ駄目まろ、フラン』

そして、フランが続けて何か言おうとしたところ、マロが首を横に振ってそれを止めた。

第45話 メルヘン男

少女は言った。

『それ以上踏み込んだんじゃ駄目まろ、フラン』

少年は思った。

（此処、僕の城なんですけど……？）

まったく通じ合っていないマロとフランに、葵は真剣な表情でこう言った。

「あの……早く戻していただけませんか？」

ささやかなパーティーが終わり、それぞれが城の中で好きな行動を開始した。

「死神に花畑……ってことは、この川は三途の川？」

花畑の間を流れる綺麗な川を見て、普段着に戻してもらった麗が言うと、

「そうかもしれない、ですね」

白いローブを着た鈴は、いつもの調子で返事をした。

「詰まり、この川を渡ったらあの世逝き？」

「……試してみる、ですか？」

じっと川を見つめている麗に鈴がそう言つと、

「ぜ、絶対に離さないでね？」

麗は鈴の手をしっかりと握って、水面に顔を出している岩に足を乗せた。

「はい、です」

鈴はこくと頷いてその手を離れた。

「つて、言ってるそばから離れたあ？！ いやー！！ 死ぬー！！」

狭い足場でバタバタと暴れてしまった麗は、

「！——きゃあ！？」

『『クルククーン』』

川にドボンと落ちて、水辺にいたドラゴンたちに笑われてしまった。

「こんにちは」

そこから少し離れた場所に座り、指に止まった蝶々にくすりと笑いかけながら挨拶をする、普段着に戻してもらった葵。

『メリークリスマス、葵』

『メリークリスマスまる、あおぴょん』

そんな彼の所に、サンタクロースの格好をした死神とマロが、物欲しそうに両手を前に出してやって来た。

『む〜』

彼女のトンガリ帽子の中から現れた夢魔は、鼻が赤く染められていて、頭には二本の角がついていた。

「え？ あ、ええと、ちょっと待っててください」

彼らの物欲しそうな両手を見た葵は、慌てて今ここにあるものを使つてものづくりを始めた。

『む〜』

そうしてしばらく待っていると、

「ぶつ……はい、どつぞ」

葵は微笑みながら、二人と一匹に綺麗な花の冠をプレゼントした。

『まる……』

それを頭に被せてもらったマロは、

『ありがとうまる、あおぴょん!!』

につこりと笑って葵にお礼を言った。

「どういたしまして」

くすりと微笑みながらそう返す葵。

『むう……… 苦い』

『む………』

そんな彼らの隣で、花の冠を迷わず食べた死神と夢魔は、苦い、と同じように舌を出した。

それを見て、葵とマロは面白そうに笑った。

『す、素晴らしいです………!!』

その様子を少し離れた所で見ていたフランは、

『葵さんはメルヘンの塊ですね!!』

隣の椅子に座ってきゅうりをかじっている悠に、興奮した様子でそう言った。

「……このコート」

悠はそれを綺麗に無視し、今自分が来ている、フランがくれた新品の黒いロングコートを摘んだ。

『え？ ああ、そのコートは、僕から貴方へのプレゼントです。お気に召しましたか？』

無視されたことを気にも留めずに、フランは爽やかに微笑みながら彼に言った。

「死神の鎌と同じか？」

そんな彼に、悠は突然そう尋ねた。

『！ 鋭いですね』

それに驚いたフランは、

『はい。恒さんの鎌子と同じように、そのコートには貴方の体内に宿る邪悪な魔を鎮める、光属性の効果が備わっています』

と、こくりと頷きながら言った。

——光属性の特殊な効果がつくと、それと同時に光属性の攻撃に対するの耐性も備わる。

だからあの時、死神は悠の光魔法を切り裂くことが出来たのだった。

「……何故俺にこれを？」

そのような効果を持つ特殊なコートを、今日会ったばかりの自分に
どうして無償でくれるのか、悠がフランに尋ねると、

『……それは、貴方が恒さんと同じように苦しんでいたから』

フランはゆつくりとそう言った。

「……」

『楽になれる方法を知っているのに、魔物の心と体はいつもそれを
求めているのに、』

魔物の心と体が求めているもの。

それは、人間が持つ真つ赤な血。

『魔物が人間を殺すことは当たり前のこと。それなのに、貴方と彼
はそれを無理矢理押さえ込んで、少しつければ簡単に壊れそうにな
るほど我慢していたから』

黙って聞いていてくれる悠に微笑みを向けながら、フランは言葉を
続けた。

『僕はメルヘンが好きだから』

一息置いてから、フランは花畑を見回しながらそう言い、

『つらく苦しんでいるのはメルヘンじゃないから』

自分に駆け寄ってきた幼いドラゴンを胸に抱いて、

『だから、貴方にも彼にも笑顔に、メルヘンなって欲しかったのです』

ふわりと微笑んでそう言った。

「……何故魔物は人間を殺そうとするんだ？」

すると、悠が再びフランに質問した。

『それは、僕たち魔物は、人間を殺すよう、呪われて産まれてくるからです』

その質問に答えた後、不思議そうな顔をした悠に、

『魔物は魔物に呪われているのです』

フランはそう付け加えた。

「じゃあじゃあ、その魔物をやつつけちゃえばいいんじゃないの？」

すると、いつの間にそこにいたのか、フランの隣で麗が言った。

『はい。そうすれば、魔物に掛けられた呪いが解けてなくなります。同時に、貴殿方はこの世界からいなくなります』

彼女の問いに、フランはさらりと答えた。

「……？ どういうこと、ですか？」

麗の隣にいた鈴が首を傾げて尋ねると、

『詰まり、すべての魔物に呪いを掛けている魔物。その魔物がラスボスということです』

フランは微笑んでそう答えた。

第46話 お手柄

次の日の朝、四人は竜宮城から海岸までフ란のドラゴンに送ってもらった。

「此处から西、ですか」

『はい。そこに第5ステージのボスがいる筈です』

砂浜に降りた鈴が言った確認に、フ란は頷いてそう言った。

「お世話になりました」

「戦うつもりがなかったのが“多分”じゃなくてよかったわ」

葵がぺこりと頭を下げて、自分達を竜宮城に泊めてもらったお礼をフ란に言つと、胸を撫で下ろしながら麗が言った。

『いえ、気にしないでください』

フ란は頭を下げた葵に微笑んでそう言った後、

『ああ、それと、もし貴殿方がやる気でしたなら』

麗に顔を向けてにつこりと笑い、パキンと指を打ち鳴らした。
次の瞬間、フ란と四人を取り囲むように、竜宮城にいたドラゴン達が勢揃いした。

「！」「！」「！」

『——今からでも結構ですよ?』

目を見開いて固まった四人に、ドラゴンマスター、フランがシルクハットを深く被り直しながら言っと、

「「け、結構です!」」

葵と鈴と麗が透かさず断った。

『ウフフ、冗談です』

ウフフと楽しそうに笑ってそう言うフラン。

そんな彼に、麗は、笑えねえよ、とは突っ込めなかった。

『では、お気を付けて。貴殿方が無事、貴殿方の世界に帰ることが出来るよう、幸運を祈っています』

フランは優雅にお辞儀をした後、茶色のドラゴン、イヴの背中に飛び乗って、北の方へと去っていった。

「……? 竜宮城はこっちょよ?」

それを見て、南にある竜宮城を指さしながら小首を傾げた麗に、

「……メルヘンの女神を探す旅に出るそうだ」

悠がどうでもよさそうにそう言った。

「……メルヘンの女神?」

やっぱりあいつは分からないわ、とか思う麗の隣で、

「いい人だったねえ」

「……変わった人、だったです」

葵はくすりと笑ってそう言って、鈴は小さくなっていくドラゴンの群れを見送りながらそう言った。

日が暮れる頃、西に進んでいた四人は、とある町に行き着いた。

「てんぷら。一泊ですと、ひとり500Nになります」

その町の宿屋のオヤジが言った金額を支払おうとして財布を開けた鈴が口にした一言で、葵と麗と悠は固まった。

「……足りない、です」

お客様は神様だが、金のない奴には用はない。

鈴の一言を聞いた宿屋のオヤジは、

「それは残念ですね。てんぷら」

と言つて、四人を宿屋から締め出した。

「……」

間。

「つにゃー……！！　なんなのよあのオヤジ感じ悪すぎー
っ……」

「……野宿決定、ですね」

頭を抱えて叫び声をあげる麗と、がっくりと下を向く鈴。

「お前らの金遣いが荒いせいだろ」

そんな二人に向けて、悠が呆れたように溜め息をつきながらそう言う
と、

「ごめんね、みんな。僕のせいだよね？」

と、下を向いた葵が震える声で言った。

「僕がこんなに高い剣を買ったせいだよね……？」

うるうる。

「そそつ、そんなわけないだろう、葵!？」

「そ、そう、です! お金がなくなったのは、鈴がチェルシーを買ったせい、です!」

慌てて葵の涙を引つ込ませようと試みる悠と鈴。

「ねえ、これ見て!」

そんな彼らに、麗が明るい声で話しかけた。

「「?」」

その声に疑問符を出しながら三人が振り向くと、彼女は宿屋の壁にある掲示板を指さして、

「これでお金がつくれるんじゃない!？」

三人の目をその掲示板に貼ってある張り紙に向かせてそう言った。

「「……」」

その張り紙を見て、

「……珍しく……」

「……お手柄だな……」

鈴と悠は思わずそんなことを呟いた。

四人は早速町を出て、その町の近くにある溪谷に向かった。

「この溪谷に落ちてるぬいぐるみを見付けて持って帰ればお金が貰えるのね」

麗はそこで、先程会ってきた依頼主の言葉を繰り返した。

「……落ちている場所も分かっているのに、それだけで3000000Nも貰えるとはな」

「お金持ちの考えは分からない、ですね」

彼女の隣に立つ悠と鈴は、依頼主から渡された地図を見ながら無表情でそう言った。

「よおしっ！　ちゃちゃっと見付けて、ふかふかのベッドで眠るわよ！」

「はい、です」

「そうだな」

拳を振り上げてそう言った麗に、小さく頷いて応える鈴と悠。
そして、一行は余裕げな表情で溪谷に入っていった。

「お……オバケなんていないよね……？」

一名を除いて。

第47話　ぬいぐるみ

白銀の月が輝く夜、四人は薄暗く荒涼とした溪谷を歩いていた。

「導きの光」

鈴が呪文を唱えると、彼女の杖の先に白い光が点り、彼らの足元を照らした。

「うん。視界良好。流石鈴ねっ！」

そう言いながら麗がナイフを前方に投げると、それが闇の中で何かに突き刺さる音がした。

「よく見える、ですね」

「えへへ、盗賊を嘗めないでよね……って、うわお!？」

鈴の言葉に照れたように後頭部に左手を当てた麗は、砂利で右足を滑らせた。

腕をばたつかせて、麗がなんとか体勢を立て直したすぐ後、下の方でトポンと水音が立った。

「あつぶな……いきなり出てこないでよね、絶壁」

急に道が狭くなり、足元に姿を現した絶壁に向かって文句を言う麗。

「……チッ」

「下には川が流れてるみたいね。てなわけで、あんたは特に気を付けなさいよ、葵？」

悠の舌打ちなんて気にしない、気にしない。

麗が泳げない葵に警告すると、

「……うん。分かった」

葵はぐずりと笑ってそう言った。

「「……？」」

——ぐずり？

おかしい。

いつもなら濁点などついていないはずだ。

と言うか、その擬声語は笑っていると言うよりむしろ……

（（！ 泣いてるっ?!））

ようやくその考えに至った三人は、最後尾を歩く葵にバツと振り向いた。

「……気を付ける……」

そう言った葵の声は震えていた。

「どっ、どうしたんだ、葵？ 怪我でもしたのか？」

すぐに悠が彼の元に行って心配そうに声をかけると、葵は下を向いたまま首を横に振って、

「……怖いの……」

と言って、悠のコートの袖を右手でちゃんと握った。

「悠、このままここ持っていていい……?」

そして顔を上げ、涙目で悠にお願いした。

「……」

数秒の間。

「……はっ！ も……も、勿論だっ！」

我に返った悠は、それにばかり頷いて了承し、

「さ、さあ、行くぞ、葵っ！」

と言って、いつもはクールな彼が、妙なテンションで葵と共に歩き出した。

「……ひとりでドラゴンに斬りかかってったヤツが何言ってるのよ?」

怖がっている葵を見て、呆れたように溜め息をつく麗と、

「……そう言えば、葵、祭りの町でも怖がってた、です」

あの時も悠のコートを掴んでたなあ、とか思い出す鈴であった。

「この辺りね」

しばらく歩くと、四人はぽっかりと開けた場所に出た。そこで地図から目を離した麗は、足を止めてそう言った。

「……クマのぬいぐるみ、でしたよね？」

「ええ。そうよ」

鈴は、麗が頷いたのを確認した後、

「では、探しましょう、です」

光が点った彼女の杖を、開けた場所の中央の地面に突き刺してそう言った。

「りょくおかいっ」

そうしてクマのぬいぐるみを探し始める麗と鈴。

「がんば」

ぬいぐるみ探しを手伝う気は毛頭ない悠は、きゅうりを持ち出しながら彼女たちを適当に応援した。

「ええと……クマ……クマさん……うーん……」

そんな彼のコートの袖を掴んだまま、首だけを動かしてクマのぬいぐるみを探す葵。

「って、あんたも手伝いなさいよ!？」

若干遅れて悠に突っ込みを入れる麗。

「めんどい」

彼女の突っ込みを一言で片付ける悠。

「めんどがるな、って言うか、きゅうり食ってんじゃないわよ」
「ア!！」

「……と言うか、いつも何処からきゅうりを持ち出してる、ですか?」

再び突っ込みを入れた麗の後、鈴が不思議そうに質問すると、

「ドラ猫ポケット」

悠はロングコートのポケットから白いポケットを持ち出してそう答えた。

「なっ！？ そつ、それは……！！」

「ゆ、悠も持ってた、ですか！？」

そのポケットを見て、衝撃を受ける麗と鈴。

「当然」

「何！？ 一体何なのよ、この世界は？！」

そう言つて頷いてみせた悠を見て、頭を抱えて困惑する麗。

「……………未来の世界の？」

「猫型ロボ……ッット……ってバカ！！」

そんな麗に向けて言つた鈴と悠の言葉に、彼女は思い切り乗り突つ込みをかました。

「！ あつた！」

彼らの会話にまったく入らずに真面目にクマのぬいぐるみを探していた葵は、それらしき物体を見付けて声をあげた。

そして彼は、ずっと掴んでいた悠の袖から無意識に手を離し、クマのぬいぐるみの元へと走つていった。

「……」

クマのぬいぐるみのことを忘れ切っていた三人は、はっと我に返つ

た。

「…………え？」

岩と岩の間から拾い上げたクマのぬいぐるみを見て、葵はぱきつと固まった。

——クスクス。

「……………！」

それは、動く筈のないクマのぬいぐるみが、不気味に顔を歪めて笑ったから。

第48話 邪悪な微笑み

「……？ 此処は？」

ふと気が付くと、葵は真つ暗な所に立っていた。

「あ、あれ？ 悠？ 鈴？ 麗？」

友人の名前を呼びながら、キヨロキヨロと辺りを見回す葵。

しかし、何処を見ても彼以外の人影は見当たらず、辺りにはただ闇が広がっていた。

「ど、どうしよう……？」

『お友達とはぐれちゃったの？』

「！」

葵が弱々しく呟くと、背後からやや低めの声が聞こえてきた。

「……？ 君は？」

背後に突然現れた青白い顔の少女に小首を傾げる葵。

『ボクは“ジュジュ”。キミは？』

彼の問いに、少女、ジュジュは、にこりと笑ってそう返した。

「僕は葵」

葵は自分の名前を名乗った後、

「ええと、此処は何処だか分かる、ジュジュ？」

と、困ったという顔でジュジュに質問をした。

『さあ？ 何処なんだろうね？』

ジュジュは口元の笑みを消さずに肩をすくめてみせた後、

『通りかかった金持ちそうな奴に憑いていたら、いつの間にかこんな所にいたんだ』

やれやれというようにそう言った。

「ええっ！？ 駄目だよ、ジュジュ。名前も知らないような人についていっちゃ？」

彼女の言葉を聞いて、葵は驚いたようにそう言って、

「知らない野郎に遊びに誘われても絶対についていくな。服を剥ぎ取られて食われるぞ」って、悠が言ってたよ？」

と、昔友人に言われた言葉をそのまま彼女に教えた。

『へえ？ そうなの？』

いつの間に近付いたのか、ジュジュは葵の頬に手を当て、怪しげに微笑んだ。

「……………うん。……特に……鼻息が……荒い人には……気を付けろ……
……って……」

すると、とろんと瞼が落ちて、全身の力が抜け、葵はそのまま深い眠りへと落ちていった。

『クスクス。……じゃあ、名前を知っているキミになら、憑いていっても大丈夫だね、葵?』

「……………葵?」

クマのぬいぐるみを拾ってからぴくりとも動かない葵に、鈴は不思議そうに声をかけた。

「……………」

しかし、やはり葵はまったく反応しない。

「何、何？ オバケでも見ちゃったの、あお……」

そんな彼に、麗がそう言いながら近付くと、

「い?!」

彼女の顔のすぐ横に、銀色の閃光が走った。

「?!? 葵?!」

麗の顔面すれすれの所で銀色の光を放つそれは、まだ新しい葵の剣。麗に剣を向けた葵に、悠と鈴は驚いて目を見開いた。

「な、なんのつもりよ、葵……?!」

麗がかすれた声で、自分に剣を向けている葵にそう言つと、

「殺すつもりだけど?」

葵は顔を歪めて不気味に微笑みながら、剣を思い切り振り上げた。

「隔壁の雫!」

「っ! ありがとう、鈴!」

それが振り下ろされると同時に鈴が防御魔法を唱え、光の盾に剣が弾かれた隙に麗は素早く葵から距離を取った。

「い、いきなりどうしたのよ、葵は?」

「……何かよからぬものが切れた為に人格が変わってしまった、というわけではなさそう、ですね」

今まで一度も見たことがないような邪悪な笑みを浮かべている葵を油断なく見ながら、麗の言葉に鈴がそう返すと、

「……もう少し右にずれていれば……」

その隣で、惜しかったなあと、悠がぼそつと呟いた。

「聞こえてるわよ？」

そんなことを言いながらも真剣な表情で葵の様子を窺っている悠に、彼と同じように葵に目を向けている麗は一応突っ込みを入れておいた。

「クスクス。……攻撃してこないの？」

攻撃する動きを見せない三人を見て、葵は愉快そうに笑い、

「じゃあ、ボクの方から行かせてもらおうよ」

体勢を低くして走り出し、悠に向かって剣を振り下ろした。

「っ！」

釵で彼の剣を受け止めたものの、なにか精神的にももの凄いショックを受ける悠。

「！……へえ、キミ、なかなかかつこいいね？」

そんな悠の整った顔を見た葵は、剣を押しやる力を少し緩め、

「クスクス。ボクの婿にしてあげてもいいよ？」

クスクスと笑ってそう言った。

「な……」

葵の口から飛び出した言葉に驚き、悠の釵を持つ力が極度に落ちた。

「目指せ甲子園！」

「うつ！？」

直後、葵の剣の鋭い刃が悠に振りかかる前に、鈴は杖の芯で葵の腹を捉えてそのまま彼をかつ飛ばした。

「凄いわ、鈴、ホームランよ！ 甲子園も夢じゃないわ！」

「当然、です」

拍手を贈る麗に、鈴はフツとクールに応えた後、

「……悠、しっかりしてください、です」

しらっとした目を悠に向けてそう言った。

「……ゴホン。この辺りは葵の中以外からは魔物の気配が感じられ

ない」

うつかり思考停止してしまった自分が恥ずかしかったのか、あるいは彼女に礼を言いたくなかったのか、悠は軽く咳払いをしてから鈴にかつ飛ばされた葵に目を向け、

「葵は内側から何かに操られているようだ」

と、見事に話を逸らせてみせた。

「う、内側から？」

「……詰まり、葵は何かに取り憑かれている、ですか？」

そう言っただけで彼と同じように葵に目を向ける麗と鈴。

「クスクス。凄いよ、よく分かったね」

すると、葵はゆっくりと起き上がり、

「はじめまして。ボクは第5ステージのボス」

服についた汚れを叩き落としてから再び剣を構えた。

「溪谷の亡霊“ジュジュ”だよ」

第49話 ジュジュ

「……第5ステージのボス……」

「……溪谷の亡霊……」

「……て言つか、ボクっ娘……」

三人は真剣な面持ちでそれぞれ呟いた。
ちなみに、上から悠、鈴、麗の順である。

「……」

「……」

「……コホン。さて、どうすればあいつを倒せるのかしらね？」

麗は、鈴と悠から向けられた視線から逃れるように目を閉じ、軽く咳払いをしてから再び目を開けて、ジュジュに取り憑かれている葵に目を向けた。

「そんなの簡単だよ。ボクを攻撃すればいい」

「——！」

が、ジュジュは麗が思ったよりも彼女の近くにいた。

「こんな風にね」

ジュジュは走ってきた勢いを乗せて、銀色に輝く剣を振るった。

「きゃあああ!!」

その勢いで後方に飛ばされる麗。

同時に、彼女の赤い血が辺りに飛び散った。

「させない、です!」

そのまま止まらずに振るった剣に左手を添え、追撃の体勢に入るジュジュ。

しかしその追撃は、彼女と麗の間に割って入った鈴が杖で止めた。

「クスクス。キミ、なかなか勇敢な白魔道士だね」

ジュジュは鈴に剣を弾かれたすぐ後、先程より力をこめて剣を振り、邪魔な杖を弾き飛ばした。

「でも、回復役が敵の前に出てくるのはよくないと思うよ?」

「っ!!」

そして、ジュジュは丸腰になった鈴に剣を振り下ろした。

戦場に、二度目の血しぶきがあがった。

「クスクス。バイバイ」

邪悪な笑みを浮かべ、鈴にとどめを刺そうとしたジュジュの周りの地面が、突然蒼白く光った。

「！」

「凍り付く壁」

それに気付いたジュジュがそこから飛び退くと同時に悠が呪文を唱えると、蒼白く光った地面から分厚く巨大な氷の壁が飛び出した。

「あつぶなあ。まだ黒魔道士さんがいたことを忘れてたよ」

「自由を奪う凍てつく罠」

挑発的な笑みを浮かべながら言うジュジュを無視し、悠は次の呪文を唱えた。

「？」

しかし、自分の周りになんの変化も起こらないので疑問符を出すジュジュ。

「！これは……！」

すると、氷の壁の向こう側で鈴が驚きの声を発した。

それは、彼女の傷口が凍り付き、溢れ出る血が止まったから。

「……早く杖拾ってこい」

「！はい、です！」

悠の言葉を聞いて、鈴は立ち上がって頷いた。

「わお。優しいね」

そして杖に向かい始めた鈴を見て、

「そんなこと、させないに決まってるけどね」

ジュジュは彼女を追って駆け出した。

「凍り付く壁」

「！」

すると、先程の壁と直角に交わるように、新たな氷の壁が現れた。

自分の行く手を阻む氷の壁を見て、ジュジュが悠を忌々しそうに睨みつけると、

「……そんなこと、させないに決まってるだろ？」

悠は不敵に笑ってそう言った。

「……キミ、かっこいいけどムカつくね」

ジュジュは剣を握り締めると、標的を悠に変えて走り出した。

「そりゃどうも」

そう言いながら振り下ろされた剣を一对の釵で止める悠。

「……悪い、葵」

そして、小さく葵に謝ってから、

「宙を舞う三日月」

「うわ!？」

彼を風魔法で思い切り後方に吹き飛ばした。

「っ!!」

勢いよく吹き飛ばされたジュジュは、氷の壁に激突してそのまま地面に崩れ落ちた。

「凍り付く壁」

その隙に、悠は三度氷の壁を出現させた。

そうしてジュジュは、三つで直角三角形を描く分厚い氷の壁に閉じ込められてしまった。

「癒しの風」

癒しの魔法で傷を治した鈴と麗は、悠の元に移動した。

「悠、ありがとうございます、です」

そして、ペコリと頭を下げる鈴と、

「あんたのおかげで助かったわ。って言うか、本気で死ぬかと思っ
た……」

今回ばかりはちゃんとお礼を言う麗。

「……で、ここからどうするの？」

寒そうな所に閉じ込められているジュジュを見ながら麗が小首を傾げて悠に尋ねると、

「……亡霊が弱って葵から出てくるのを待つ」

悠はその場に座り、きゅうりをくわえてそう言った。

「……待つ？」

「待つ」

「……」

聞き返すと、疲れたように悠が答えたので、鈴と麗は黙って待つことにした。

「……鈴、塩ある？」

が、黙って待つのは性に合わないようで。麗は隣で正座をしている鈴にそう尋ねた。

「？ はい、です」

いきなりそんなことを聞いてきた麗に疑問符を出しながらも、鈴は例のポケットから塩が入った小さな袋を取り出して彼女に渡した。

「麗、お腹が空いた、ですか？」

「え？ 何？ 鈴は私がお腹が空いたら塩を求めてるの？」

ありがとう、と彼女から塩を受け取った麗は、それを縛っている紐を緩め、

「悪霊退散!!」

と叫びながら、大きく振りかぶってそれを投げた。

「……」

それを追うように顔を上げる鈴と悠。

すると、分厚い氷の壁を超えた所で見事にそれは落下し始めた。

「……」

それを追うように顔を下げる鈴と悠。

それは見事に葵の頭に当たり、葵にどばつと塩がかかった。

『うぎゃあああああ!?!』

そして、見事にジュジュが葵の体から抜け出た。

「やったあ!」

ぴよんぴよん飛び跳ねて喜ぶ麗の隣で、

「……また珍しく……」

「……お手柄、ですね」

と、心底意外そうに呟く悠と鈴。

「……あれ？ でもまだ繋がってやがるわ。しぶといわね、あのヤロー」

飛び跳ねるのを止めて麗が顎に右手の人指し指を当てながらそう言うのと、

「……大丈夫だ」

と、十本目のきゆうりを取り出しながら悠が言った。
なかなかのハイペースである。

「「大丈夫？」」

同じように小首を傾げて聞き返す鈴と麗。

「あいつは“病弱娘”だからな」

彼女たちに悠がさりとそう言うのと、

『塩っ！！ 塩がっ！！ しかもさっきから寒いと思ったらなんだよこれ！？ ゴホッ、ゴホッ！！』

寒さのせいか、叫んだせいか、ジュジュが激しく咳き込み始めた。

「ああ……確かに恒がそんなことを言ってたわね」

「ね、です」

そんなジュジュを見て、のほんと会話する麗と鈴。

『ゴホッ、ゴホッ！！　こ……この体に戻れば……ゴホッ！！』

そう言いながらも、先程の戦闘とこの寒さで体力が残っていないジュジュは、徐々に葵から離れて上昇していき、

『……くっ……そ……』

最後に弱々しく呟き、白い光となって砕け散った。

「……鈴たちの勝ち、ですね」

「当然だ」

一件落着、よっこらせ、と鈴と悠が立ち上がると、

「ねえ、ここからどうするの？」

と、麗が言った。

「「？」「」

悠と鈴が疑問符を出して彼女に顔を向けると、

「葵、出られないじゃない？」

麗は倒れている葵を指さしてそう言った。

「「あ」」

衝撃。

「え?! ちょっと待って!? 今、悠まで“あ”って言わなかった?!」

「ま、まさか、ジュジュを倒した後のことは考えてなかった、ですか!？」

「おっ……俺としたことが……っ!」

そうして三人が騒ぎ出したところ、

『フッフッフ。やはり持つべきは神だな。フッフッフわふわ』

いつの間に現れていつの間に救出したのか、彼らの背後に、葵をお姫様だっこしている死神が鎌子に乗って現れた。

「「!」」

その抑揚のない声に素早く振り向いた三人は、

「いきなり出てこないでよ!？」

「心臓に悪い、です!」

「葵を返せ!」

救世主の死神に酷い言葉を浴びせたそうな。

『……オレ様しょんぼり』

第50話 突然の悪役

「……詰まり、“ぬいぐるみを拾ってきてくれ”ではなく、“溪谷の亡霊を倒してきてくれ”という依頼だった、ですね」

落ちていたクマのぬいぐるみを拾って、それを見下ろしながら鈴がぼつりと呟いた。

「成程ね。だからあんなにお金を……でも、どうしてわざわざ伏せたのかしらね？」

鈴の言葉にふむふむと頷いた後、麗は肩をすくめながら小首を傾げた。

「それは……その方が依頼を引き受けてくれる人が増えるから、ではないでしょうか？」

「……あるいは、祭りの町のように、溪谷の亡霊に捧げる犠が必要だったのか、だな」

彼女の問いに、鈴が自信がなさそうに答え、その後に悠が静かにそう返した。

「犠！？　じゃあ、あのおっさんは私たちに死んでこいって依頼してきたってこと？！」

信じられないという表情で悠に聞き返す麗。

「……もしそうだったら、そういうことになるな」

「……それなら町の人には死なないし、後払いだからお金も減らない、ですね」

悠と鈴は真剣な表情でそう言った。

「汚い！！ 大人って汚い！！」

「でも、鈴たちは勝ちました、ですから、あの金持ちからお金をがっばり頂きましょう、です」

「……それもそうね。結果オーライ。気にしないーい、気にしない！」

「……」

切り換えが早い麗に、呆れを通り越して尊敬を覚える鈴と悠。

「……では、早く帰りましょう、です」

白いローブについた汚れを軽く叩いて落としながら鈴が言った。

「ええ。えっと、葵は悠が運べばいいわよね？」

「！」

麗の言葉を聞き、悠は若干嬉しそうな顔でぱっと後ろを振り向いた。

『……フッ』

そこには、まだ目が覚めない葵と一緒に死神がいた。

「って、まだいたの?!」

「しかも、まだ葵をお姫様だっこしている、です」

「返せ!! 葵をお姫様だっこするのは俺だ!!」

「……」

最後の悠の言葉は聞かなかったことにするかのように空を見上げて遠い目をする鈴と麗。

『フッフッフ。返せと言われて返すと思っているのか? ふわふわ』

すると、その視界に死神が入ってきた。

「……。……な?!」

鎌子に足をかけて宙に高く浮いた死神が口にした悪役言葉に、しばしの間を置いて驚く三人。

『葵は預かった。返して欲しくばオレ様の城まで来ることだな』

死神は上空から三人を見下ろしながら、綺麗に整った顔に不敵な笑みを浮かべてそう言った後、

『ちやお』

と言って、夜に溶け込むかのように姿をくらました。

「……」

「……」

「……」

間。

「……は！ あ、葵！！」

「あ、葵が恒に拐われた、です！」

「拐われたわ！！　なんか最後の台詞で台無しだけど葵が恒に拐われたわ！！」

七秒の間を置いて、ようやく事態が飲み込めた三人。

「え、えええ！？　どうして急に悪役になっちゃったの、あの子？
！」

「り、鈴たちの恒の扱いが酷かったから、でしょうか！？」

「母さん、そんな風に育てた覚えはないわよ！？」

突然の出来事に混乱する麗と鈴。

「……別に急に悪役になったわけではない」

すると、悠は釵をかじりながら、

「あいつは第9ステージのボスキャラだ」

と言った。

「第9……ボスキャラ、なのですか!？」

「ということは、“超イケメン”って自分のこと言ってたの……って、悠、何食ってんのよ、それきゅりじゃないわよ!？」

「つつ!ー! お、俺としたことが……つつ!ー!」

「……うつ……?」

目が覚めると、葵は照明として紫色の炎が揺らめく黒い部屋にいた。

「……あれ? 僕、また違う所にいる……」

肌に当たる感覚からベッドに横になっていると分かった葵は、状態を起こして辺りを見回した。
広い部屋は炎以外は何処を見渡しても黒く、今自分がいるベッドまでも真っ黒だった。

『がちや』

すると奥にある扉が開き、

『……目が覚めたか？』

そこから死神がいつものように鎌子を担いで部屋の中に入ってきた。

「！ 死神さん！」

部屋に入ってきた死神を見て、葵はほっと安心したように彼の名前を口にした。

死神は足まで隠れる黒いローブを来ているので、この黒い部屋では、彼の青白い顔と、炎の光を受けて怪しげな光を放つ鎌子の刃しかよく見ることが出来なかった。

「ええと、此処は何処ですか？」

それでも自分の友人が現れたことに安心した葵は、ベッドから降りて靴を履き、小首を傾げながら死神に質問した。

『此処はオレ様の城だ』

彼の問いに、死神は音もなく扉を閉めてさりと答えた。

「死神さんの……お城？ どうして……」

『剣を構えろ、葵』

続けて質問しようとした葵を遮って、死神は彼に鎌子に向けてそう言った。

「え？」

『オレ様と戦えと言っている』

思わぬ言葉に驚く葵に、死神が無表情で言った。

「きゅ、急にどうしたんですか、死神さ……っ!」

わけが分からないと言うように死神にそう言っている途中で、彼が驚くほどの速さで接近して鎌子を振り下ろしたので、葵は慌てて剣を抜いてそれを防いだ。

『……それでいい』

死神は、ふっと口を綻ばせてそう言った後、鎌子と共に葵から素早く離れた。

「本気……なんですか？」

『オレ様は第9ステージのボスの死神』

死神は葵の問いに答える代わりに鎌子を振って紫色の炎を激しく燃え上がらせ、

『死神 恒だ』

紫色の光に照らされた部屋の真ん中で、不敵に笑いながらそう言った。

第51話 ピエロ

次の日、宿屋から出て町の中をあちこち回った三人は、町の門の下に立っていた。

「恒の城は何処にある、でしょうか？」

そう言つて東西南北に目をやる鈴。

この町の東には山、西には谷、南には海、北には森が広がっている。

「まったく、“オレ様の城まで来ることだな”とか言うなら住所ぐらい教えなさいよね！ 教えてもらったって分かんないと思うけど！」

胸の下で腕を組み、不満そうに言う麗。

「はい、なにより格好がつかない、ですね」

そんな彼女に冷静な突っ込みを入れた鈴は、町の中を振り向いた。

「……この町の人たちは恒の城を知りません、でしたし……」

困った、と言うように鈴が呟くと、

「ホント使えないヤローどもだわよね」

「まったくだ」

麗は腕を組んだまま、悠はワサビをかじりながら同意した。

「「！！ 悠？！」」

「っ！！ ガハッ！！ お……俺……と……ゴホゴホ！！ ……したこと……が……っ！！」

鈴と麗が気付いた時には時既に遅く。

悠は激しくむせ込んでワサビから手を離し、喉を押さえながら地面に片膝をついた。

「み、水！！ 誰かミミズをお持ちの方はいらっしやいませんか、ですー！！」

「鈴！？ なんてベタなボケをー！」

「……一度やってみたかった、です」

「もう、お茶目さんっ！」

ヒトが苦しんでいる目の前で楽しそうに会話する鈴と麗を見て、

「ゴホッ……覚えてろよ、お前ら……」

悠は下を向いてぼそっとそう呟いた。

「ワサビをそのままいくなんて、チャレンジャーね。葵が恒に拐われたからって動揺しすぎよ、悠？」

そんな彼の自分のことは棚に上げた発言は聞こえなかったようで。麗は腰に手を当て、呆れたようにそう言った。

『まろえ！？ 恒があおぴよんを拐ったまろか？！』

すると、いつの間に現れたのか、マロが驚いてその場から一步下がりがり、

『……恒、意外と大胆まろ……』

口に手を当てながらそう言った。

「って、マロ？！」

麗が突然現れたマロに突っ込みを入れると、

「マロちゃん、お知り合い？」

先程町の中に入ってきたらしい大きな馬車の中から、シルクハットを被った紳士が顔を出してマロにそう聞いた。

『そつまろ』

「そう。分かったわ。じゃあ私たちは先に行くから、3時までにはこっちに来るのよ？」

『まろ、分かったまろ』

マロが返事をする、紳士は顔を引っ込め、馬車はそのまま町の中に入ってしまった。

「……？ 今のは？」

その馬車を目で追いながら麗がマロに尋ねると、

『団長さんまる』

マロはすぐにそう返した。

「団長さん？」

『まる、旅するサーカス団のピエロをやってるまる』

小首を傾げた麗に、マロはさらりと言った。

「ピエロ！？　じゃあ、もしかして玉乗りとか出来るの？！」

それを聞いて目を輝かせる麗。

『勿論まる！　むうちゃん！』

『む〜』

マロはそれに大きく頷き、

『はいまる！』

マロは帽子の下から出てきて大きな玉に変身した夢魔の上に軽々と乗り、得意気に両手をぴつと伸ばしてみせた。

「わあ！！　凄い凄〜いっ！〜！」

『まろろ、こんなことも出来るまろよ!』

「きゃーっ!! すっごーい!!」

拍手を貰い、嬉しそうに玉の上で片手で逆立してみせたマロに、麗ははしゃぎながら更に拍手を贈った。

「では、3時というのはサーカスの開演時間、ということ、ですか?」

彼女の隣ではちぱちと拍手をしながら、鈴が小首を傾げて尋ねると、

『そうまろ! 見に来……あ……でも、あおぴょんが拐われたんだからそんな場合じゃないまろよね……』

こくりと頷き、三人をサーカスに招待しようとしたところで、マロははっとして残念そうにそう言った。

「「あ」「

それを聞いて葵のことを思い出したような鈴と麗はほっというて、

「……死神の城の場所を知っているか?」

少し回復した悠が顔を上げてマロに質問をした。

『まろ? 恒の城?』

悠の問いに、マロはえーとー、と記憶を探った後、

『まろ！ 確か恒の城は、あの森を抜けて沼を越えてベタな分かれ道に出てあれこれ悩んだ上で右に曲がると思いきや左に曲がろうとしたところでやっぱり右に曲がって綺麗な緑の丘をお花や蝶々と戯れながら進んでその先にある切り立った崖の頂上のどうやって建てたんだろうと不思議に思うような場所にあるまろ！』

と、北にある森を指差して一息で一氣にそう言った。

「え？ え？ 何？？」

「も……もう一度ゆっくり言っていただけませんか、です」

余計な言葉も入っていたせいか、疑問符を大量に出しながら聞き返そうとした麗と鈴を遮って、

「助かった」

悠はふつ、と口を綻ばせ、感謝の意を込めてマロの頭をポンポンと優しく二回叩いた後、すぐに北の森に向かって歩き出した。

『……ど……どういたしまして……まろ……』

悠を見送りながら、彼が手を置いた所に両手を重ね、ぽわんと瞳をハート型にしてマロが言った。

「め、珍すい……って、ちょっと待ちなさいよ！？」

葵以外にそんな行動をした悠に驚きすぎて“珍しい”を“珍すい”と言ってしまった麗は、はっと我に返ってすたすたと去っていく彼に向かってそう言った。

「ん……よく分かんないけど、あいつは分かったみたいだからありがとうだね！」

「……マロのピエロを見れなくて残念、です」

『ありがとうまる！ あ、そだ！』

麗と鈴の言葉に、マロはにっこりと笑って、

『これ、次の町でやるサーカスの入場券まる！ だから、みんなと一緒に見に来てまる！』

ポケットからチケットを取り出し、玉から降りて鈴に渡した。

「わあ！ ありがとう……！」

「っです！」

『まるろ、どういたしましてまる！ ……あれ？』

マロはお礼を言う麗と鈴にそう返した後、

『きゅうちゃん、見えなくなっちゃったまるよ？』

と言った。

「「え」「」

衝撃。

「あんのザビエルハゲ……か弱いレディを置いてくってどういふとよ!？」

「マロ、いろいろとありがとうございました、です」

「じゃあ、またね!! 行くわよ、鈴!!」

「はい、です」

そうして、麗と鈴は慌ただしく町から去っていった。

『……またね……まろ!』

『む』

そんな彼女たちを、マロと夢魔は両手を大きく振りながら見送った。

第52話 効果音

森の中を進む悠は、明らかに苛ついていた。
その理由は、至ってシンプル。

「……邪魔だ」

鬱蒼と生い茂っている木々が邪魔だから。
が、それは森なので仕方がないことである。

「あー、めんどい」

悠は無表情でそう言って足を止めた。

そして、ポケットに突っ込んでいた右手を前方に生い茂っている木々に向けた。

「暗雲の閃光は――」

「つて、止めい?!」

魔法を発動しようとした悠を、麗は勢いのよい突っ込みで止めた。

「……なんだ?」

そんな彼女にイラッとした顔を向ける悠。

「“なんだ?” じゃないわよ!? 何、自然破壊万歳みたいなことやらかそうとしてるの?!」

「真っ直ぐ行っただ方が速いだろ？」

「いや、そういう問題じゃなくてね！？ いい?! そんなことをしたらきつとこの森に住むリスとか小鳥とかが……」

面倒臭いからという理由で大規模な自然を破壊しようとしている悠の考えを変えさせようと、必死になって突っ込みを入れる麗。

「でも、確かに急いだ方がいいと思います、です」

そんな彼女の隣で、鈴がいつもの調子で口を開いた。

「へ！？ りっ、鈴まで何言っ……」

「葵はあの恒に拐われた、ですよ？」

鈴は麗の発言を遮って、

「……もしかしたら、今頃葵、襲われているかも、です」

彼女の努力を無に帰す一言をさらりと口にした。

「破滅をもたらす……!」

「きゃあああああ!？」

直後、悠は前方に広がる森を盛大にぶっ飛ばした。

勿論、この森に住むリスとか小鳥とかのことなんかお構い無しに。

「死神殺ス……!」

邪魔な木がなくなり視界は絶好調。

悠は思い切りそう叫ぶと、素晴らしい速さで走り出した。

「ああ！？ 折角追い付いたのに！！ ちょっと待ちなさいよ、悠
?!」

みるみる小さくなっていく悠に叫んだ後、

「鈴！ 何、火にガソリンぶっかけるようなこと言ってるのよ?!」

麗は悠に大爆発を起こさせた鈴に突っ込みを入れた。
すると、

「……ウフフ」

「!?!? 鈴——?!」

麗は驚き、固まった。

「人が驚き慌てる様は、いつ見ても面白い、ですね」

何故なら、いつも無表情な鈴が、愉快げに笑いながらそう言ったから。

「え？ りっ、鈴さん？」

「ウフフフフフフフ」

（この娘誰ええええ?!）

同時刻。

『月光』

「させませーっ！っ！」

振り下ろされた大きな鎌、鎌子を剣で止めた葵は、死神の左手に氣付き、素早く後ろに跳んだ。

『月華^{げっか}』

振り下ろした鎌子を振り上げながら彼を追う死神。

——鈴の言う通り、葵は死神に襲われていた。

「し、死神さん、どうして急にこんなことっ?！」

その攻撃も同じように剣で止めた葵の問いに、

『第9ステージのボスのオレ様に勝てないようじゃラスボスに勝て

ないからだ』

死神はそう答え、彼の額に左手の人差し指を当てた。

「――！！」

『どっかーん』

しまった、と葵が思うより先に、死神はいつもの抑揚のない声を発した。

直後、

「うわあ！？」

その指先で本当にどっかーんと爆発が起こり、葵は後方の壁に叩き付けられた。

「ゴホッ！　っうー……！！」

痛がる隙も与えないよう、死神が不敵な笑みを浮かべて銃の形にした左手をこちらに向けたので、葵は慌てて壁を蹴った。

『ばーんばーんばーん』

「なんなんですか、その攻撃はああ！？」

死神が発した効果音の通りにバンバンとこちらに向かってくる弾を避けながら、葵はわけが分からないと言つようにそう叫んだ。

『む？　知らないのか？』

彼の言葉に、死神は小首を傾げながら、

『言葉には、魔力がある』

と、言った。

「なんか聞いたことがありますけど、多分意味が違いますよね?!」

『フッフッフッ。葵、避けてばかりじゃオレ様に勝てないゾ』

攻撃を避けながら必死になって突っ込みを入れる葵の上半身と下半身を切り離すように、死神は鎌子を横一直線に振るった。

『げっりん
月輪』

「させませんっ!!」

「……………」

先程まで森だった所を抜けた悠は、大きな沼の前で立ち止まっていた。

「はあっ……はあっ……やあつと……追いついてやったわよコノヤロ」……」

「……です……」

彼の後ろから麗と鈴が息を切らせてやって来た。

「……」

しかし、悠はそれにはまったく反応せずに沼に目を落としている。

「……？ どうしました、ですか？」

「シカト？ シカトですか？」

そんな彼の隣に、鈴と麗は別々のことを言いながら移動した。

「っ！！」

「きゃあ？！」

そして驚きの声をあげた。

『おお？ おうおう、女連れとは色気付いてんな』

そこに来て初めて、水面から顔を出している二匹の河童が目に入ってきたから。

『これですます怪しくなっ たな』

『おう。人間を連れている河童なんて聞いたことがない』

二匹の河童が意地の悪そうな笑みを浮かべて悠に向かって言うと、

「は？ 馬鹿か、貴様ら？ これは食糧に決まってるだろ」

悠はさらりとそう返してみせた。

「って、何言ってるのよ、悠？！」

「もしくは身代わり」

「いや、ふざけんじゃないわよ？！」

「あるいは下僕」

「いやいや、もっとふざけんじゃないわよ？！」

「だからここを通せ」

「シカトですか！？」

悠は横から入る麗の突っ込みを綺麗に無視し、河童たちに言った。

『だから何度も言ってるのだろ？ 通りたかったら此処から3KM
東に進んだ所にある橋を通れ』
きろみーん

「馬鹿か、貴様は？　ここを真っ直ぐ行っただ方が速いに決まってるだろ」

『だから駄目だって！！　ここはオレたち河童が住む神聖な沼であつて、お前のような人間が入っていいような場所じゃないの！！』

「だから、俺はその河童様だと言ってるだろ？」

『『く……』』

何度言っても同じようにしか応えない悠に、河童たちは顔を見合わせた後、

『……分かった。そこまで言うなら、』

『お前が河童だという証拠をオレたちに見せてみる』

と、悠に言った。

（（証拠?!））

それを聞いて、鈴と麗の目が輝いた。

そして、二人はその目をばつと悠に向け、わくわくしながら彼が次にどう出るかを待った。

（（甲羅!?　それともお皿?!））

「……」

そんな二人はいないものとして考えた悠は、漆黒の瞳を閉じて、静

かに息を吐いた。

「……………これでどうだ」

「『！！』」

それは、まばたきの間の一瞬の出来事。

悠が再び目を開けた時、彼の肌の色は、人間らしい赤みを帯た色から、爬虫類のようなザラザラとした緑色になっていた。

これは、目の前にいる二匹の河童とまったく同じ色。

「ゆ、悠、それ……………」

「ずっと魔法で隠していた……………ですか？」

「……………」

二人はいないものとして考えているせいか、悠は二人のかすれた声にも応えなかった。

『お、おい……………もしかするとアイツ本当に……………』

『い、いや！ まだ分からねえぞ！ ここは長老に確認を……………』

「……………その長老というのは何処にいるんだ？」

悠は、分からずやな河童たちに小さく舌打ちをしてそう尋ねた。

『は？ そんなの町の中に決まって……………』

「あつそ」

河童の答えを聞いた悠は、鈴と麗を後ろにどん、と押し、素早く沼に飛込んだ。

「「！！ 悠！？」」

『あ！ クソ！』

『行かせるか！！』

そんな彼の行動に驚く二人と、彼を追う二匹。
そうして水面が静まった頃、

「「?!」」

ドッパン、という豪快な爆音と共に、巨大な水柱があがった。
更にしばらくすると、肌色に戻った悠が、平然と陸に上がってきた。

「ゆ、悠、大丈夫だったの？」

「一体何があった、ですか……？」

「和解してきた」

（（絶対嘘だ））

とか思った鈴と麗に、

「……行くぞ」

悠はくるりと背を向けて進み出した。

「え、ええ……」

「はい、です」

若干疑問を抱きながらも、それに頷いて足を進め始める麗と鈴。
死神の城までもう少し。

第53話 技の名前

「えいつ！」

振り下ろされた剣を鎌子で止めた死神は、空いている左手を銃の形にした。

「！」

『ばーん』

「うわあ!？」

その指先から放たれた魔法の弾が腹を直撃し、葵は後方に吹っ飛んだ。

「ゴホ……いったた……」

葵は剣を杖代わりにして立ち上がり、紫の炎に照らされてフツフツツと不敵に笑う死神を見た。

何度か攻撃を与えることが出来たものの、この様子から、葵の方が負けている。

死神の右手には、長身の彼以上もある、当たったら間違いなく首が飛ぶような危険極まりない大鎌の鎌子が握られている。

しかし、鎌子の攻撃を防ぐと、彼の左手から効果音通りの魔法が飛んでくる。

『そう言えば、葵、技名はないのか?』

葵がどうしようかと考えていると、死神が小首を傾げて話しかけてきた。

「？ ゴホッ、技名……。技の……名前のことですか？」

そう言えばと言われても、それに繋がる会話などしていないのだが、少し息切れた葵が小首を傾げて聞き返すと、

『ん。つけた方が、気合いみたいなものが入るぞ』

死神は、ん、と頷いて地を蹴った。

『月光』

「——っ！」

みたいなもの？ と疑問に思うという隙を見せてしまった葵は、攻撃を避け切ることが出来ず、死神の鎌子によって左肩から右の脇腹にかけて切り裂かれてしまった。

『……な？』

「……っ」

な？ じゃないですよ、と葵は目で訴えながら、

「……技名……」

そう小さく呟いた。

そして、何か閃いたのか、葵はズボンのポケットに手を入れた。

『！　しまった！　絆創膏か？！』

それを見た死神は目を見開いてそう言った。

そして、そうはさせるか、と死神は鎌子を振り上げるようにして、再び葵に斬りかかった。

「違いますっ！」

と言うか、絆創膏で済む怪我ではない。

葵はそう言いながら死神の攻撃を止めた。

すると、やはり死神は左手を素早く葵に向けた。

「えいつ！」

『ばー…ふがつ？！』

その瞬間、効果音を言う為に口を開けた死神の口に、葵はポケットから取り出した棒付きのメロンキャンディを突っ込んだ。

「——ええと、みじん切りっ！！」

死神の動きが止まった隙について、葵は夢中で剣を振るまくった。

『ふも……っ！！』

技名の前の“ええと”が気になるが、その名の通り、死神は葵の剣によって縦横に斬り刻まれた。

その衝撃で後方に飛んだ死神は、飴が口に入っているせいか、くぐもった悲鳴をあげながら弧を描き、仰向けに倒れた。

「……悠から……スピア貰つてよかった……」

少しでも出血を止める為に傷口に手を当てながら、ポケットに忍ばせておいた例のポケットのスピアを見て言う葵。

「……はあ……はあ……はっ!？」

それから目を離して、床に倒れている死神を見下ろした葵は、息切れの途中でハッと我に返った。

「だっ、大丈夫ですか、死神さんっ?!」

葵は倒れたまま動かない死神に慌てて駆け寄った。

『フッフッフッ。大丈夫じゃないに決まってガハゴホッ』

「わああ!？　しゃ、喋らないでくだゴホゴホッ」

そして葵も倒れた。

『……フッフッフッ……葵、オレ様、この世のものとは思えないほどキレイなお花畑が見えるぞ?』

「……ふふ……僕はこの世のものとは思えないほど綺麗な川が見えます……」

二人が幸せそうな顔でそんなことを言っていると、

「無事か、葵?!」

部屋の扉が爆発音と共に豪快に吹っ飛び、そこから悠が現れた。

「……葵……！」

血を流しながら倒れている葵を見付け、悠は慌てて彼の元に駆け寄った。

「——っ」

そして悠も倒れた。

「もう、待ちなさいって言うてるでしょ……って、死体が三体?!」

少し遅れて部屋に辿り着いた麗は、床に転がっている死体なのに四体ではなく三体の死体を見て、

「鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴……！」

夢中になって鈴を呼んだ。

「一回呼べば分かります、です」

すると、すぐにそこへやって来た鈴に、

「鈴っ、三体っ、早くっ、死体がっ、回復っ……！」

麗は三人を指さしてわけの分からないことを必死に訴えた。

「……成程、この死体がゾンビにならないうちに早く始末しろ、と

「？」

「違う違う違う違う違う違う違う違うわよ?!」

そう平然と言いながら三人の元へ移動する鈴に、麗は首をブンブンと横に振って言った。

「……白魔道士ジョーク、です」

そんな彼女に鈴はさらりとそう言った後、倒れている三人を見た。

（白魔道士ジョーク……？）

「葵と恒は傷のせいで、悠は魔法の使いすぎのせい、ですね」

疑問を浮かべている麗はほっといて、鈴はそう言った後、

「癒しの風」

と、呪文を唱えながら、杖の先で床を突いた。

「……くう……」

「……」

『ぐーすかぴー』

すると、回復した三人から寝息が聞こえてきた。

「……」

『ぐーすかぴー』

「……こいつ、本当に寝てるの？」

『ぐーすかぴー』

「……はい、恐らく……」

『ぐーすかぴー』

「……」

死神のいびきを不審に思いながら、鈴と麗は、ベッドに運ぶのは無理なので、床で寝ている三人に布団をかけてあげた。

第54話 好き

『む……』

ゆつくりと目を開けた死神は、いつもより更に眠たそうな目で、まるで朝起きて眼鏡を探している人のようにきよろきよと何かを探し始めた。

『フッフッフ』

彼が探していたものは、彼の近くの床に、奇跡でも起きたのか、棒を足にして真っ直ぐ立っていたメロンキャンディ。

お目当てのものを見付けられた死神は、それを満足そうに口に入れて再び眠りに落ちた。

「……う……？」

目が覚めた葵は、しばしばとまばたきをした後、むくりと起き上がった。

「……此処は……？」

寝起きの声でそう呟いて辺りに目をやる葵。

目に入ってきたのは、紫色に照らされた部屋。

『くーくかひー』

「……」

そして自分の右隣の布団には死神が、左隣の布団には悠が眠っている。

——此処は、死神の城。

「あれ？ 治ってる」

此処が何処だか思い出した葵は、自分の傷が癒えていることに気が付いた。

そしてきつと、隣で飴をくわえたまま元気に不自然ないびきをかいている死神も回復しているのであろう。

「此処に悠がいるってことは…… 鈴は何処にいるんだろう？」

反対隣で静かに眠っている悠を見て、あと二人もこの城にいたいと思つた葵は、鈴にお礼を言うべく立ち上がり、広い部屋から出ていった。

『んん…… へほんひゃんひい……』

口に飴が入っているせいか、寝言のせいか、死神は何かふやふや言いながら寝返りを打った。

棒がついている飴をくわえながらの、危険極まりない横にごろごろ三回転。

「『……っ？』」

ごっつん、と何か額に硬いものが当たり、悠と死神は同時に目を開けた。

「『……』」

そして目の前にあるお互いの顔を見て、二人は同時に固まった。
二人の間に流れる沈黙。

それを破ったのは、おもむろに口から飴を離した、死神。

『河童少年、大胆……』

「壮麗なる龍は――」

そう言って、なにやらもじもじと恥ずかしそうに布団で顔を隠した死神に、悠が彼の中で一番強い魔法をお見舞いしようとしたところ、

「！ おはよう、悠。起きてたの？」

「！」

葵がそう言いながら部屋に入ってきた。

その声に驚き、そしてこの状況を勘違いされては困ると、悠はバツと振り向き、

「ご、誤解だ、葵！！ 俺にそんな趣味はない！！」

と、必死になって訴えた。

「……？ 誤解？ まだ寝てるの？」

悠の訴えを聞いて、葵はきよとした顔で小首を傾げた。

「って、そんなわけないでしょ？！」

「いたっ!？」

すると、葵は麗に後ろから頭をスパーン、と勢いよく叩かれた。

「……悠、嘘はいけない、です」

「は？」

彼女の隣で鈴がいつもの無表情で言うと、悠はそれを一言で聞き返した。

「何を今更——」

「あ! 死神さん! あの傷、鈴が治してくれたんですよ」

そんな彼に鈴が何か言うとしたところ、麗に叩かれてずれた視界に死神が映ったのか、葵が気付いたようにそう言った。

『何!? そうだったのか?!』

「はい」

寝ている状態からバック転をして起き上がるという、確かに凄いが意味不明な行動で自分の驚きの度合いを表現した死神に、葵がこくりと頷くと、

『ありがとう、白魔少女』

「いえ、あなたは葵と悠のついで——」

『好き』

と言って、死神は鈴をふわりと抱き締めた。

「……」

間。

「え、えええ！？ ラヴストーリーは突然に?!」

死神にすっぽりと包まれているので鈴の表情は分からないが、その隣で面白そうにはしゃぐ麗。

「あと、麗がお布団をかけてくれたんですよ」

そのまた隣で、葵はくすりと笑いながらそう言った。

『ありがとう。盗賊少女も好き』

「な——?!」

すると、死神は鈴を離し、今度は麗を優しく包み込んだ。

「なな、何するのよ!?!」

顔を赤くした麗が死神の腕からどうにか脱出してそう言っ

『む？ 感謝のキモチを表現してみました』

死神は何故か敬語を使って答えた。

「か、感謝の気持ち？」

『ん。またの名を、オトモダチのしるし』

聞き返してきた麗に、死神は少し恥ずかしそうな笑みを浮かべて答えた。

「……お……お友達の、印……？？」

「わあ、よかったね、二人とも」

死神の言葉がよく理解出来なかったのか、リピートした鈴と麗に、葵はくすりと笑ってそう言った。

「……え？ 何？」

「……と言うことは、恒は葵をお友達として好き、と？」

「詰まり、恒はアイツがお友達だと思った人には誰にでも抱きつくと??？」

ようやく状況を飲み込むことが出来た麗と鈴は、その場でコソコソと小会議を開いた。

「……ただの変態だな」

死神の後ろに立っている悠がぼそつと呟くと、

『……フッフッフ。河童少年、自分だけオレ様にぎゅってされてないからすねてるな』

死神は振り向き、不敵に笑ってそう言った。

「すねるか、どアホ」

『アホじゃない。バカだ』

「黙………っ??」

何か言い返してきた死神を黙らせようとした途中で彼が何を言ったのか気付き、調子が狂わされる悠。

「と言うことは、悠、チャンス到来、ですね」

ミニ会議の結論が出た鈴と麗は、顔を見合わせて頷き、二手に分かれて早速行動に出た。

「ほら、早くいきなさいよっ!」

「ばっ、だ、だから触るなって言ってるだろ!??」

背中を押そうとした麗から素早く逃げる悠。

「? どうしたの、鈴?」

「葵、今、悠から好きだと言う告白がある、です」

葵の背中を押しながら、うっかり内容を喋ってしまった鈴。

「あ」

しまった、と口を手で塞ぐ鈴。

「わあ、本当？」

すると、葵は自分の前に立っている悠を見て、

「僕も大好きだよ」

いつものようにくすりと笑ってそう言った。

「「!!」」

その言葉を聞いて、後ろに気を取られていた悠は葵に顔を向け、鈴と麗は予想外だったのか、ぱきつと石のように固まった。

「だって、悠は僕の一番最初の友達だもん」

石化した二人に気が付かずに、聞かれたわけでもなく理由を言った後、

「これからも、ずっと友達でいようね」

葵は素敵な笑顔でそう言った。

「「っ!!」」

石化していた二人は、葵の最後の一言で音もなく嘔き出した。

そして、これを聞いた悠の顔を見てやろつとそちらに目を向けた。

「ああ。勿論だ」

「「!？」」

が、予想外の展開再び。

悠はその整った顔に微笑を浮かべて葵の言葉に同意していた。

『ふむ。葵のオトモダチならオレ様ともオトモダチだな。ぎゅー』

「その考えは力一杯否定するぞ」

死神の抱きつき攻撃をひらりとかわす悠。

『フッフッフ。河童少年はシャイボーイなのか。じゃあ、これあげる』

そう言つて、持っていた食べかけのメロンキャンディを悠に差し出す死神。

「いるか」

『イルカ?』

「アホか」

『バカだ』

「ふふつ、二人とも面白いね」

そんなほのぼのとした三人の後ろに、鈴と麗は呆然と立っていた。

「……何？　詰まり、今まではただの素晴らしき友情劇？」

「……今までは、ただの鈴たちの勘違い……？」

「……」

「……」

「……詰まんね」

テンション反比例。

第55話 おにぎり

「悠……あんたにはがっかりだわ」

「俺も、お前にはがっかりだ」

朝食の席で、溜め息をつきながら麗が言うと、悠はおにぎりから口を離してそう返した。

「はあ？ こおんな素敵な麗ちゃんの何が……」

「不味い」

麗の発言を遮るように、悠は一口食べただけのおにぎりを彼の皿の上に戻し、それを自分から遠ざけた。

「な、なんですって!？」

悠の聞き捨てならない発言に声を荒げる、本日の朝食係、麗。

『ん？ そうか？ オレ様は美味いと思うが。もぐもぐ』

すると、もぐもぐとおにぎりを食べながら死神がそう言った。

「でしょでしょ!？ ほら見なさいよ！ 悠の舌がおかしいんじゃないの？」

「舌がおかしいのはあの甘党の方だろ」

それを聞いて、麗が勝ち誇ったように言うと、悠はさらりと返した。

「……………？ 甘党？」

何故そこで甘党という言葉が出てきたのかと小首を傾げる麗。

「甘いものが好きとか、理解不能だな」

なんであんな不味いものが好きなんだ、と付け足し、悠はいつものようにきゅうりを食べ始めた。

「……………ま……まさか……………」

悠の言葉を聞き、嫌な予感がした麗は、おにぎりを手に取り、それを一口食べてみた。

「……………砂糖と塩間違えたわ……………」

予想通り砂糖と塩を間違えていた麗は、テーブルに甘いおにぎりとお頭をがつくりと落とした。

『もぐもぐ。おにぎりがこんなに美味くなるとは、盗賊少女は天才だな。もぐもぐ』

「……………甘い……………です」

「……………うん。甘いね……………」

そんな彼女の隣で、甘いおにぎりをもりもり食べながら、今の彼女には皮肉にしか聞こえないような発言をする甘党、死神と、一口食

べただけでそれを皿に戻す鈴と葵。

「朝食も終わったこと、ですし、早く次の町へ出発しましょう、です」

口直しにお茶を飲んだ鈴は、何事もなかったかのように話を切り換えた。

「次の町？」

彼女の言葉に、お茶を飲みながら小首を傾げる葵。

「これをマロに貰った、です」

こく、と頷いた後、鈴は例のポケットからチケットを五枚出してテーブルの上に置いた。

「！ わあ、サーカスのチケットだ！」

『いち、にい、さん、しにがみ。よし、オレ様の分もあるな』

「何その変な数え方!？」

それを見て驚く葵と、変なものの数え方をした死神に突っ込みを入れる、シヨックの淵から立ち直った麗。

「……それ、シードリーブスって書いてあるぞ？」

わいわいと盛り上がっている四人に、きゅうりを食べながら悠がさりりとそう言った。

「「え」」

葵と鈴と麗の背後に、ドカーンと雷が落ちた。

「ほ、ホントだわ……」

「し、シードリースって確か……」

「鈴たちが一番最初に訪れた町、ですか……？」

恐る恐る口を動かした後、ゆっくりと悠に目を向ける三人。

「そうだ」

「恒、此处からシードリースへはどう行けばいい、ですか？」

鈴は自分から聞いておいて悠の返事を無視し、死神にシードリースへの行き方を尋ねた。

『ん？ 此处からシードリースに行くには、崖を下って、緑の丘をお花や蝶々と戯れながら進んで、河童が住む大きな沼を越えて、森を抜けて、オバケが出る溪谷から離れるようにドラゴンが静かに暮らす海に向かって、白い砂浜ではしゃいで、背の高い叢を掻き分けて、妖精の森を抜けて、ほとんど毎日吹雪いている険しい雪山を越えて、比較的平和な野原をずっとずーっと歩いていけば、そのうち辿り着くぞ』

すると死神は、見事に四人が歩いてきた道のりを逆方向に進めばいいと言った。

「……最悪……」

「……です……」

彼の言葉を聞いて、がつくりとテーブルに頭を落とす鈴と麗。

「ほ、他に道はないんですか、死神さんっ？」

お願いするように葵が死神に尋ねると、

『此処から真っ直ぐ行くとすぐ着くぞ』

死神はあっけらかんと言い放った。

「「え？」」

硬直。

「ぷっ……あの城、此処からよく見えるぞ？」

間が抜けたような顔をした三人を見て、悠は愉快げに笑いながら窓を指さしてそう言った。

「「……」」

そこからは、確かに背の高いシードリース城を見ることが出来た。

「目指せ甲子園……！」

『あーれー』

「集中豪雨う！！」

「ぶ。こんな攻撃が俺に当たるとでも……」

「もう、悠と死神さんの意地悪っ！」

「——！？ や、止める、葵っ？！」

「みじん切りっ！！」

こうして、一行はシードリーブスに向け、賑やかに出発したのであった。

第56話 怖がりと甘党

あんな崖の先っぽにどうやって建てたのだろうと不思議に思うような死神の城を出て、死神の城からすぐ近くに見えたシードリーブスに行く為に、一行は暗い森の中を歩いていた。

「……なんなのこの森？　なんか黒い霧みたいなのが漂ってるわよ？」

まだ昼前の筈なのに、辺りに漂う黒い霧のせいでこの森は暗くなっている。

それを不思議に思った麗がそう言つと、

『此処は“黒霧の森”だからな。もぐもぐ』

死神はイチゴゼリーを食べながらさらりと答えた。

「まんま、ですね」

『フッフッフ。シンプル・イズ・ベストだ』

鈴の発言に、フッフッフと不敵に笑う死神。

「お……おっ、オバケとか出ないよね、悠……？」

彼の後ろを歩く葵が、悠のコートの袖を掴んで恐る恐る尋ねると、

「なっ、何を言っているんだ葵っ？！　そんなもの、いないに決まってるだろっ！？」

悠は妙なテンションでそれに答えた。

『……』

それを聞いた死神は、担いでいた鎌子を軽く振り、

『河童少年、あれはなんだ？』

すつ、と右手の人指し指で前方を指さして悠に質問をした。

「は？　と言うか、“河童少年”って呼ぶ……」

自分のことを“河童少年”と呼ぶ死神にもの申そうとしたところ、悠は死神の右手の人指し指の先にある、認めがたいものを見てしまった。

認めがたいもの。

それは――

「ひ……火の玉……」

「暗雲の閃光は破滅をもたらす！！」

宙に浮き、無方向に動き回る、紫色の火の玉。

葵がかすれた声で言った直後、悠はその火の玉を、前方に広がる黒霧の森もろともぶつ飛ばした。

が、攻撃の範囲ではない自分の背後には、まだ黒霧の森が残っている。

「走るぞ、葵！！」

「う、うんっ!」

と言うわけで、悠は葵の腕を引っ張るようにして、砂煙を巻き上げながら走り去っていった。

「……」

鈴と麗は、ぽかんと口を開けて走り去っていく二人を見ていた。

『フッフッフ。なかなか可愛いな。河童少年も』

その隣には、鎌子を振って産み出した紫色の火の玉を指先で踊らせながら愉快げに笑う死神がいる。
そんな彼を見て、

（（こっ、こやつ、やりおる……!））

とか、何故か武士風に思う鈴と麗であった。

「ごごご、ご注文は、おおき、おき、お決まりになまり、お決まりになりましたましたかあつ?!」

「あ、はい。中辛4つと、……ええと、死神さんとマロは?」

どもりまくりのウエートレスに声をかけられ、葵はそう答えた後、向かい側に座っているマロと死神に小首を傾げながら尋ねた。

『まろ、甘口がいいまろっ!』

『オレ様は超激甘がいいまろ』

すると、マロが元気よく答えた後、死神が抑揚のない声でそう言った。

シードリーブスの町でマロと合流した一行は、

『サーカスまでまだ時間があるまろ!』

ということ、お腹がすいたので、取り敢えず近くにあったカレー屋にやって来たのであった。

「かつ……かしこまりました!」

ウエートレスはどもりながらそう言つと、奥の方へと下がっていった。

奥の方で何やらきやいきやい騒いでいる様子からみると、彼女がどもりまくっていたのは、恐らく悠と死神が原因だろう。

「相変わらず大人気ね」

その様子を見て、麗はお冷やを頂きながら、

「オバケが怖い悠くんは」

ニヤリと人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべてそう言った。

「……嫌い黙れ」

悠はコップを握り締め、斜め下の床を睨みつけながら悔しそうに言った。

「そう言えば、マロは可愛いから許すけど、あんたが超激甘ってどういうことよ？　いくつでそんなこと言ってるのよ？」

悠のその反応を見て満足げに笑いながら、麗はさらりと話題を変えた。

『フッフッフ。15だ。そして、オレ様は辛いのが嫌いだからな』

「ならカレー屋にくるな。て言うか消えろ。失せろ。絶えろ。果てろ。滅びろ」

不敵に笑いながら答えた死神を、悠は忌々しそうに睨みつけた。貴様さえいなければ、とでも言いた気な、殺気のこもった目で。

『ゆづこりん冷たい』

すると、死神はぷうつと膨れてそう言った。

「誰がゆうこりんだ!？」

それを聞いて、鈴と麗は噴き出しそうになったのを力一杯押さえ込み、悠は怒鳴ると同時に握り締めていたコップを砕け散らせた。

「わあ、悠、凄い!」

『あおぴょん、ずれてるまる』

それを見て驚いた葵に、マロは右手を振りながら突っ込みを入れた。

『む? “河童少年って呼ぶな”って言っただろ?』

「壮麗なる龍は――」

「ちよっ!?! こ、ここはお店の中よ?!」

「悠、落ち着く、です!」

「黙れ!! もう葵以外みんな死ね!!」

「こんな時でも葵至上主義?!」

「あの、ごめんなさい。このコップ、壊しちゃったんですけど……」

『あおぴょん、流石まる』

などと、一行がギャーギャー騒いでいると、

「お待たせしました。超激甘カレーのお客様？」

何事にも動じない、つわものウェーターが超激甘カレーを持ってやって来た。

「「?!」」

同時に、葵と鈴と悠と麗が固まった。

『おお。オレ様のだ』

「はい、どうぞ。他のお客様はもうしばらくお待ちを――」

「「帰ります」」

死神の前に超激甘カレーを置いたウェーターの言葉を遮り、四人はスタスタとカレー屋を出ていった。

『む？ どうしたんだ？』

『150%の確率でそれが原因まる』

『むっ……超美味しいのに。もぐもぐ』

マロが指さした超激甘カレー、ルーの代わりにチョコレートがかかったご飯を食べながら、死神はそんなことを言うのであった。

第57話 魔王or少女

『もぐもぐ』

『……美味しいまるか？』

『ん』

マロの言葉に、死神はチョコレートカレーを食べながら大きく頷いた。

『……そう言えば、むうちゃんはどしたんだ？』

チョコレートカレーを食べ終えた死神は、ホットチョコレートを飲みながら、小首を傾げてマロに尋ねた。

『……むうちゃんはロバートに愛の告白をしに行ったまる』

お前どんだけチョコ食ってたよ、とか思いながらマロが答えると、

『ろばあどっ？』

死神はチョコレートアイスを食べながら聞き返した。

『まる。サーカスにいるホワイトタイガーさんのお名前まる』

マロはそう言っている途中で、

『はっ！ サーカス！！』

壁に掛った時計にバツと振り返った。

『ままままるー！！ 遅刻しちゃうまるー！！』

そしてマロは慌ただしくカレー屋を出ていった。

『いつてら〜』

ヒラヒラと手を振りながらチョコレートアイスを食べ終えた死神は、

『ん？ 誰もいない』

食後の紅茶に砂糖を入れながら、自分の連れが誰もいなくなっていることに気が付いた。

『ふむ。まいったな』

実は一銭も持っていなかった死神は、飽和状態になるまで砂糖を入れた紅茶をぐびーっと飲んだ後、

『ちやお』

と言って、カレー屋から、フツと姿をくらました。

「「・・・」」

それをたまたま目撃してしまった店員は、おいおい消えたぞアイツ？！ と驚く前に、

「「食い逃げだー!!」」

と、叫んだそうなの。

「はあ……食欲が全然出ないわ」

レストランを出た麗が、あの超激甘カレーのせいだわ、と溜め息をつきながらそう溢すと、

「そりゃ、あれだけ食べばな」

後ろから悠の冷ややかな突っ込みが飛んできた。

「な、何よそれヒトを大食いみたいに!!」

「自覚してたのか。意外だな」

「シャー!!」

悠の挑発に乗ってしまい、猫ともコブラとも言い難い声を発する麗。

「楽しそうだね」

「楽しそう、ですね」

そんな二人を見て、くすりと笑う葵と鼻で笑う鈴。

「……そう言えば、葵は恒に勝った、ですよな？」

「? うん。どちらかと言えば相撃ちだったような気がするけど」

突然の話題転換に、疑問符を出しながら葵が答えると、

「……と言うことは、残るはラスボスだけ、ですね」

鈴がさりとそう言った。

「あらま。そう言えばそうね」

「長かったようで、長かった、です」

「うん。長かったって言おう?」

そんな会話をする麗と鈴の隣で、

「あれ? 第5ステージは?」

葵は疑問符を出しながら小首を傾げた。

「……それなら倒したぞ。葵が死神にさらわれてるうちに」

すると、悠がさらりとそう言った。

「え？ そうだったの？」

驚いた顔をした葵に、こくりと頷いて答える悠。

「そつか。じゃあ、一体どんなのがラスボスなんだろうね？」

そう言いながら、うーん、と首を捻る葵。

「そんなの決まってるじゃない！ 魔王よ、魔王！」

そんな彼に対して、麗が自信ありげに言った。

「？ 魔王？」

「だってここはゲームの中なのよ？ ゲームのラスボスって言うたらやっぱり魔王でしょ！」

再び疑問符を出した葵に、麗は当然のようにそう言った。

「それは分からない、ですよ」

胸の下で腕を組んで、うんうんと頷いている麗に、

「……もしかしたら、ただの少女かも、です」

と、鈴が言った。

「ええ〜？ 魔王よ、魔王！ ロープレだったらハッピーエンドになるのが王道でしょ？ 勇者様が魔王を倒してお姫様を助けて」

そんな彼女に、不満そうに口を尖らせながら麗が言つと、

「……成程、悠が麗を助けて？」

鈴がさらりと聞き返した。

「そうそう。悠が私を――って、ななな、何言わせてんのよ、鈴？
！」

危うくともんでもないことを言いそうになった麗は、顔を真っ赤にして鈴に突っ込みを入れた後、

「う、う」誤解だからね、悠！？」

そのまま悠に向かって必死になって訴えた。

「は？ お前が産まれてきたことが誤解だバーカ」

すると、悠はさらりとそう返し、

「いいか？ 魔王っていうのはだな……」

「うんうん」

葵に魔王の説明の続きを語り始めた。

「「……………」」

彼の態度に口をぱくぱくさせる麗と、あらまあ、と気の毒そうに彼女を見る鈴。

「ぶ…………ぶつ…………ぶつ飛ばす!!」

麗が腹の底から怒りの叫びを発すると、

「「!?!?!」」

ドカーン!! と、町の中で何かが本当に大爆発した音がした。

「何事だっ!?!」

「ば、爆発…………?!」

「麗、まさか…………」

「ち、違っ!! 私じゃないわよ!?!」

もくもくと爆煙があがっている場所に目を向けた四人がそんなことを言っていると、

『…………サーカスの会場からだな』

いつの間に現れたのか、葵の隣で死神がそう言った。

「サーカスの、会場?!」

もう慣れたのか、彼が当然現れたことに対しては誰も突っ込まない。

「ま、まさか、この爆発はマロが?!」

「んなわけあるかあ!？」

「いたっ?!」

真剣そのものの表情で言った葵に麗が突っ込みを入れると、

『いや、んなわけあるぞ』

死神は首を横に振ってそれを否定した。

「え？」

小首を傾げて死神を見た麗と同じように、彼に顔を向ける三人。

『——あいつはラスボスだからな』

そんな彼らに、死神は静かにそう言った。

第58話 起承

『お、遅れてごめんなさいま……ろおほ！？』

カレー屋から猛ダツシユでサーカスの大きなテントに戻ってきたマロの腹に、何か丸いものが勢いよく突進してきた。

『むー！！』

彼女の腹に丸いもの、それは、紫色の真ん丸い犬のぬいぐるみのような魔物、夢魔。

夢魔はマロの腹から、長い耳をパタパタと動かして飛び、彼女の顔の前に移動すると、酷く焦った様子で、むー、と鳴いた。

『ふ……不意打ちはいけないまる……』

死闘の後の勝者のように、かつこよく口を拭いながらマロが夢魔にそう言つと、

『むーむーむーむー！！』

夢魔は短い手足をバタバタさせながら必死に何かを訴えてきた。

『まるえ！？ ロバートに愛の告白したら、デートしよう、って言われたから、喜んで檻の鍵を開けたら、檻から出た瞬間ロバートが暴れて出して団長さんたちに襲いかかった？！』

夢魔語を解読し、ご丁寧に説明口調で驚くマロ。

『むーむー!!』

そんな彼女の服を引っ張りながら、お願いするよつに鳴き叫ぶ夢魔。

『まろ、分かってるまろ。団長さんは、まろを拾ってくれたいひとまろ』

『むー!!』

マロと夢魔は、顔を見合わせて大きく頷いた。

『さあ、団長さんたちを助けに行くまろよ、むーちゃん!!』

『むー!!』

マロはトンガリ帽子のなかに夢魔を入れるとテントの中へと入っていった。

『団長さん!!』

「! マロちゃん、こっちに来ちゃダメよ、早く逃げて!!」

この場所にやって来たマロを見るなり、荷物やら大道具やらの陰に隠れていた女口調の紳士、団長は慌てて叫んだ。

『大丈夫まる！ ロバートはまるが説得してみせるまる！！』

マロは彼と、彼と一緒に隠れているサーカス団の仲間たちにそう言った後、

『と言うか、みんなそんな所に隠れてるより早くここから逃げた方がいいと思うまー……』

彼らに続けて言っている途中で、

『ウガア！！』

『ろおおおおお？！』

背後から大きなホワイトタイガーのロバートに吠えられて、驚いたマロは慌てて団長たちがいる所に飛込んだ。

「ほ、ほら、言わんこっちゃないじゃない……」

『ふ……不意打ちはいけないまる……』

団長の隣で、ばっくばっくいつている胸を押さえ付けながら呟くマロ。

「こんな目に合わせてごめんなさいね、マロちゃん。檻、ちゃんと鍵かけた筈なんだけど……」

そんなマロに、団長が申し訳なさそうに謝った。

『まるろ、昨日捕まえたばかりのホワイトタイガーだから、暴れるのは仕方ないことまる』

帽子のなかで、ビクツと反応した夢魔に苦笑いしながら、

『大丈夫まる！ ロバートはまるが説得してみせるまる！』

マロは先程と同じことを言い、団長たちが止める間もなく荷物の陰から出た。

『ウガア！！』

『まるお？！』

「——！！」

すると、ロバートがマロに飛びかかり、マロはロバートに押し倒された。

『ガルルルルルル……』

『お、おおお、落ち着くまる、ロバート！？ マロはロバートと話
がしたいだけまる！！ そうまる！！ 話まる！！ 話せば分かる
まる！！ 誰だって分かり合えるまる！！ だから、落ち着いて、
話し合おうまる！！ うんうんそれがいいまる！！ って言うか、
まるを食べても美味しくないまるよ？！』

よだれを滴らせ、今にも自分を食い殺そうとしているロバートに、

和解を試みるマロ。

『ガオオオオオオ！！』

『キヤーまろー！！』

しかし、その甲斐もなく、迫力満点の恐ろしい雄叫びをあげたロバートに、マロは多少無理がある悲鳴をあげた。

『みみみ、みんなっ！！ 助けてまー…』

助けを求める為に団長たちに目を向けたマロは、そちらを見て目を見開いた。

『……………』

マロの目に飛び込んで来たもの。

それは、ロバートに突進された時に飛ばされてしまったのであろう、団長たちの足元に転がっている自分の帽子と、その周りに広がる青い血溜り。

そして、手に持ったナイフとその手を青く染めた、団長の姿。

『……………むう……………ちゃん……………？』

直後、マロのなかで消えかけていたものが、どっと溢れ出した。

「マロがラスボスってどういうことですか!？」

『どうもこうも、そのままの意味だ』

葵からの、爆発が起こった場所に向かって走りながらの質問に、鎌子に乗って飛行している死神はさらりと答えた。

「そのままって……」

「でも、ラスボスが魔物に人間を殺すように呪いをかけた、ですよね?」

「……それは、人間が嫌いだからじゃないのか?」

「そうよ! それなのにその本人が人間と一緒に行動してるなんておかしいじゃない!？」

葵に次いで、死神に質問を投げ掛ける鈴と悠と麗。

『んー……75字以内で説明するとだな』

死神は少しだけ思考を巡らせた後、

『あいつが全部の魔物の呪いをかけたのは、あいつが人間の親に捨てられたからで、あいつが人間と一緒に行動してるのは、その人間があいつを拾ってくれたからだ』

と、いつもの抑揚のない声でさらりとそう言った。

「！？ 人間の、親?!」

「それに、捨てられたって――?!」

彼の言葉を聞き、鈴と葵は驚いて目を見開いた。

『魔物は突然変異で産まれてくるからな』

「……人間からでも産まれることがある、ってことか？」

『ん。で、多分、魔物つてことがバレて捨てられたんだろ』

悠の言葉に頷き、重たい話を随分と軽く話す死神。

「て、随分と他人事ね？」

そう思ったのか、麗がそれを口にする、

『まあ、実際他人だしな』

「うおい?!」

死神がさらりとそう言ったので、麗は彼に思い切り突っ込みを入れた。

『おお。で、オレ様が初めてあいつに合った時、その一人で寂しうにしてた他人に言っただけだ』

すると、死神は思い出したように、

『みんなと遊ぶと楽しいぞって』

と、言った。

「！ 恒……」

麗の死神信頼度が回復したところで、

「『！！』」

二度目の爆発が起こった。

「——急いだ方が良さそうだね」

「ああ」

「そうね」

「はい、です」

葵の言葉にそれぞれ頷く三人。

『行くぞ！ 黒マロを止めに！』

・・・。

「つて、ここはボケないでしょ普通！？」

「……台無し、です」

「まだカレーネタを引きずっているのか？」

「“止めに”……優しいですね、死神さん」

その雰囲気上台無しにした死神に、麗と鈴と悠は突っ込みを入れ、葵はくすりと微笑んだ。

第59話 転結

『どうしてまる?』

自分の上にのしかかっていた邪魔臭い虎を爆発の魔法で吹き飛ばし、ゆらりと起き上がったマロが団長に問うた。

『どうしてもうちゃんを殺したまる?』

「ど……どうしてって……魔物だから……」

恐ろしいほどのプレッシャーを放つマロに、団長は、後ろにいるサ―カス団員と同じように震えながら、そう答えた。

『——魔物だから?』

彼の答えを聞いたマロは、彼らに右手を向けた。
すると、その右手の先に、どす黒い紫色の光が集まり出した。

二度も大きな爆発が街中で起こったので、危険を察知し、悲鳴をあげながら逃げ出すシードリーブスの住民たち。

彼らとは逆方向に向かって走る五人は、死神が持っている危険極まりない鎌子のおかげで、通りの真ん中を突っ切ることが出来た。

「！　うわあっ！？」

まだ煙が残る爆心地に辿り着いた、先頭を走っていた葵は、煙の向こうから勢いよく吹っ飛んできた何かに衝突した。

「！？　葵？！」

「何、何！？　人と虎が吹っ飛んできたわよ？！」

突然姿が見えなくなった葵に驚く悠と、先程まで葵がいた場所に数名の人間とホワイトタイガーが小山のように積み重なって倒れているのを見て驚く麗。

「酷い怪我、です」

倒れている人間たちと+αを見た鈴は、彼らが深い傷を負っていることに気が付いて、杖の先で地面を突いた。

『む。サーカスの人だ』

「！」

呪文を唱えようとしたところ、死神が彼らを鎌子の先でつつきなが

らそう言ったので、鈴は目を見開いた。

「……と、言うことは」

「この先にマロがいるってことね」

立ち込める煙に目を向け、悠と麗が静かに言った。
その場に緊張した空気が流れる。

「……きゆうっ……」

「！だ、大丈夫か、葵っ！？」

「い、癒しの風っ！」

それを、サーカス団の下敷きになってしまっていた葵が見事に破壊した。

『む』

鈴と悠と麗がわたたと葵を救出している時に、何か危険なものを感じ取った死神は、すっと鎌子を煙の方に向けた。

それと同時に、どす黒い紫色の光球が煙の向こうから飛んできた。

光球は鎌子の刃に直撃した直後、勢いよく爆発した。

「な、何！？」

鎌子が光球を斬ったおかげで、死神と彼の後ろにいた四人とサーカス団には被害がまったく出なかったが、突然起こった爆発に、麗は驚きの声をあげた。

『ラスボスのお出ました』

彼女の言葉に、死神は、こちらに近付いてくる足音を聞きながら、鎌子を担ぎ直してそう応えた。

「「!」」

死神の発言を聞き、彼と同じ方向にバツと向き直る四人。

『……退くまろ、恒』

そこには、うつ向き加減のマロが立っていた。

『オレ様が此処を退いたらどうする気だ?』

自分に退けと言ってきたマロに、死神が質問で返すと、

『人間を殺すまろ』

マロはうつ向いたままさりと答えた。

「「!」?」

『……退かなかつたら?』

驚く四人の前で、死神がマロに尋ねると、

『お前も殺すまろ』

彼女は短く答え、彼らに向かってどす黒い紫色の光球を放った。

「!?! マロ?!」

「ど、どうしてそんな酷いこと……」

それを予期していたかのように、サーカス団の周りに、自分も含め、透き通った紫色の盾を張る死神と、地を蹴る四人。そうしてマロの攻撃を避けた後、葵と麗が、彼女の言葉が信じられないと言つように聞き返した。

『人間を殺しちゃいけないまるか?』

すると、マロは麗の言葉を遮って、逆にそう聞き返した。

「な、何を言っている、ですか?」

「そんなの当たり前でしょう?!」

その言葉に鈴と麗が答えると、

『人間はまるたちを殺すのに?』

マロは、右手を鈴に向け、左手は麗に向けて不思議そうに言った。

「——!?!」

『そんなの、不平等まる』

そう言った後、マロは言葉を詰まらせた二人に向けて光球を放った。

「っ!!」

「きゃああ!？」

体に触れた瞬間、その光球は勢いよく爆発し、避けきれなかった二人を吹き飛ばした。

『もとはと言えば、そっちが先に攻撃してきたのに』

「!」

『……あいつらが勝手にまろを産んだのに……それまではあんなに優しかったのに……!!』

マロはそのまま両手を葵と悠に向けたので、二人は素早く武器を手を取った。

『あいつらは、まろが魔物だから捨てたまるよ?!』

光球を放ちながら、マロは大きな声でそう言った。

「っ! ……マロ……」

銀色に輝く剣を盾にし、マロの攻撃から身を守った葵は、

「でも、どうして? さっきまであんなに楽しそうに笑ってたのに」

その剣を下ろしながらマロに問い掛けた。

『……煩いまる……』

下を向いたまま、彼の言葉を拒絶するマロ。

「どうして今は泣いているの？」

か細い声を出し、肩を震わせているマロに、葵は悲しげな表情でそう言った。

『——！！……それは、あいつらが……』

彼の言葉を聞き、マロはゆっくりと顔を上げて、

『……あいつらがむっちゃんを殺したからまる……』

「殺——?!」

『——魔物だからってだけで、むっちゃんを殺したからまる!!』

サーカス団を指さし、深紅の瞳から溢れ出る涙を散らせながら思い切り叫んだ。

「……それは、お前も同じだろ？」

そんな彼女に、悠が静かにそう言った。

『ま——!?!』

「壮麗なる龍は全てを呑み込む」

『……ろおお!!』

悠に顔を向けた瞬間、マロは彼の最大魔法に吹っ飛ばされた。

「……マロは今、鈴たちが人間だから、攻撃しているのではない、ですか？」

『うつ!!』

鈴は飛んできたマロの腹を杖の芯で捉え、そのままフルスイングして彼女をかつ飛ばした。

「それに、人間がそんなことするのは、あんたにだって原因があるじゃない！」

『まろお!!』

麗はそう言いながら、宙を舞うマロに狙いを定め、パンチグローブ付きの矢を見事に命中させた。

『……まあ、確かに、あいつはただでさえ嫌われていた魔物に呪いを掛けてより狂暴にしたからな』

彼らの言葉に、透き通った紫色の盾の内側でふんふんと頷きながら呟く死神。

「あ……あなたは私たちのこと殺そうとは思わないの？」

「わ、私たちは、あなたの仲間を殺してしまったのに……」

そんな彼の後ろで、鈴に回復させてもらったサーカス団が、震えながら問い掛けた。

『ん？ ああ……オレ様は魔物だが、元は人間だからな』

「「え——？」」

死神がさらりと答えたその言葉に、サーカス団が疑問符を出したところ、

『……煩いまる』

傷だらけのマロは、ぐぐつと起き上がりながら、ぽつりと呟いた。

『煩いまる煩いまる煩いまるおお！！』

立ち上がったマロは、空を仰いでそう叫んだ。

「うわあっ！？」

「！」

「きゃあ？！」

「っ——！」

同時に、今までよりも更に強い爆発の魔法が四人を襲い、それは彼らを四方に吹き飛ばした。

『……まろが魔物に呪いを掛けたのは、魔物につらい思いをさせた

なくないと思っただからまる』

四人を吹き飛ばした後、マロは静かに口を開いた。

『仲良くなった後に裏切られるくらいなら、始めから仲良くならなければいいと思っただからまる』

「――！」

マロの言葉を聞いている途中で、吹っ飛ばされた葵は何かに気が付いた。

『でも……恒に出会って、団長さんに優しくしてもらって、あおぴよんたちと遊んでもらって、その考えが変わってきて……』

マロは上を向いたまま、ぎゅっと拳を握り締めた。

『それなのに……やっとまた信じられるようになったのに、』

「ま、マロ……」

今にも消えてしまいそうなくらいか細い声で言葉を紡ぐマロ。

『折角守ってあげようと思っただのに、』

「マロ」

小刻に肩を震わせながら続けるマロ。

『折角友達になれると思っただのに――！』

「マロ、聞いて!！」

『まろ!?!』

近付きながら何度呼んでも応えてくれないマロを、葵はそう言いながら鞘付きの剣で殴った。

「『!?!? 葵?!!』」

ぼくつという痛々しい音に肩をすくめながらも、そんなことをした葵に驚く鈴と悠と麗と死神。

『な、何するまろ……!』

頭を押さえてこちらを睨むマロに、

「むうちゃん、生きてるよ?」

と、葵が言った。

『……え?』

葵が何を言ったのか理解出来ずに固まったマロに、

「だって、魔物は死んだら消えちゃうんでしょ?」

ほら、むうちゃん消えてないから生きてるよ、と、言いながら、葵は左手に乗せた、効かないとは分かっているが一応絆創膏を貼っておいた夢魔を見せた。

「『……』」

その瞬間、その場が凍結した。

『まろええええええ?!』

『む』

『ま、まろ……』

鈴に回復させてもらい、マロの頭にちよこんと乗って元気に鳴く夢魔に、複雑な表情をするマロ。

「よかったね。むうちゃん生きてて」

『ま、まろ……』

くすりと笑ってそう言う葵に、複雑な表情をより複雑な表情にするマロ。

「マロちゃん、ごめんなさいっ!!」

そんな彼女に、サーカス団の人たちが深々と頭を下げ、謝った。

『まろ?』

『む?』

彼らの行動に首を傾げるマロと、首はないので体全体を傾げる夢魔。

「……私たち、間違っていたわん。そうよね。魔物だって生き物だもの、殺していいわけないわよね……」

『!』

頭を下げたまま、団長が言った言葉に驚くマロ。

「……なにやらシリアスなこと言ってるが、口調のせいで台無しだな」

「黙るとき」

ぼそつと呟いた悠に小さな声で突っ込みを入れる麗。

「でも、私たちがそうだったように、この世界には魔物を殺すことは普通だっと思ってている馬鹿な連中が沢山いると思うの」

団長はゆっくりと顔を上げて、

「だから、また私たちと旅して、その馬鹿な連中に命の大切さを教

えてやってくれないかしら？」

マロと目の高さを合わせたところでそう言った。

『まろ！？』

『むー！』

『でも、マロはみんなを殺そうとしたまろよ？』

『むー…』

マロは頭の上で嬉しそうにぴょんこぴょんこ跳ねる夢魔を押さえ、

『それに、マロの言うことなんて聞く筈ないまろ』

と、言った。

「私たちだって、むうちゃんを殺そうとしたわ。それに、大丈夫よ」

すると、団長は申し訳なさそうに微笑んだ後、

「マロちゃんはおうちの花形ピエロなんだから」

と、にっこりと笑って言った。

『……！』

『むー？』

『は、はいまる！！』

夢魔が催促すると、驚いて固まっていたマロは大きく頷いた。

『それならまず、魔物の呪いを解かなきゃだな』

『まる！！』

メロンキャンディをくわえている死神の言葉に頷いたマロは、晴れ渡る青空に右手を上げて高らかにその指を打ち鳴らした。

「……これで一件落着、ですね」

「そのようだな」

「よかった。平和が一番だよな」

鈴と悠に続いて、葵がくすりと笑って言うと、

「結局、誰が私たちをこのゲームの世界に呼んだのか分からず終いだわね」

麗がやれやれと肩をすくめながら、溜め息をついてそう溢した。

『まる？ 言ってなかったまるか？』

すると、マロが不思議そうな表情で、

『まる、遊んで欲しかったまる』

『ここはゲームの世界なんかじゃないまろ』

マロは麗に顔を向けてそう言った。

「え？」

「まろろ、覚えてないまろか？」

小首を傾げて疑問符を出した麗に、マロはにっこりと笑って、

「まろはラスボス、ナイトメア。夢を操る魔物まろっ！」

くるりと回ってそう言ってみせた。

「ええええええ？！」

再びの仰天。

「まろろ！」

む

びっくりしている彼らを見て面白そうに笑っているマロの所に、若干漬れながらも、水が入った金ダライを頭に乘せた夢魔がやって来た。

「まろろ、あおぴょん、りんりん、きゅうちゃん、ぞつきー。今まで楽しかったまろ！　また一緒に遊ぼうまろねー！」

金ダライを受け取ったマロは、にっこりと笑ってそれを大きく振り

かぶった。

「うん。僕もすつごく楽しかったよ」

「……可愛い、です」

「まさかの夢オチ!?!」

「待て!! だから何故俺を河童に――!!」

『四名様、現実世界におかえりまろゝ!!!』

有無を言わず四人に水をぶっかけたマロの隣で、

『ちやお』

『むゝむゝ』

死神と夢魔は彼らにひらひらと手を振った。
そして四人は、現実世界へと帰っていった。

最終話 新学期の始まり

「……此処は……？」

目が覚めた鈴が、むくりと起き上がりながら言葉を発すると、

「……僕の部屋……みたいだね」

その隣で、辺りをぐるりと見回した葵がそう答えた。

「……ということは、戻って来たようだな」

「完全なる夢オチだわね」

髪の毛を掻き上げ、溜め息をつきながら起き上がった悠と、なんとなくげんがりしてそんなことを呟く麗。

「あのディスクもなくなってるみたい」

「では、何処からが夢、だったのでしょうか？」

葵の言葉に、小首を傾げて疑問符を浮かべる鈴。

「まあ、ちゃんと帰って来れたんだから良いじゃない！ 結果オーライ、気にしなーい、気にしない！」

「……また、マロたちに会える、でしょうか？」

素早く気持ちを切り替えた麗の隣で、鈴がぼつりと呟いた。

「きしよい」

「ぬがーーーーっ!!」

「早く行くよ」です!」

「ま、間に合ったわ……」

「間に合ってねーよ」

ガラリと扉を開けた息切れ気味の麗がそう言つと、教卓から冷ややかな突っ込みが飛んできた。

「気のせい、です」

「気のせいでもねーよ」

教卓に立っている先生は、出席簿で自分の肩を軽く叩きながら、鈴にも突っ込んだ。

「……そうか、遅刻か。なら、廊下に立って反省でもするか」

鈴の隣で、わざとらしく言う悠。

勿論、当の本人には、そんなことをしようという気は更々ない。

「おお。どんどん反省してくれ、って、ちょっと女子の皆さん？

何、先生にコンパス向けてるの？ え？ それ投げる気？ それ本気で投げる気なの？ ダメダメ。そんなことしたら危ないでしょ？
目に当たったらどうするの？」

しっし、と彼らを追い出すように手を動かした途端、クラスの女子生徒たちに殺気を孕んだ視線と鋭く尖ったコンパスを向けられた先生が両手を前に出してそう言つと、

「えぐる」

悠がさらりと答えた。

「そこ。怖いこと言わないの」

そんな彼に、先生はさらりと突っ込みを返した。

「目にコンパスねえ……」

相変わらず大人気なこと、と呆れながら呟いた麗に続いて、

「……そのまままたこ焼きのようにクルッ、と」

「グロいグロいグロい」

無表情な鈴がぽつりと発言したことに、先生はグロいと連呼した。

「はあ……もういいから座って座って」

「はい」

「です」

「……」

何かを諦めたような先生に言われた通り、自分の席に着く麗と鈴と悠。

「あ、あの、先生、遅れてすみませんでした」

「！ 葵……！ 先生、お前のこと信じてたよ。あれ？ なんだろう？ 前が霞んで見えないや」

そんな彼らと違って、ぺこりと頭を下げて謝った葵を見て、先生は熱くなつた目頭に右手を当てた。

「だっ、大丈夫ですか、先生？ ハンカチありますよ？」

「うつ……本当にいいヤツだなお前……っ……！」

葵が差し出したハンカチに顔を埋める先生。

「えーあーごほん、あー、突然だが、喜べ。今日からこのクラスに新しいお友達がやって来たぞ」

気持ちが落ち着いた先生は、汚れたハンカチをそのまま返そうとしたら、悠にものごつつ睨まれたので、洗ってから返すな、と葵に言っただけ、咳払いをし、やる気のない声で生徒たちにそう言った。

「？ 新しいお友達？」

「……転校生、でしょうか？」

小首を傾げた葵に、小首を傾げ返す鈴。

「転校生！？ わ！ どんな人かしら？！」

「俺に聞くな」

騒がしくなったクラスと同じように騒がしくなった麗を一言で黙らせる悠。

「じゃあ、みんな。せーのに合わせて大きな声で呼ぶぞ。せーの」

台詞に合わないローテンションで、先生はついて来れていない生徒たちを無視して、

「わたるくん」

台詞に合わないローテンションで扉に向かってそう言った。すると扉がガラリと開き、背の高い、紺色の髪少年が教室に入ってきた。

「「?!」」

彼を見て、嬉しそうにキャーキャー騒ぎ出す生徒たちのなかに、無言で目を見開く生徒が四人。

「——転校生の死神 恒くん。みんな、仲良くするよーに」

「ちょお」

そんな四人に向けて、転校生、死神は愉快げに笑いながら右手を振って挨拶をした。

「……」

硬直。

「ええええええ?!」

びっくり。

「きつ、貴様は——!!」

「わあ! 死神さん!!」

「な、何故あなたが此处にいる、ですか?!」

「フッフッフッ」

「フッフッフじゃないわよおお?!」

「死神 恒です。よろびくネ」

「何キャラよおお?!」

クラスの生徒たちが向けてくる視線なんて気にしない、気にしない。

こうして、五人の賑やかな二学期が始まったのであった。

—完—

最終話 新学期の始まり（後書き）

葵

「終わったね」

鈴

「終わった、です」

悠

「終わったな」

恒

「フッフッフ。じ・えんどだな」

麗

「だからなんであんたが此処にいるのよ?!」

恒

「オレ様もお前らと同じ夢を見ていたということだ」

麗

「んなつ?!」

悠

「そんなことより、何故あの腐れピエロは俺と貴様を魔物にしたんだ?」

恒

「“かつこいいからまる”だそうだ」

悠

「ふざけ―…」

鈴

「では、この辺りで、お別れ、です」

恒

「ん。以下は人物紹介だ」

日向 葵

ほとんど毎日笑顔を絶やさないほのぼの剣士。

特技は小鳥や蝶々を指にとめること。

若干天然要素がある。

可愛らしい顔した彼はオバケと水が苦手。

白鳥 鈴

お金と他人が驚き慌てた様を好む白魔道士。

ほとんどいつも無表情な彼女は、良く言えば、クールビューティー。
ぬいぐるみなど、可愛いものが大好き。

石黒 悠

実は河童だった、とっても美形な黒魔道士。

葵にはいつでも優しいが、その他と甘いものには基本冷たい。
きゅうりと他人が苦痛に歪む様が好物。

芦川 麗

ツツコミ担当の、ある意味一番大変だった盗賊。

可愛い服を好んで買い荒らすなど、金遣いが荒い。

特技はピッキングとツツコミ。

お疲れ様です。

死神 恒

旅の途中でいつの間にか仲間になった、ほとんどの言動が意味不明な死神。

何気に美男子さん。

甘いものが大好きで、特にメロンキャンディがお気に入り。

悠

「……前作でもやっていたようだが、これになんの意味があるんだ？」

麗

「それ言ったらお終いよ」

葵

「御愛読していただき、本当にありがとうございました！」

F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5911c/>

ろーぷれ

2010年10月9日21時53分発行